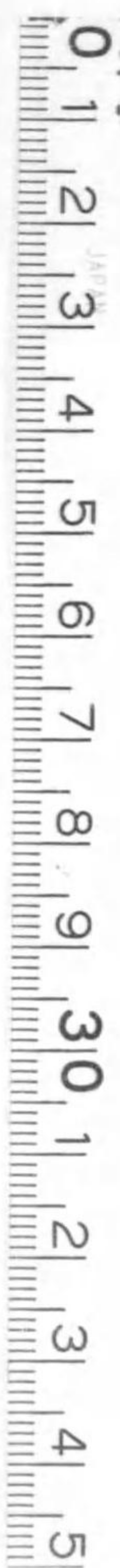


324
678



始



14.6.23

324-678



龜谷聖馨著

華嚴哲學研究

大正
11. 7. 12
內交

華嚴哲學研究序

先哲曰く。定水、心垢を洗へば。文殊、普賢を友とし。智光、情
闇を拂へば。毘盧舍那に肩を比す。宜なる哉言や。華嚴
學人龜谷天尊大居士は。學、古今を貫き。識、内外に通じ。特
に華嚴の幽祕を探り。一乘の玄旨を極む。頃日、華嚴哲學研
究を著はし。弘く之を世に行はん。眞に昏衢の慧燈と
謂ふべし。學者之に由つて指を染むるときは。則ち五海の
淨水、心垢を洗ひ。十智の火光、法身を顯はす。菩提の了義。
其れ茲に在る乎。余隨喜の餘り。一言を述べて序とす。

明治四十年秋九月

華嚴長吏

大僧正

晋

圓

識

華嚴哲學研究序

華嚴經は。釋迦文佛、海印炳現三昧中の所説に係る。大藏經中最勝奇特の妙典なり。然るに卷帙浩瀚。理趣幽玄。佛教專攻の徒も雖も。通涉精透するもの。頗る罕なり。友人龜谷天尊君。曾て此經を研究し。其の妙旨玄趣に於て。極めて造詣あり。頃ころ。一書を著はし。名けて華嚴哲學研究と云ふ。流暢の文を以て無礙法界の妙を説き。平易の語を以て無盡緣起の微を顯はす。加之らす。經の各品に就て。博を約し繁を畧して。善く大要を摘述せり。一たび之を披くときは。一宗の教理。一經の説相。炳然として之を掌に指すが如し。亦、奇特ならずや。世親菩薩、淨土論を著はし。華嚴世界重重無盡の莊嚴功德を讚述して、之を二十九種とせ

(4) り。曇鸞大師之を歎して曰く。夫須彌之入芥子。毛孔之納大海。豈山海之神乎。毛芥之力乎。能神者神之耳。余も亦此書に於て云爾。

明治三十九年三月念日

含潤道人 慧雲 識

華嚴哲學研究序

六相十玄。談何其容易乎哉。謂之有。則成增加之過。常見也。謂之無。則有減損之失。斷見也。謂之一。則僞侷預顛。雜亂因果矣。謂之異。則支離滅裂。分割真如矣。六相十玄。談何其容易乎哉。今之談華嚴佛教者。識見大抵。不能出于有無一異四句之外。而自謂之華嚴。吾未見其可也。友人龜谷君聖馨。潛心於華嚴經之研究。二十有餘年矣。自道如有得焉。頃日。著華嚴哲學研究。講述華嚴教學之哲理。問序於余。余一讀其書。而早知其不可無畫龍點眼一手段矣。乃發一問。以爲序。如何是華嚴法界海印三昧真面目。有無一異四句之外。端的道將來。

明治三十八年九月

子爵 渡邊 國武

華嚴哲學研究序

近世學佛の徒。動もすれば。天台を論じて。天台に背き。華嚴を講ずるも。華嚴に戻り。相を執して名に泥み。河を分ちて幟を立つ。其の餘の宗派。殆んど皆爾らざるはなし。蓋し是れ末法の通弊なり。護法の士。豈に慨歎せざるべけん哉。

道友、天尊龜谷先生は。穎悟絶倫の資を抱き。學内外を該ね。識、古今に亘り。最も華嚴に精し。宿縁の致す所。力を此の宗に盡し。將に絶へたるを繼ぎ。廢れたるを興さんごす。眞に賢首の芳躅を襲ぐと謂ふべし。先生、頃日。華嚴教學に就いて。篇を分ち章を立て。七處九會。三十九品の要文を詳述し、且つ附するに一經の歸趣を以てす。其の老婆親切。

殆んど至らざる所なし。乃ち題を命じて華嚴哲學研究と曰へり。學者是に由つて學ぶときは。則ち華嚴一經の要旨。燦然として觀つべし。學界の慶事。何者か之に加へん。余、先生と莫逆。今、高琴を聞く。豈に節を撃たざるべけんや。敢て不文を省みず。聊か鄙辭を屬し。以て同舟に告ぐと云ふ。

明治四十年夏八月

天台學究 森 部 逞 禪 謹 序

自序

余曾て謂ふ、人生に於ける純正なる宗教は、吾人々類の至高無上なる一切善の根本として存立し。悠久なる人文史上發達の跡に徴するも、他の一般諸學術と共に萌芽し育成し、結實せるを見るべし。故に之を輕視すべからざるは勿論、凡そ社會文化の過程に於ける、必須緊要なる道德的事實として、永久に保全すべきものなりと。

方今、政治、文學、美術、工藝、乃至百般の學術は、日に就り月に將みて、人類知能の啓發、將に其の極致に達せんとし、文華の燦然たる、前古其の比を見ざる所なりとす。此の時に當り、獨り宗教の勢力萎微して振はず、信仰道念地を掃ふて空し。中に就て、我が釋迦文佛の唱道せる佛教は、三千載の時處を閱して、濟

衆救世、德化法界に徧滿す。而して其の佛教の根本法輪たる華嚴の哲理は、あらゆる學術宗教を優越して、嶄然大眞理觀を提唱せることは、素より余輩の一家言に非ずして、古來斯道の學者碩徳の認得して異論なき所なり。然れども、其の所説、餘りに高尚深玄に過ぎて、妙諦遂に窺知すべからずと爲し、信仰の對象として、將た宗教として哲學として、頗る難解難入なるが爲めに、次第に其の勢力を失ひ、曾ては佛陀所説第一の結集として、宣傳攻究せられたりし大經も、白雲深き處、杳かに世法と相隔り、現代の學者と交渉を絶して、明珠徒に深山大澤に埋没し了らんとす。往古、漢土文學の士、聖者の世に遇はざるを慨き、高尚なる音樂の譬を引き、述べたるものあり。曰く、客の郢中に歌ふ者あり、其の始め、下里巴人と曰ふ、國中屬し

て和する者數千人。其の陽阿薤露を爲すや、國中屬して和する者數百人。其の陽春白雪を爲すや、國中屬して和する者數十人。商を引き、羽を刻み、雜ゆるに流徵を以てすれば、國中屬して和する者數人に過ぎざるのみ。是れ其の曲、彌々高ければ、其の和、彌々寡し。

と。宜なる哉至言。蓋し俚耳に入り易ければ、和する者多く、高く眼を着くれば同ずる者寡きの理、古今其の軌を一にすと云ふべし。

之を要するに、華嚴大經の如き、其の教理の餘りに玄妙深甚なる、萬人の能く眞諦に觸れ難く、遂に之を高閣に束ぬるに至れる、故なきに非ずと雖も。又以て人文史上の一大痛恨事たらずんばならず。而して古來、華嚴大經の流布せるは、夫の我

が聖武皇帝の時に在り。當時の碩學之を弘通するに勗めたり。雖も、其の難思なる教理を知るに及びては、漸く之を參究するの徒、罕れなるに至り。時に尊崇護持する道人あるも、餘りに是を神秘視して、到底常識を以て判斷するの際涯に達せずして已む。而かも今日の所謂自由研究は許されず、若し夫れ自由研究の名の下に檢覈し批判し、論斷するが如きあらば、忽ち外道を以て目ざるに至る。加之、賢首大師撰述の華嚴一乘教分記、即ち五教章の如きに至りては、奈良東大寺中の學徒に非ずんば、是を披閱するを得ず、就中、其の中卷たる十立六相の眞理觀に至りては、祕中の祕として、餘人所不見の制を立て、若し強て繙讀する者あらば、冥罰を蒙るゝ稱し、或は生命に關すべしと誠しめしと傳ふ。是れ或は傳ふる者の誣言なるべし。

し。雖も、然れども、當時知識よりも信仰を重んじ、而かも其の神秘的幻想的謬見に墮在せるは、寧ろ笑ふに堪へざる所なりとす。是の如く自由研究は許されず、偶々學者の研鑽する者出づれば、餘りに古人の唱道せる所に追隨し。史家の論評する者あるも、先徳の所説に拘泥して、一步も其の範疇を脱せず。是れ宗教として、又、哲學として、一般餘乘に優越せる人生の根本義を忘れたるものと謂ふべし。

余輩、大に感ずる所あり、既往二十又餘年來、世情を離れ、俗事と遠ざかり、毓英の外、一意專念、斯道に従ひ、此に二十卷の稿を重ね。華嚴大經の史的研究より、或は文學として、或は哲學として、又、宗教としての眞價を體驗し、敢て洩す所なしと云ふには非ざれども、殆んど其の大綱を盡せり。然れども、淺學卑才、

自ら信ずるところ、悉く肯綮に中らず、衷心忸怩たるもの多し。而かも逐次是を上木して、世に公にせんことを期す。又竊に惟ふ、世の學者同好の諸君子にして、古聖先徳の芳躅を襲ぎ、而かも自由に討究して、縦横に大經所説の法門を弘布し、世道人心に益する所あらば、教界の慶幸、佛道の宣揚、蓋し甚だ大なるべきを信ず。尙ほ余は華嚴聖典の、他に比類なきを思ひ、左の巴調を得たり、録して鑽仰の息壤と爲す。

頌華嚴聖典

- 歸命如來解脫門。 大千世界最高尊。
- 三重妙諦離文字。 四法微觀絕語言。
- 六相圓融無等説。 十玄緣起不空論。
- 多歲研精窮聖典。 小心頓悟契真源。
- 願使吾儂增慧智。 長教民衆燦冥昏。

著書偏頼神明力。 將報皇恩與佛恩。
而して又余は、幾と三十年に近き間に、論述したる本論文の、畧ぼ成りしにつきては、感ずる所尠なからず、即ち一絶を賦し、茲に録し、謹で博雅の君子の玉斧を乞ふ。

稱性經王源欲窮。 佛陀遺教擊包蒙。

從頭二十餘年事。 唯在華嚴法界中。

大正十年秋十月

龜谷聖馨

凡例

一 大聖釋迦文佛、一化五十年所宣の法門、廣大無邊なり。雖も、其の基く所を窮むれば、實に菩提樹下の一念に在り。大小、半滿、權實、難易、八萬の法藏は、これに依りて施設せられ、印度に支那に我が邦に、幾と三千年に近き佛教の歴史は、之に依りて開展せらる。皇いなる哉、樹下成道の内觀や。佛の智見にあらずむば、固より窺知する能はざるなり。大方廣佛華嚴經は、蓋し此の内觀を廣演せるものにして、古哲はこれを讚美して、根本法輪と判し、稱性の本教と呼び、或は別教一乘、圓滿修多羅と云へり。本論文は、即ちこの經王の所説に基きて、支那唐朝佛教の偉傑、賢首大師の開闢せる、華嚴經宗の教學を研究せるものにして、是

一 余の過去半生を通じて、心血を注ぎたるものなり。

一 本論文起草に當り、余は能ふ限り、華嚴大經を仰鑽せる、先哲の著書を参照せり。而して其の著述の中には、筆寫未刊の書も多く、古書珍重のもの、亦尠からず。

一 本論文を起草するに際し、余は出來得る限り、先哲の筆格に則さり、斯學の術語を用ゐ、縱令、難解蠹澁の語と雖も、敢て之を改めざらむここに勤めたり。是れ一は以て原聖典の面目を保存し、一は以て先哲の高風を景仰するの意に外ならず。

一 華嚴聖典は、既に述ぶるが如く、釋迦文佛が、始成正覺の時、其の大悟界の眞理を道破せるころにして、佛教各宗各派の源泉たり。而して古來佛教の學者は、これを深遠高

妙なる哲學的宗教として仰鑽せり。故に余も亦之を専ら純正なる哲學的宗教として、其の基本原理を研究したり。

一 本論文は、余が研究二十卷中の其の一部なり。然るに故華嚴宗管長佐保山大僧正、子爵渡邊國武君、文學博士前田慧雲師、道友森部暹禪師等の序文は、今より十餘年前、余の本經研究の結果を、數種に分類して、世に公にせむとせし際、各々惠贈せられしものなり。而して今、全部を上木するを俟たずして、其の一部を公にするに際し、之を卷首に冠せり。唯、遺憾とせるは、佐保山管長、渡邊子爵の、拙著を見ずして、共に天上白玉樓に歸られしことなり。今、之を兩先覺の靈前に供し、謹て冥鑑を祈らむとす。

大正十年十月

著者

華嚴哲學研究

目次

第一章 唯心緣起論	一
第一節 唯心緣起の本據	一
第二節 心意識論	一〇
第一項 心意識體一論	一一
第二項 心意識體別論	一七
第三節 諸教心識建立論	二四
第一項 五教に於ける心識建立の差違	二四
其一 小乗教の心識建立	二四
其二 大乘始教の心識建立	二六
其三 終教の心識建立	三三

其一 四法界義の起原……………一〇九

其二 四法界義の相承……………一一五

第二項 四法界義の要旨……………一二六

其一 事法界の要旨……………一二六

其二 理法界の要旨……………一二九

其三 理事無礙法界の要旨……………一三三

其四 事事無礙法界の要旨……………一三五

第三項 禪家と四法界觀……………一二八

第三節 性起と緣起……………一三〇

第一項 二起の法門と其本據及び相承……………一三〇

其一 二起の法門の本據……………一三〇

其二 二起法門の相承……………一三三

第二項 性緣二門の要旨……………一三七

其一 緣起の要旨……………一三七

其二 性起の要旨……………一四四

其三 性緣二起の關係……………一五二

第三項 性起と性惡說……………一五九

其一 清涼圭峰兩大師の性起論の要旨……………一五九

其二 清涼圭峰兩大師の性惡說……………一六三

其三 華嚴の性起と天台の性具……………一六九

第三章 十玄緣起無礙法門義……………一七四

第一節 十玄緣起の本據起原及び相承……………一七四

第一項 十玄緣起の本據及び起原……………一七四

其一 十玄緣起の本據……………一七四

其二 十玄緣起の起原……………一七九

第二項 十玄緣起の相承……………一八六

第二節 緣起諸法の説明……………一九〇

第一項	緣起諸法の體相	一九〇
第二項	緣起諸法の起因	二〇五
第三項	十玄緣起の名義	二一九
其一	總說	二一九
其二	別說	二二四
一	同時具足相應門	二三四
二	一多相容不同門	二三七
三	諸法相即自在門	二三一
四	因陀羅網境界門	二三五
五	微細相容安立門	二二九
六	秘密隱顯俱成門	二四二
七	諸藏純雜具德門(古十玄)と廣狹自在無礙門(新十玄)	二四五
八	十世隔法異成門	二五一
九	唯心廻轉善成門(古十玄)と主伴圓明具德門(新十玄)	二五六

十	託事顯法生解門	二六二
第三節	靜法寺慧苑の兩重十玄論	二六五
第一項	兩重十玄論の要旨	二六五
其一	兩重十玄所依の體事	二六五
其二	兩重十玄論の要旨	二六九
一	德相の十玄	二六九
二	業用の十玄と兩重十玄の對比	二七九
第二項	兩重十玄論に對する清涼大師の批判	二八五
第四章	六相圓融義	二八九
第一節	六相義の説意	二八九
第二節	六相義の本據及び相承	二九一
第一項	六相義の本據	二九一
第二項	六相義の相承	二九三

其 一 至相大師以前の六相義……………二九三

一 世親大師の六相義……………二九三

二 淨影大師の六相義……………三〇一

其 二 至相大師の六相義……………三〇六

第三節 六相圓融義の要旨……………三〇九

第四節 賢首大師の六相義の特色と清涼大師の六相義……………三二〇

第五章 華嚴觀法の種類及び釋名……………三二六

第一節 華嚴觀法の種類及び分齊……………三二六

第二節 華嚴觀法の釋名……………三三〇

第一項 杜順禪師の觀法……………三三〇

其 一 華嚴五教止觀……………三三〇

一 華嚴法界觀……………三三九

其 二 至相大師の觀法……………三五六

一 十玄無礙觀……………三五六

二 六相圓融觀……………三五九

其 三 賢首大師の觀法……………三六一

一 十門唯識觀……………三六一

二 妄盡還源觀……………三六四

其 四 清涼大師の觀法……………三七五

一 四法界觀……………三七五

二 三聖圓融觀……………三七六

其 五 圭山大師の觀法……………三八七

第六章 結 論……………三九六

第一節 將來の哲學宗教と華嚴大經……………三九六

第二節 佛教各派先哲の華嚴大經に對する鑽仰……………四〇三

第三節 華嚴哲學に對する批判……………四〇九

目次

華嚴哲學研究

龜谷聖馨著

第一章 唯心緣起論

第一節 唯心緣起の本據

緣起とは、梵に鉢刺底帝夜參牟播陀と云ひ、因緣生起の義にして、緣と爲りて、能く果を生ずるを云ひ、彼の十二緣起支に於て、無明能く緣と爲りて行を生じ、行緣と爲りて識を生じ、乃至生緣と爲りて、老死を生ずるが如き、即ち是れなり。阿毘達磨俱舍論第九紙十左五に、諸支因分說名緣起。由此爲緣能起果故と云へり。諸法の因緣生起、即ち萬物の由りて生ずる本源を究め、其の本源より萬物の開發する玄理を説明する法門を緣起論と云ふ。唯心緣起の法門は、即ち宇宙萬有の本源實體たる一心より、森羅諸法の緣起を説明するものにして、華嚴經所說の法門、即ち是れなり。試みに華嚴大經を披閱するに、唯心緣起を説くの文、到る處に散

在し其の所説髣髴として一經の始中終に徧滿するを見ることを得べし。乃ち今其の最も顯著なるものを擧ぐれば華嚴經第六右初紙菩薩明難品に文殊師利菩薩覺首菩薩に向ひて、

佛子心性是一。云何能生種種果報。或至善趣。或至惡趣。或具諸根。或不具者。或生善處。或生惡處。端正醜陋。苦樂不同。業不知心。心不知業。受不知報。報不知受。心不知受。受不知心。因不知緣。緣不知因。智不知法。法不知智。

と問ふに覺首即ち唯心緣起の理を説きてこれに答ふことを説き所謂緣起甚深を明かせり。蓋し緣起甚深は教化甚深業果甚深説法甚深福田甚深正教甚深正行甚深助道甚深一乘甚深佛境界甚深と共に十甚深の隨一にして而かも其の最初の第一たり。是れ菩薩初學に諸法如實の因緣を觀じ以て正信解を成せしめんが爲めなり。抑も緣起甚深とは是れ大聖釋迦文佛海印三昧顯現の大法門にして佛陀の成等正覺たる即ち此の緣起の理を洞見したまひしに外ならず是れ佛教の根本源理にして又實に轉法輪の内容たり。方廣大莊嚴經第九成正覺

品縮由四六右に曰く、

菩薩作是念言。一切衆生。住於生老病死險惡趣中。不能覺悟。云何令彼了知生老病死苦蘊邊際。作是思惟。此老病死從何而有。即時能知因生故有。以有生故老病死有。如是生者復因何有。即時能知因有故有。如是有者復因何有。即時能知因取故有。如是取者復因何有。即時能知因愛故有。如是愛者復因何有。即時能知因受有。如是受者復因何有。即時能知因觸有。如是觸者復因何有。即時能知因六處有。如是六處者復因何有。即時能知因名色有。如是名色者復因何有。即時能知因識故有。如是識者復因何有。即時能知因行故有。如是行者復因何有。即時能知因無明有。爾時菩薩既知。無明因行。行因識。識因名色。名色因六處。六處因觸。觸因受。受因愛。愛因取。取因有。有因生。生因老死憂悲苦惱。相因而生。復更思惟。因何無故老死無。因何滅故老死滅。即時能知。無明滅故即行滅。行滅故即識滅。識滅故即名色滅。名色滅故即六處滅。六處滅故即觸滅。觸滅故即受滅。受滅故即愛滅。愛滅故即取滅。取滅故即有滅。有滅故即生滅。生滅故即老死滅。老死滅故即憂悲苦惱滅。復更思

惟。此は無明。此は無明因。此は無明滅。此是滅無明道。更無有餘。此是行。此是行因。此是行滅。此是滅行道。此是識。此是識因。此是識滅。此是滅識道。此是名色。此是名色因。此是名色滅。此是滅名色道。此是六處。此是六處因。此是六處滅。此是滅六處道。此是觸。此是觸因。此是觸滅。此是滅觸道。此是受。此是受因。此是受滅。此是滅受道。此是愛。此是愛因。此是愛道。此是滅愛道。此是取。此是取因。此是取滅。此是滅取道。此是有。此是有因。此是有滅。此是滅有道。此是生。此是生因。此是生滅。此是滅生道。此是老死。此是老死因。此是老死滅。此是滅老死道。此是憂悲苦惱。如是大苦蘊生乃至滅。如是應知。此是苦。此是集。此是苦集滅。此是滅苦集道。應如是知。

と菩薩は是くの如くにして、正覺を成じ、是くの如くにして、無上大覺世尊となりたまへり。經の次下の文に、

佛告諸比丘。菩薩於後夜分明星出時。佛世尊調御丈夫聖智。所應知。所應得。所應悟。所應見。所應證。彼一切一念相應慧證阿耨多羅三藐三菩提。成

等正覺。具足三明。

と説けり。實にや、十二緣起は、一沙門瞿曇が、終極の内觀にして、成無上正覺の契機なり。一旦緣起觀成就すれば、快刀亂麻を斷つが如く、旭日東天に昇りて、長夜の大闇一時に散滅するが如く、智明忽ち生じ來りて、昨日まで緣起法の實相に達せず、無限に限を劃し、空中に有を計し、我他を差別し、苦樂を對立し、營々として働勞し來りしも、惟へば唯だ是れ無明のためのみ、本來一大夢幻に過ぎざりき。一旦、智見を生ずれば、生死永く寂して、又三界に流來することなきなり、是れを緣起甚深の妙理と云ふ。十甚深の初めに、緣起甚深を明せる、誠に其の意の深きを知るべし。次に、華嚴經第十卷五紙明法品に、法慧菩薩、精進慧菩薩に告げて、所有諸法。皆由心造。菩薩摩訶薩。若能如是。明了觀察。則能具足一切諸地、と説くを説明し、即ち一切所有の諸法は、皆唯心の所造なり、菩薩若し能く是くの如く、明了に諸法唯心の理を觀察すれば、則ち能く一切の諸地を具足すと示せり。又、次に此の經第十一十紙夜摩天宮菩薩說偈品に依るに、如來林菩薩の有名なる唯心の偈を説けり、此の偈、一に如心偈の文と云ひ、心佛及衆生、是三無差別を説く文に

して、即ち天台家に三法無差を論ずる本源なり。又、若人欲求知。三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來の文は、所謂破地獄の文として、諸家に珍重せられ、人口に膾炙せり、文に、

心如工畫師。畫種種五陰。一切世界中。無法而不造。如心佛亦爾。

如佛衆生然。心佛及衆生。是三無差別。諸佛悉了知。一切從心轉。

若能如是解。彼人見真佛。心亦非是身。身亦非是心。作一切佛事。

自在未曾有。若人欲求知。三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來。

と云へり。又、次に此經第二十六紙三十地品第六現前地の下には、金剛藏菩薩佛所説の緣起甚深たる十二緣起支の順逆觀察法と説きて、

是菩薩觀一切法如是相。大悲爲首。增長大悲故。觀世間生滅相。作是念。世間所有受身生處。皆以貪著我故。若離著我則無生處。一切凡夫常隨邪念。行邪妄道。愚痴所盲。貪著於我習起三行。罪行福行不動行。以是行故起有漏心種子。有漏有取心故起生死身。所謂業爲田。識爲種子。無明覆蔽。愛水爲潤。我心溉灌。種種諸見令得增長。生名色芽。因名色故生諸根。諸根合故有

觸。從觸生受。樂受故生愛。愛增長故有取。取因緣故有有。於有起五陰身名爲生。五陰衰變名爲老。五陰滅名爲死。老死因緣。有憂悲熱惱。衆苦聚集。是十二因緣。無有集者。無有散者。緣合則有。緣散則無。菩薩如是於六地中。隨順觀十二因緣。又作是念。不如實知第一義故有無明。無明起業是名行。依行有初識。與識共生有四取陰。依止取陰有名色。名色成就有六入。根塵合故有觸。觸因緣生受。合樂受名爲愛。愛增長名爲取。從取起業名爲有。業報五陰名爲生。五陰變名爲老。五陰壞名爲死。死別離時貪著心熱名爲悲。發聲啼哭五識爲苦。意識爲憂。憂苦轉多名爲惱。如是但生大苦積集。是十二因緣。無我無我所。無作者。無使作者。若有作者則有作事。若無作者則無作事。第一義中無作者無作事。又作是念。三界虛妄。但是一心作。十二緣分是皆依心。所以者何。隨事生欲心。是心即是識。事是行。行誑心故名無明。識所依處名名色。名色増上名六入。三事和合有觸。觸共生名受。貪著所受名爲愛。愛不捨名爲取。彼和合故名爲有。有所起名爲生。生變名爲老。老壞名爲死(中畧)又十二因緣説名三苦。無明行識名色六入名爲行苦。觸受名爲苦苦。愛取有生

死憂悲苦惱名為壞苦。無明滅故諸行滅。乃至生滅故老死滅名為斷。三苦相續說。又因無明諸行生。無明滅諸行滅。以諸行性空故。餘亦如是。無明因緣諸行生。是以生縛說。無明滅故諸行滅。以滅縛說。餘亦如是。又無明因續諸行生。是隨順無所有觀說。無明滅諸行滅。是隨順盡觀說。餘亦如是。如是逆順十種。觀十二因緣法。

と云へり。文に三界虛妄但是一心作、十二緣分皆是依心と説けるは、即ち馬鳴菩薩の大乗起信論(義記卷中末紙左)に、第三解釋分を説き終りて、次に、是故三界虛偽唯心所作と説くものにして、彌勒菩薩は、辨中邊論頌(縮來九)に、三界心心所、是虛妄分別と説き、更に瑜伽師地論等に在りても、廣く此の文に依りて、唯識唯心の緣起を説きて、此の經の義を敷演し。無著菩薩、また彌勒菩薩の化を受けて、唯心の法門を唱道して、攝大乘論卷上眞諦譯(縮來九)玄非譯(縮來九)佛陀扇多譯(縮來九)には、三界虛妄、但是一心作等の文を引き、如十地經中說等と云ひ。世親菩薩は、十地經論十卷を著して、十地の一品を釋する中、論第八(右)已下に、詳かに此の文を釋する外、大乘唯識論(縮來九)七六右、二十唯識論(縮來九)八六右、及び攝大乘論釋(寂多共行矩等譯)第

四(縮來九)眞諦譯第五(縮來八)玄非譯第四(縮來七)等に、此の文を引き、三界唯心の義を證し。無性菩薩は、攝大乘論釋第四(縮來九)護法菩薩は、成唯識論第七(縮來十)に、陳那菩薩は、掌中論(縮來二)右に、共に此の文を引き、大乘唯識の義を成立し。其の他の諸大論師の、萬法唯識の義を唱道するもの、一に此の文に依らざる無し。以て十地品第六地下の三界唯心の文の、其の眞如緣起説たると、賴耶緣起説たるとを問はず、苟くも唯心緣起を主張する者の、根本所依たるを知るべし。次に又、此の經第二十七(縮來十三)右十地品第九、善慧地の下に、菩薩此の地に住して、如實に善不善無記法行を知り、或は衆生諸心差別相。莊飾世心相。速轉心相。壞不壞心相。無形心相。無邊自在心相。清淨差別心相。垢無垢心相。縛解心相。詭曲質直心相。隨道心相を知ること説きて、有名なる心行稠林の文あり。又、經第三十(縮來六)左寶王如來性起品には、

佛子。云何菩薩摩訶薩。知見如來應供等正覺心。此菩薩摩訶薩。知心意識。非即如來但知如來智無量故。心亦無量。佛子。譬如虛空悉爲一切萬物所依。而彼虛空無所依止。如來智慧亦復如是。

と説きて、有名なる心意識を説くの文あり。又、此經第四十一左四紙離世間品には、佛子、是の菩薩摩訶薩に、十種の心あり等と説きて、大地等心、大海等心、須彌山王等心、摩尼寶心、金剛心、堅固金剛圍山心、蓮華等心、優曇鉢華等心、淨目等心、虚空等心の十種心を説けり。上來是くの如く、一經の始、中、終に涉りて、唯心緣起を説くの文、枚擧に違あらず。然り而して、此の中、十地品第六現前地の下に説く、三界虛妄、但是一心作等の文は、前にも説けるが如く、實に各種唯心緣起説の唯一本據にして、而かも第六現前地たる、若し之を其の所修の行たる、十波羅蜜を以て配するときは、即ち是れ第六般若波羅蜜を以て配すべし。般若は是れ六波羅蜜の終極にして、即ち根本實智を以て配すべく、其の根本實智たる、蓋し前に説く佛始成正覺、所證の法たる、緣起甚深十二緣起に外ならざるに考ふるに、茲に三界虛妄。但是一心作。十二緣分。是皆依心と説ける、豈に佛の自内證を指すに非ずや。果して然れば、此の文は、實に釋迦文佛海印三昧所現の全體にして、一代佛教の本源總體とも云ふべく、其の各種法門の根基となりしもの、真に偶然にわらざるなり。

第二一節 心意識論

第一項 心意識體一論

廣く諸經論に就きて、之を見るに、心識の數を擧ぐるごと、一に非ずと雖も、之を要略するに二種を出でず。所謂六識説と、八識説と是れなり。諸部の小乘經を始め、般若、法華、涅槃、無量壽等の經、並びに六足、婆沙等の論、智度論等には、單に六識を説き、楞伽、深密等の經、瑜伽、唯識等の論には、八識を説けり。然るに此等心識根立の異説は、素と心意識體一體別の異論より起る所なるが如し。心意識體別論とは、即ち俱舍論第四紙十三左に、

然心心所。於契經中。隨義建立種種名相。今當辯此名義差別。頌曰。

心意識體一。心心所有依。有緣有行相。相應義有五。

論曰。集起故名心。思量故名意。了別故名識。復有釋言。淨不淨界。種種差別故名爲心。即此爲他作所依止故名爲意。作能依止故名爲識。故心意識三名。所詮義雖有異。而體是一。如心意識三名所詮義異體一。

と云へるもの、是れにして、阿毘達磨順正理論第十紙十四右、阿毘達磨顯宗論第五紙十六右

等、又之に同じ。心意識の名義を釋すること、眞諦譯俱舍論第三紙右三に、心は増上を以て義と爲し、能解の故に意と名づけ、能別の故に識と名づく。又、善惡諸界の増上する所なるが故に心と名づけ、或は能く彼を増長するか故に心と名づけ、此の心、他の爲めに依止となるが故に意と名づけ、能依止を説きて識と名づくと云ひ。五事分別毘婆沙論卷下紙右七には、採集の義に依るが故に心と名づけ、依趣の義に由るが故に意と名づけ、了別の義に由るが故に識と名づくと云ひ。阿毘達磨大毘婆沙論第七十二左初紙には、諸の契經中に、心意識を説く。是くの如きの三種の差別云何。或は説く者あり、差別あること無し。心は即ち是れ意、意は即ち是れ識なり。此の三は聲は別にして、義異り無きが故なり。火を火と名づけ、亦是れ焰頂と名づけ、亦是れ熾然と名づけ、亦是れ生明と名づけ、亦是れ受祀と名づけ、亦是れ能熟と名づけ、亦是れ黒路と名づけ、亦是れ鑽息と名づけ、亦是れ烟幢と名づけ、亦是れ金相と名づくるが如し。是くの如く、一火に十種の名あり、聲は異ありと雖も、而かも體は無別なり。天帝釋を、亦是れ鑠羯羅と名づけ、亦是れ補爛達羅と名づけ、亦是れ莫伽梵と名づけ、亦是れ婆嵐縛と名づけ、亦是れ僞尸迦と名づけ、亦是れ設芝夫と名づけ、亦是れ印

達羅と名づけ、亦是れ千眼と名づけ、亦是れ三十三天尊と名づくるが如し。是くの如く、一主に十種の名あり。聲は異ありと雖も、體は無別なり。對法の中に、受を受と名づけ、亦是れ等受と名づけ、亦是れ別受と名づけ、亦是れ覺受と名づけ、亦是れ受趣と名づく、説くが如し。是くの如く、一受に五種の名あり、聲は異なりと雖も、而かも體は無別なり。故に契經に、心意識の三は、聲は異なりと雖も、而かも差別無しと説けり。復た有説は、心意識の三は亦差別あり。謂く、名に即ち差別あり、心と名づけ、意と名づけ、識と名づくること、異なるが故なり。復た次に、世に亦差別あり、謂く、過去を意と名づけ、未來を心と名づけ、現在を識と名づくるが故なり。復た次に、施設に亦差別あり、謂く、界の中に心を施設し、處の中に意を施設し、蘊の中に識を施設するが故なり。復た次に、義に亦差別あり。謂く、心は是れ種族の義、意は是れ生門の義、識は是れ積聚の義なり、復た次に、業に亦差別あり、謂く、遠行は是れ心の業なり。前行は是れ意の業なり。續生は是れ識の業なり、契經に説くが如し。母胎に入る時、識若し無くんば、羯刺藍等成就することを得ず、故に知りぬ、續生は是れ識の業用なり。復た次に、彩畫は是れ心の業なり、契經に説くが如

し。苾芻當さに知るべし、諸の傍生、趣心の彩畫に由りて種種の色ありと。歸趣は是れ意の業なり、契經に説くが如し。是くの如きの五根は、各別の所行、各別の境界あり、意根は總じて、彼の所行の境界を領受し、意は彼れに歸趣して、諸の事業を作すと。了別は是れ識の業なり、契經に説くが如し、苾芻當さに知るべし、識能く種種の境事を了別すと。復た次に、滋長は是れ心の業、思量は是れ意の業、分別は是れ識の業なり。脇尊者言はく、滋長分割は是れ心の業、思量思惟は是れ意の業、分別解了は是れ識の業なりと、應さに知るべし。此の中、滋長は是れ有漏心、分別は是れ無漏心、思量は是れ有漏意、思惟は是れ無漏意、分別は是れ有漏識、解了は是れ無漏識なり、心意識の三、是れを差別と謂ふと云へり。是くの如く、心意識の三を釋するに、種種の異解あり、然るに、種種の異解ありと雖も、唯だ是れ義の差別、又は聲の差別にして、其の體は異なることなく、即ち一體の異名なりとし、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識を、又は心と稱し、又は意と名づくるものにして、識の外に別に、心も意もあるに非すと云ふ。之を心意識體一論とし、即ち六識建立の説となすなり。蓋し案するに、大小二乗を通じて、凡そ識を建立するは、即ち是れ緣起甚深たる。

る、十二緣起支の法門に依るものにして、其の源を佛陀の自内證に有し、而かも其の教を垂れ玉ふや、其の言頗る從容不迫にして、浩乎として海の如く、温乎として玉の如し。故を以て此の教を稟け、この説を聞く者、其の各自應分の能力を以て、或は深く解し、或は淺く解して、一の佛説をして、淺深高下の差別あらしむるは、是れ數の免れざる所にして、佛も亦其の根本義に違反せざるの範圍内に在りては、強て之を答めざるなり。試みに維摩詰所説經卷上、佛國品縮黃七一五右に見るに、

佛以一音演說法。衆生隨類各得解。皆謂世尊同其語。斯則神力不共法。佛以一音演說法。或有恐畏或歡喜。或生厭離或斷疑。斯則神力不共法。佛と説き。又、法華經第三、藥草喻品縮盈一〇左には、

譬如三千大千世界。山川谿谷土地。所生密木叢林。及諸藥草種類若小根小干。名色各異。密雲彌布。徧覆三千大千世界。一時等澍。其澤普洽。卉木叢林及諸藥草。小根小莖小枝小葉。中根中莖中枝中葉。大根大莖大枝大葉。諸樹大小。隨上中下。各有所受。一雲所雨。稱其種性。而得生長。華菓敷實。雖一地所生一雨所潤。而諸草木。各有差別。迦葉當知。如來亦復如是。

と説けり。即ち大小淺深の差別は、一説法上に於ける、衆生隨類各得の見解に過ぎずして、其の根本義に於ては毫も差別あることなし。これを菩提留支三藏は、如來の一音同時に萬に報じて、大小並べ陳ぶとあらはし。鳩摩羅什三藏は、佛は一圓音にして、平等無二なれば、無思にして、普ねく應ずれども、機の間に、自ら差別ありて、大小半滿權實の別を生ずとなせり。賢首大師の華嚴五教章卷下初紙所依の心識の條に、小始終頓圓の五教の別に隨ひて心識の建立に、淺深差別あることを説けるは、又此の意に外ならず。等しく緣起甚深の十二緣起支中の識支なりと雖も、契經の處處に、或は心と説き、或は意と説き、而かも其の所説甚だ從容不迫にして、所謂大般涅槃經第三十三、迦葉菩薩品縮盈六に、六三右、是故。能知一切衆生上中下根利鈍差別。(中略)或有説言十二因緣是有爲法。或説因緣是無爲法。

と説くが如く。根の利鈍差別に従ひて。其の所解必しも一準ならず。即ち心意識は、是れ一體の異名にして、眼等の六識は、又は心と名づけ、又は意と名づけと解するあり。或は六識の外に、別に心と意とあり、其の名の差別するが如く、其

の體亦別なりと解するありて、所謂六識建立と、八識建立との別を生じ、凡愚之を解して、其の所説、永く別なりと執するに至れり。

第二項 心意識體別論

前項既に體一論の要義を略説し、又體一體別の論の生ずる所以を説明せり、爾下體別説を述ぶべし。心意識體別論とは、心意識の三は、其の名の異なるが如く、其の體別なりと説くものにして、即ち前六識を識、第七末那識を意、第八阿賴耶識を心と名づくとす。成唯識論第五八紙に、右、

云何應知。此第七識離眼等識。有別自體。聖教正理。爲定量故。謂。薄伽梵。處處經中。説心意識三種別義。集起名心。思量名意。了別名識。是三別義。如是三義雖通八識。而隨勝顯。第八名心。集諸法種。起諸法故。第七名意。緣藏識等。恒審思量爲我等故。餘六名識。於六別境。麤動間斷了別轉故。如入楞迦伽他中説。藏識説名心。思量性名意。能了諸境相。是説名爲識。と説くが如き是れなり。唯識二十論初紙に依るに「心意識了名之差別」とあり、是

れ前引成唯識論第五左初紙の文に、契經の中に心意識の三種の別義を説く、集起を心と名づけ、思量を意と名づけ、了別を心と名づく。是くの如きの三義は、八識に通すと説くものにして、即ち心意識は、諸識の通名なることを示せるなり。若し此の點よりすれば、小乗の心意識は、義の差別なりとするに同じと云ふべし。然るに、若し増勝に約して論すれば、心意識の三は、其の義と名の差別せるが如く、其の體も亦別なり。次第の如く、第八阿頼耶識、第七末那識及び前六識に配す。蓋し八識の中、第七末那識は、是れ俱舍論第一紙十二に、

由即六識身。無間滅爲意。

論曰。即六識身。無間滅已。能生後識。故名眼界。謂。如此子即名餘父。又如此果即名餘種。

と説きて、所謂意、又は意根と稱して、六識身の無間に滅するを、意根と名づけたるに基くものにして、攝大乘論本卷上縮來九三〇右に、

如世尊說心意識三。此中意有二種。第一與作等無間緣所依止性。無間滅識。能與意識作生依止。第二染汙意。與四煩惱恒共相應。一者薩迦耶見。二者我

慢。三者我愛。四者無明。此即是識雜染所依。識復由彼第一依生。第二雜染了別境義故。等無間義故。思量義故。意成二種。

とあり。此の意に依るに、第七末那の説は、俱舍論に説く意根の説を擴充して、これに等無間緣となる所依止の性と、薩我耶見等の四煩惱と、恒に俱に相應する染汚の意との兩種の義ありとし、其中、染汚の意を以て、第七末那識となせるものなることを知るべし。成唯識論第四紙十二に、

次。第二能變。是識名末那。依彼轉緣彼。思量爲性相。四煩惱常俱。謂我癡我見。并我慢我愛（中畧）

論曰。次初異熱能變識。後應辨思量能變識相。是識聖教別名末那。恒審思量勝餘識故。此名何異第六意識。此持業釋。如藏識名。識即意故。彼依主釋。如眼識等。識異意故。然諸聖教。恐此濫彼故。於第七但立意名。又標意名。爲簡心識。積集了別劣餘識故。或欲顯此與彼意識。爲近所依故。但名意。

（中畧）此意相應。有幾心所。且與四種煩惱常俱。此中俱言。顯相應義。謂。從無始至未轉依。此意任運恒緣藏識。與四根本煩惱相應。其四者何。謂。我癡我

見我慢我愛。是名四種。我癡者謂無明。愚於我相。迷無我理。故名我癡。我見者謂我執。於非我法。妄計爲我。故名我見。我慢者謂踞傲。恃所執我。令心高舉。故名我慢。我愛者謂我貪。於所執我。深生耽著。故名我愛。

と云へり。第二能變、即ち第七末那識を説くに、恒に審かに思量すること、餘識に勝れたるが故に、彼の第六意識のために、近き所依となるが故に、我癡我見我慢我愛の四煩惱と共に相應するが故に等と説ける、即ち是れ攝大乘論卷上に、意に二種あり、一には等無間緣と爲る所依止性、二には薩我耶見等の四煩惱と、恒に俱に相應する染汚の意なりと説ける、第二種と、全く符節を合するが如きを知るべく、即ち第七末那識の説は、小乘に説く、第六意識の所依たる意根の説より、脱化せるものなることを窺知し得べし。次に、第八阿賴耶識は、心意識の三の中心、即ち集起識に名づけたるものにして、此の名亦同じく小乘經典中より出でたり。即ち攝大乘論本卷上縮九に、三四在に、

聲聞乘中。亦以異門密意。已説阿賴耶識。如彼增一阿笈摩説。世間衆生愛阿賴耶。樂阿賴耶。欣阿賴耶。喜阿賴耶。爲斷如是阿賴耶故。説正法。

と云ひ、成唯識論第三紙右三には、

説一切有部增壹經中。亦密意説此名阿賴耶。謂。愛阿賴耶。樂阿賴耶。欣阿賴耶。喜阿賴耶。謂。阿賴耶識。是貪總別三世境故。立此四名。

と云へり。然るに現存の増一阿含經を檢するに、此の文なしと雖も、佛本行集經第三十三縮八に、四八左には、

爾時世尊作如是念。我所證法。此法甚深。難見難知。如微塵等。不可覺察。無思量處。不思議道。我無有師。無巧智匠。可能教。我證於此法。但衆生輩。著阿羅耶。樂阿羅耶。住阿羅耶。喜阿羅耶。心多貪故。此處難見。

と説きて、殆んど是れと同じき文あり。又大毘婆沙論第四百四十五縮六、同第六十五、縮收三、左及及び、近くは俱舍論第十六五左に、阿賴耶の名を説けり。又攝大乘論本卷上縮來九、三〇左に依るに、聲聞乘中、如來出現及び四德經の中には、異門の密意を以て阿賴耶識を顯はし、大衆部阿笈摩中に於て、亦異門の密意を以て、これを根本識と名づく、樹の根に依るが如し。化地部の中には、亦異門の密意を以て、これを説きて、窮生死蘊と名づくと云ひ、成唯識論第三紙右二には、大衆部の阿笈摩の中に

と云ひ、成唯識論第三紙右二には、大衆部の阿笈摩の中に

も密意を以て、これを根本識と名づく。是れ眼識等が所依止なるが故に、譬へば樹根は是れ莖等が本たるが如し。眼等の識に、是くの如きの義あるに非ず。上座部と分別部とは、俱に密して、これを説きて有分識と名づく。有とは三有なり、是れ因の義なり、唯だこれのみ恒なり遍なり、三有の因たり。化地部には、これを説きて窮生死蘊と名づく。第八識を離れては、別の蘊法として、生死際を窮めて、間斷する時無きは無し。謂く、無色界には、諸色間斷す。所謂無想天等には、餘の心等を滅せり。不相應行は、色心を離れて別の自體無し。唯だ此の識をば、窮生死蘊と名づくと云へり。既に此くの如く、小乘經中に、阿頼耶の名を説き、又、小乘諸部中に根本識を説くと雖も、而かも小乘論部中には、此の阿頼耶を解して、或は五取蘊と爲し、或は貪と俱なる樂受と爲し、或は薩我耶見と爲し、未だ之を以て根本異熟識の名と爲さず。是れ此の識は、甚深微細の識にして、彼の聲聞は、此の識を知らずと雖も、而かも解脱を得るに妨げなきが故なり。大乘中解深密經第一心意識相品縮黃八五〇右には、此の識を説きて阿陀那識と名づけ、

阿陀那識甚深細。一切種子如瀑流。我於凡愚不開演。恐彼分別執爲我。

と説けり。此れに依りて、第八阿頼耶識は、即ち小乘經典中所説の阿頼耶の名を籍りて、之を心の名と爲し、有情の異熟總報の果體として、一切の種子を藏する根本識となせるものなるべし。上來斯くの如く、第七末那識と云ひ、第八阿頼耶識と云ひ、俱に小乘經典中に、其の萌芽を發せることを知るべし。然るに其の末那識と名づけ、阿頼耶識と名づくるは、是れ心意識の三の中、心を阿頼耶と名づけ、意を末那と名づけたるものにして、是れ眼等の六識の外に、存在すと説くものなるが故に、即ち大乘八識の説は、心意識體別論より來るものと云ふべし。而して第七第八を、前六識に同じく通じて、識の名を與ふることは、大乘義章第三末左二紙に、八の中前の六は、了別する處あれば、名づけて識と爲すべし。後の二種は、云何ぞ識と名づくる、釋するに兩義あり、一義に釋して云はく、後の二は了別の因に非ずと雖も、而かも是れ了別の體なり、故に名づけて識と爲す。第二義には、八識並びに了別の義あるが故に、通じて識と名づく。云何ぞ了別する。了別に三あり。一に事相の了別、謂く第六識なり。二に妄相の了別、謂く第七識なり。三に眞實自體の了別、謂く第八識なり。了別既に通ず、是の故に八種俱に名づけて識と爲す

と云へり。第七第八通じて識の名を與ふる所以を知るべし。

第三節 諸教心識建立論

第一項 五教に於ける心識建立の差違

其一 小乗教の心識建立

前節既に識の建立に就きて、六識八識等、其の所説を異にする所以の源由を説明せり。これに依りて爾下一家五教の判の次第に順じて、諸教の心識建立の要義を述ぶべし。五教の中、初めに小乗教に於ては、六種の識を建つ、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識是れなり。俱舍論第一紙^{十二}に、各各了別彼彼境界。總取境相故名識蘊。此復差別。有六識身。謂。眼識身至意識身と云へり。此の六種の識を、總じて心と云ひ、又は意と云ふ。心とは梵に質多と云ひ、集起の義なり、心力に由りて、諸の心所及び、諸の一切の所作の事業を引くこと、樹の心の皮膚及び、枝葉等を集起するが如き故なり。意は梵に末那と云ひ、是れ思量の義なり。心能く思量するを以て此の名あり。而して識と稱するは、梵に毘若南と云ひ、是れ了別

の義なり。心境に於て、能く了別するが故に識の名あり。此の心意識の三は、其の義異なれども、體はこれ一なり。俱舍論第四紙^{十二}に、心意識は、體一なりと云ひ、心意識の三名は、所詮の義は異ありと雖も、體は、是れ一なりと説きて、心意識體一論を説けること、前項既に述べたるが如し。阿頼耶識に於ては、小乗に全く其の所説なきに非ず。所説なきに非ずと雖も、其は唯だ阿頼耶の名を説くのみにして、其の義に至りては、全く所説なきなり。(前項心意識體別論参照) 眞諦譯攝大乘論卷上^{縮來九、四入右}に、

復次。此識於聲聞乘。由別名如來會顯。如增壹阿含經言。於世間。樂阿黎耶。愛阿黎耶。習阿黎耶。著阿黎耶。爲滅阿黎耶。如來說正法。世間樂聽故。屬耳住意欲知生起正勤。方得滅盡阿黎耶。

と説き、同譯世親攝大乘論釋第一^{縮往八、九右}、玄奘譯無性攝大乘論釋第二^{縮往九、五右}等に之を釋し。無性攝大乘論釋には、如彼增壹阿笈摩說者。是説一切有部中説。と解して、説一切有部所依の增壹阿含經中の所説と爲せり。然るに現存增壹阿含經中には、此の文無しと雖も、佛本行集經第三十三^{縮長八、四入左}には、殆んど攝大乘論所

引と同文を有し、又、大毘婆沙論第六十五縮收三を始め、近くは俱舍論第十六紙十左に、

契經說。佛告大母。汝意云何。諸所有色非汝眼見、非汝曾見。非汝當見。非希求見。汝爲因此起欲起貪起親起愛起阿賴耶起、尼延底起著不。不爾。

と説きて、阿賴耶の名を説けること、前項既に説くが如し、而して玄奘譯攝大乘論本卷上縮來九に依るに、

於大衆部阿笈摩中。亦以異門密意。說此名根本識。如樹依根。化地部中。亦以異門密意。說此名窮生死蘊。

と云ひ、同譯無性攝大乘論釋第一縮性九には、

於大衆部阿笈摩等者。重成此識於彼部中。如大王路根本識者。餘識因故。譬如樹根是莖等因。化地部等者。於彼部中有三種蘊。一者一念頃蘊。謂。一刹那有生滅法。二者一期生蘊。謂。乃至死恒隨轉法。三者窮生死蘊。謂。乃至得金剛喻定恒隨轉法。此若除彼阿賴耶識。餘不應有。但異名說阿賴耶識。如名諸蘊決定無有窮生死故。

と釋し、眞諦譯世親攝大乘論釋第二縮性八には、上座部、正量部等、又、同じく根本識を立つとなせり。蓋し大衆部末計の根本識を立て、化地部に窮生死蘊を立て、乃至經量部等に、一味蘊根邊蘊を説くが如き、若し意を得て、これを見れば、是れ本より阿賴耶本識を説くものなりと雖も。而かも未だ彼の部には明かに阿賴耶識と爲すの文なし、是れ解深密經第一、心意識相品縮黃八に、阿陀那識は甚だ深細なり。一切の種子は瀑流の如し。我れ凡と愚とに於ては開演せず、彼れ分別し、執して我と爲すを恐れてなりと説けるが如く、阿賴耶は深細にして微妙なり。此の故に、彼の聲聞は、此の識を知らずと雖も、解脱を得るに支障なきが故に、其の信受し難きを恐れて、これを説かざることを示せるなり。是くの如く、小乗教には、眼等の六識は、名義俱に之を説けども、所依の根本識たる、阿賴耶識に至りては、明了にこれを説示せず。故に賢首大師は華嚴五教章卷下初紙に、

如小乘論。但有六識。義分心意識。如小論說。於阿賴耶識。但得其名。如增壹經說。と説けり、以て此の教の心識建立を知るべきなり。

其二 大乘始教の心識建立

五教の第二、大乘始教に、相始教と、空始教とあり。空始教は、即ち一切諸法皆空を説く般若等の經、中、百十二門等の論の所明にして、相始教は、即ち一切諸法の性相を建立し、萬法唯識の義を説く、解深密等の經、瑜伽唯識等の論の所説是れなり。姑らく相始教に就きて、心識建立の要旨を見るに、此の教には、眼等の六識の外、更に第七末那、第八阿賴耶の二識を建立して、總じて八識を建て、以て萬法唯識の義を成立せり。眼等の六識は、小乗教の所説に同じ、成唯識論第五紙十六に、

第三能變。其相云何。頌曰。

次第三能變。差別有六種。了境爲性相。善不善俱非。

論曰。次中思量能變識。後應辨了境能變識相。此識差別。總有六種。隨六根境。種類異故。謂。名眼識乃至意識。隨根立名具五義故。五謂。依發、屬、助、如、根。雖六識身皆依意轉。然隨不共。立意識名。如五識身。無相濫過。或唯依意故名意識。辨識得名。心意非例。或名色識乃至法識。隨境立名。順識義故。

謂。於六境了別名識。色等五識。唯了色等。法識通能了一切法。或能了別法。獨得法識名。故六識名無相濫失。

と云へり。次に第七末那識とは、末那は梵語、翻して意と云ふ。恒審思量を以て義とす。此の識は、常恒に阿賴耶識を、其の所緣の境として、明審に之を思量して、實我の執を起せり。これを一切迷執の根源とす、其の性質は、有覆無記なり。成唯識論第四紙十二に、

第二能變。其相云何。頌曰。

次第二能變。是識名末那。依彼轉緣彼。思量爲性相。

四煩惱常俱。謂我癡我見。并我慢我愛。及餘觸等俱。

有覆無記攝。隨所生所繫。阿羅漢滅定。出世道無有。

論曰。次初異熟能變識。後應辨思量能變識相。是識聖教別名末那。恒審思量勝餘識故。(爾下前項心意識體別論條所引參照)

と云へり。次に第八阿賴耶識とは、阿賴耶は梵語、翻して藏識と云ふ。宇宙萬有を開展すべき功能勢力、即ち種子を含藏する所の識なるが故に此の名あり、委し

く云へば、藏に能藏、所藏、執藏の三義あり。謂く、此の識は能く宇宙萬有を開展すべき、諸の種子を含藏するが故に能藏と云ひ。又、前七識より種子を薰藏せらるゝ體なるが故に所藏と云ひ。又、第七末那識は、常に此の識を執して實の我なり、實の法なりとして、執著藏護し、即ち第七識の與めに、我見を起して執藏せらるゝが故に執藏と云ふ。此の識能く常恒不斷に、自ら種子、即ち萬有を開展すべき功能勢力と、五根、即ち衆生の身體と、器界、即ち衆生所住の國土との三種を變現して、之を了別するが故に、是れ迷界宇宙の本源總體にして、其の性質は無覆無記なり。

成唯識論第二紙十二に、

且初能變。其相云何。頌曰。

初阿賴耶識。異熟一切種。不可知執受。處了常與觸。作意受、想、思。

相應唯捨受。は無覆無記。觸等亦如是。恒轉如暴流。阿羅漢位捨。

論曰。初能變識。大小乘教。名阿賴耶。此識具有能藏、所藏、執藏義故。謂。與雜染互爲緣故。有情執爲自內我故。此即顯示初能變識所有自相。攝持因果。爲自相故。此識自相。分位雖多藏初。過重是故偏說。此是能引諸界趣生。善不

善業。異熟果故。說名異熟。離此命根、衆同分等。恒時相續勝。異熟果不可得故。此即顯示初能變識所有果相。此識果相。雖多位多種、異熟寬不共。故偏說之。此能執持諸法種子。令不失故。名一切種。離此餘法。能遍執持諸法種子。不可得故。此即顯示初能變識所有因相。此識因相。雖有種種。持種不共。是故偏說。初能變識體。相雖多。略說唯有如是三相。

と云へり。以上眼等の八識の中第八阿賴耶識は、是れ所依の根本にして、宇宙萬有は、皆此の阿賴耶の藏中より變現開展せらる。然るに此の阿賴耶識自體は、如何なる原因より生じ、又如何にして宇宙を開展し、萬有を生起するや。阿賴耶識に含藏する種子に、凡そ二種の別あり、一を名言種子と云ひ、一を業種子と云ふ。名言種子とは、七轉識が、色心善惡の諸法、即ち諸有の物體事象を聞見する毎に、其の初の習氣を、第八識に薰附するなり。換言すれば、吾人が花を看、鳥を聽く毎に、其の精神的作用が、第八識を打て、花若しくは鳥その物を、變現する所の慣習力を作るなり。此の慣習力が、即ち花若しくは鳥を發現する所の因種なるものなるが故に、之を名言種子と云ふ。要するに、名言種子は、親しく色心諸法、即ち宇宙萬

有その物の、自體を發生する勢力なり。之を等流習氣と稱し、親辨自果自體辨生の親因縁とす。業種子とは、是れ第六意識に由りて造る所の善惡二業が、第八識に向ひて薰附して、他の名言種子を感動する所の勢力なり。名言種子は、其の性無記なれば、力用薄弱にして、自ら其の果を開展すること能はず。此の善惡二業が、感動の力を與ふるに因りて、此に始めて宇宙萬有を開展することを得。是の故にこれを異熟習氣と稱し、因是善惡、果は無記の増上縁と爲す。蓋し現在の阿頼耶識は、即ち過去阿頼耶識に含藏する所の名言種子と、業種子との因縁に依りて現行する所にして、其の自體は、先きに説く種子と、五根と、器界との三、即ち宇宙の總體なり、換言すれば、阿頼耶識の現行とは、即ち宇宙萬有の開展なり。此の阿頼耶識より、第七末那等の七識を轉變し、而して末那等の七識は、各々相見二分等を變現して、阿頼耶識、即ち宇宙萬有に向ひて、各々自ら其の影像を浮べて、之を縁し、以て宇宙萬有其の物の、自體を發生すべき勢力、即ち名言種子と、之を感動して開展せしむべき勢力、即ち業種子とを薰習す。此の勢力に依りて、又未來の阿頼耶識を現行し、此くの如く無始以來、展轉相續して、斷絶あること無きなり。上來

是くの如く第八阿頼耶識は、過去善不善の業に依りて、招感せる有情の異熟總報の果體にして、然かも宇宙萬有の依りて生ずる本源總體なり。此の故に相始教所談の阿頼耶識は、是れ緣起生滅の事、即ち唯現象界中に在りて、建立せるものにして、未だ生滅の事象と、不生滅の理體と、和合して一に非ず、異にあらざる理事融通の心なりと説くこと能はず。此の故に、阿頼耶識は、所謂因縁生滅のものにして、眞如の如く、法爾恒存のものに非ず。眞如は唯、阿頼耶識の所依たるのみ眞如、凝然不作諸法と説くはこの故なり。此の故に、此の教所談の唯識説を稱して、半頭唯識と名づけ、華嚴五教章卷下初紙には、

若依始教。於阿頼耶。但得一分生滅之義。以下於眞理未能融通。但說凝然不作諸法。故就緣起生滅事中。建立頼耶。從業等種。辨體而生。異熟報識。爲諸法依。

と説けり。以て此の教所説の唯識説を見るべし。

其三 終教の心識建立

五教の中、第三終教大乘の所説に依るに、眼等の八識を建立すること、始教大乘に同じ。然るに、所依の根本たる、第八阿頼耶識を談ずるに、其の左右あり。即ち始教大乘には、阿頼耶識を以て、生滅の事心と爲し、即ち事理隔歴せる、現象界中の生滅因縁の法となすに對し、終教大乘にては、阿頼耶識は、是れ不生不滅の理體と、生滅の事象と和合せる、理事融通の心なりと云ふ。楞伽阿跋多羅寶經第四、一切佛語心品縮黃六に、五左に、

如來之藏。是善不善因。能遍興造一切趣生。(中畧)爲無始虛偽惡習所薰。名爲藏識生。無明住地。與七識俱。

と説き、又、同縮黃六に、二七右に、

如來藏者。受苦樂。與因俱若生若滅。

と説き、入楞伽經第七、佛性品縮黃六に、六二左に、

阿梨耶識者。名如來藏。而與無明七識共俱。

と説き、又、大乘起信論(義記卷中本十紙)に、

不生不滅。與生滅和合。非一非異。名爲阿梨耶識。

と説き、又、(義記卷中末三紙)に、

衆生自性清淨心。因無明風動。與無明俱無形相。不相捨離。

と云へり。此くの如きの經論の明文甚だ尠なからず。凡そ始終二教所説の阿頼耶識を比較するに、阿頼耶を以て生滅諸法の根本識と爲すことは、二者相同じと雖も、而かも其の體相を論ずるに、始教に在りては、阿頼耶識を依他起性にして、唯有爲生滅の法なりとし。終教に在りては、不生不滅と生滅と和合せるを阿梨耶識と爲すと説けり。是れ即ち其の根本的相違たり。前項既に説明せるが如く、若し始教の所説に依れば、阿頼耶識に於て、但だ一分生滅の義を得たり。理實には、阿頼耶識は、不生不滅と生滅と和合して生ずるが故に、不生滅と生滅との兩義を具す。然るに、始教大乘に在りては、小機を引かんが爲めに、唯一分生滅の義を説きて、未だ不生滅の義を説かず。即ち所謂半頭唯識にして、具分唯識には非ず。故に眞理に於て、未だ融通すること能はず、唯、其の不變を論ずるのみ。是くの如く、其の不變を論ずるに過ぎざるが故に、阿頼耶識は眞如より緣起するに非ず、唯業等の種子より生ずると説けり。凡そ阿頼耶識の能生を論ずるに、二種あり。

一は根本無明眞如を薰動して阿頼耶識を成す。二は七轉識阿頼耶識に業種子薰し、此等の種子より阿頼耶識を生ずる是れなり。此の二義の中、始教は唯業種所生の一分の頼耶を説きて未だ無明所動の頼耶を説かず。又、已に頼耶は善惡等の業種子より生ずる所なれば、其の性無記にして、異熟の果體となり、乃至十地にも猶ほ善淨を成ずること能はず。是れ蓋し如來密意の説にして、方便して、漸漸に眞理に引入せんが爲めに、斯くの如きの説をなし玉へるなり。然るに、若し終教大乘に依れば、理事融通二分の義を得たり。即ち、單眞不立獨妄不成。必ず眞妄和合して、方に、所爲あることを得べし、是れ、即ち、具分唯識なり。如來藏無始の惡習の爲めに、薰せらるゝを名づけて、識藏と爲すと云ひ、生滅と不生滅と和合して、一に非ず、異に非るを名づけて、阿梨耶識と爲すが如き、是れ、即ち眞妄和合を阿梨耶識と名づけたるものなり。既に眞妄和合の阿梨耶識なり、此の故に、此の識に自ら覺と不覺との二義あり。覺は眞如、不覺は即ち無明なり。然るに眞如とは、眞實如常の義にして、是れ常法なり。云何んが熏に隨ひて起滅すと説くことを得るや。既に起滅を許さば、如何が凝然常と爲すことを得るやと云ふに、

凡そ眞如を凝然常住と説くは、是れ眞如隨緣して、諸法と作る時、尙ほ自體を失せざるが故に、常と名づくるものにして、是れ無常に異ならざるの常なるが故に、不思議常と名づく。諸法を作らざる如情所謂の凝然常には非るなり。故に勝鬘師子吼一乘大方便廣經に、不染而染と説けるは、是れ隨緣して、諸法と作ることを明すものにして、又、染而不染と説けるは、是れ隨緣の時、自性を失せざることを明かせるものなり。此の二義の中、初の義に由るが故に、俗諦を成し、後の義に依るが故に、眞諦を立す。眞俗の二ありと雖も、是れたゞ二義のみありて、二體あること無く、相融無礙にして、諸の情執を離れたり。是くの如く、眞如に凝然と、隨緣との二義ある中、始教大乘に在りては、眞俗二諦の法相差別門に約するが故に、唯だ一分凝然の義のみを説きて、隨緣の義なしとすれども、終教大乘に在りては、眞俗二諦の體相鎔融門に約するが故に、即ち眞如に、凝然と隨緣との二義有りて、恰も海水の風縁に遇ひて、波浪を起すが如く、眞如の擧體動轉して、阿梨耶識を成すとなし、所謂二分不二の義を説くが故に、彼の始教に阿頼耶識生起の源因を、過去善惡の業に歸するとは、大に同じからざるなり。華嚴五教卷下初紙に

若依終教。於此賴耶得理事通融二分義。故論云。不生不滅與生滅和合。非一非異。名阿梨耶識。以許真如隨熏和合成。此本識。不同前教業等生故。と云へり。試みにこれを諸經論の所説に見るに、華嚴經第二十六、十地品左六紙に、三界虛妄。但是一心作。十二緣分。皆是依心。と説けるが如き。之を攝大乘論本卷上縮來九紙唯識二十論卷上紙十一等には、始教に約して、阿頼耶識等とし。十地經論第八左六紙等には、終教に約して、第一義真心と爲し。又、阿毘達磨大乘經伽陀の中に、無始時來。界一切法等依。由此有諸趣。及涅槃證得と説けるが如き。攝大乘論本卷上縮來九紙及及び成唯識論第三紙十六等には、始教に約して釋し。究竟一乘實性論第四縮來二紙には、終教大乘に約して釋せり。即ち一は、法相差別門に依り、一は體相鎔融門に依るものにして、佛陀の密意始權三乘の機を誘引して、終實一乘に歸せしめんがためなり。以て終教大乘の心識建立の要旨を知るべし。

其四 頓教の心識建立

五教の中第四頓教の所説に依るに、此の教には、一切差別の事相を泯絶して、一切

諸法離言絶慮不可説と爲すが故に、六識八識等の別あること無く、唯だ、絶對靈明を顯はして、緣起の識相を明すこと無きなり。大乘起信論(義記卷中本三紙)に、心真如者。即是一法界大總相法門體。所謂心性不生不滅。一切諸法。唯依妄念而有差別。若離心念。則無一切境界之相。是故一切法。從本已來離言説相。離名字相。離心緣相。畢竟平等無有變異。不可破壞。唯是一心故。名真如。とあり。是れ頓教の義に相當するなり。又、維摩詰所説經入不二法門品に、時に維摩詰諸の菩薩に問ふて曰く、諸の仁者、云何か菩薩不二の法門に入る。各々所業に隨ひて、之を説き給へと。此れに依りて、法自在等の三十一の菩薩、各々自の欲する所に隨ひて、不二法門を説き終りて、文殊師利に問ふて曰く、我等既に説き終れり。何等か是れ菩薩の入不二法門なるやと。文殊師利菩薩、之に答へて曰く、我が意の如くは、一切の法に於て、無言無説無示無識諸の問答を離る、是を入不二法門と爲すと。是に於て、文殊師利菩薩、維摩詰に問ふて曰く、我等各自に説き已れり、仁者、當さに説くべし。何等か是れ菩薩の入不二法門なると、時に維摩詰默然として無言なり。文殊師利菩薩歎じて曰く、善哉善哉、乃至文字語言あるこ

と無き、是れ眞の入不二法門なりと。こゝに三十二の菩薩の所説の不二法門の如きは即ち是れ前の終教大乘に説くところの染淨鎔融無二の義なり。維摩詰所顯の離言不二は此れ頓教の義なり。其の一切の染淨の相盡きて、二法として以て融會すべきものあること無く、不可説を不二とするが故なり。華嚴五教章卷下^{二紙}に頓教の心識建立を説きて、
若依頓教。即一切法唯一真心。差別相盡。離言絕慮不可説也
と云ひ、維摩詰の默不二を以て之を證せり。此の教の心識建立の要義を知るべし。

其五 圓教の心識建立

第五華嚴圓教の心識建立の要義を見るに、凡ぞ同別二教の所説あり。若し別教一乗の所談に依れば、即ち性海圓明に約して、法界緣起無礙自在、一即一切、一切即一、主伴圓融なり。故に其の心識を建立するや、彼の小乘三乗等の諸教に、六識又は八識等を説くに同じからず。且らく十心を説きて以て無盡を顯はし、別教一

乗の心識建立となすなり。十心とは、華嚴經第四十一^{左四紙}離世間品に、

菩薩摩訶薩有十種心。何等爲十。所謂大地等心。持一切衆生諸善根故。大海等心。受持無量無邊諸佛智慧大法海故。須彌山王等心。令一切衆生安住無上善根故。摩尼寶心。速離煩惱淨直心故。金剛心。決定了知一切法故。堅固金剛圍山心。一切諸魔外道不能壞故。蓮華等心。一切佛法不能染故。優曇鉢華等心。於一切劫難直遇故。淨日等心。除滅一切衆生愚癡障闇故。虛空等心。一切衆生無能量故。佛子是爲菩薩摩訶薩十種心。

と云へる是れなり。華嚴經探玄記第十七^{紙四十八}に、此の十心を釋して、一は廣心、二は深心、三は勝心、四は淨心、五は利心、六は堅心、七は無染心、八は希有心、九は智慧心、十は無邊心となし、並びに、是れ意樂の心なりと云へり。又華嚴經第二十七^{紙十三}第九善慧地の文に、十種の心相を説きて、

知衆生諸心差別相。莊飾世心相。速轉心相。壞不壞心相。無形心相。無邊自在心相。清淨差別心相。垢無垢心相。縛解心相。諂曲質直心相。隨道心相。と云ひ、探玄記第十四^{紙三十一}に、是を釋して、知衆生諸心差別相とは總なり。莊飾世

心相以下は別なり。莊飾世心相とは、八識心を以て能く世を飾るを云ひ。速轉心相。壞不壞心相とは、生住異滅の四相遷流して、停らざるを云ひ。無形心相とは、彼の心を觀するに、心相混亡するを云ひ。無邊自在心相とは、無量無邊の境界に攀緣自在なるを云ひ。清淨差別心相とは、本性清淨にして、自性不染なるを云ひ。垢無垢心相とは、煩惱に同じ、煩惱に同せざるを云ひ。縛解心相とは、性として、煩惱の繫縛を離るを云ひ。詔曲質直心相とは、諸の菩薩願力を以ての故に生を受け、詔曲に似同して、然かも衆生利益を成ずるを云ひ。隨道心相とは、衆生等業に隨ひて、生を受くるを云ふとし。即ち此の十種の心相に依りて、心の行相體性、自相、因相等を顯はすと云へり。又華嚴經第三十六初紙寶王如來性起品に依るに、一に虛空無依喻。二に法界無改喻。三に大海潤益喻。四に大寶出生喻。五に寶珠消海喻。六に虛空含受喻。七に藥王生長喻。八に劫火燒盡喻。九に劫風持壞喻。十に塵含經卷喻の十喻を説きて、次第の如く、如來の十智、即ち一に平等無依智。二に性無增減智。三に益生無念智。四に用興體密智。五に滅惑成德智。六に依持無礙智。七に種姓深廣智。八に知無不盡智。九に巧便留惑

智。十に性通平等智の十智を説けり。此の如く、華嚴經中處處に、或は緣慮の心體に就き、或は心相に約し、又、或は性起の具德に就きて、十心を説くは、是れ即ち無盡の義をあらはさんが爲めにして、所謂三乘小乘に八識、又は六識等を建立するど、同日の論にあらざるなり。華嚴五教章卷下三紙に、
若依圓教。即約性海圓明。法界緣起。無礙自在。一即一切。一切即一。主伴圓融故。說十心以顯無盡。如離世間品及第九地說。又唯一法界性起心。亦具十德。如性起品說。
と云へり。次に若し同教一乘の所談に依るに、小乘三乘等の諸教は、もと是れ別教一乘より流出せる、枝末の法門にして、而かも其の一乘教の爲めに方便と爲り、所謂所流なり、所目なり、攝方便なるが故に、前に説く小、始、終、頓等の諸教建立の六識八識等、並びに以て皆此の中に攝すべきなり。華嚴五教章卷下三紙に
若約同教。即攝前諸教所明心識。何以故。是此方便故。從此而流故と云へり。五教に互りて、心識建立の差異あること、以て知るべし。

第二項 五教に就て心識建立を異にする所以

前項既に一家五教の判に約して、心識建立の要旨を説明せり。然るに何が故に根本所依の一心に於て、是くの如く五種の差別を成するや、是れ蓋し説明せざるべからざる問題なり。華嚴五教章卷下^{左三紙}に、此の問題を提起して、左の如く云へり。

問云。云何一心約就諸教。得有如是差別義耶。答此有二義。一約法通收。二約機分齊。

と蓋し根本所依の一心に、五種の差別の義を生ずるは、即ち法體其の者に於て、自ら五義門を具すると、所化の有情に五類の差別あるに由りてなり。約法通收とは、前の義にして、約機分齊とは後の義なり。初めに法體其の者に、自ら五義門を具すとは、華嚴五教章卷下^{左三紙}に、

由此甚深緣起一心具五義門。是故聖者。隨以一門攝化衆生。

と云へり。五義門とは、一に攝義從名門。二に攝理從事門。三に理事無礙門。四に事

盡理顯門。五に性海具德門なり。初めに攝義從名門とは、是れ小乘教には、唯だ阿頼耶の名を説きて未だ其の義を説かず。義を攝して名に従ふが故に攝義從名と云ふ。二に攝理從事門とは、是れ大乘始教には、唯だ現象的、生滅の事象を説きて、未だ實體的不生不滅の理體たる眞如の隨緣せる阿頼耶識を説かず。理を攝して事に従ふが故に、攝理從事と云ふ。三に理事無礙門とは、是れ大乘終教には、具さに不生不滅と生滅と和合して、一に非ず異に非ざる理事無礙の阿頼耶識を説きて、所謂理事通融二分の義を得るか故に、理事無礙と云ふ。四に事盡理顯門とは、是れ頓教大乘には、離言絕慮不可説と談じて、心識差別の相を蘊盡して、平等一味の理性を顯すが故に、事盡理顯と云ふ。五に性海具德門とは、是れ圓教には、性海圓明に約して、法界緣起無礙自在、一即一切、一切即一、主伴圓融と説くが故に、心識建立の如きも、即ち十心と説きて、以て重重無盡たることを顯す。これ性海の具德なるが故なり。上來是くの如く甚深緣起の一心に五義門を具して、本を動せずして常に末、末を壞せずして常に本なるが故に、聖者隨つて一門を以て衆生を攝化するなり。次に所化の有情に五類の別ありとは、華嚴五教章卷下^{左三紙}

に、

約機明得法分齊者。或有得名而不得義。如小乘。或有得名得一分義。如始教。或有得名得具分義。如終教。或有得義而不存名。如頓教。或有名義俱無盡。如圓教。

と云へり。名を得て、義を得ざるものとは、即ち小乗教には、唯だ阿頼耶の名を説きて、其の義を示さざるを云ひ。名を得、一分の義を得とは、始教大乘は、阿頼耶の名を得、又不生不滅と、生滅との二義の中、一分生滅の義を得るを云ひ。名を得、又具分の義を得とは、終教大乘には、阿頼耶の名を得、而かも不生不滅と生滅との具分の義を得るを云ひ。義を得て、名を存せざる者とは、頓教大乘には、一切諸法離言絶慮と説くが故に、唯だ義を得て、其の名を泯絶するを云ひ。名義俱に、無盡なる者とは、即ち圓教には、十心を説きて、以て無盡を顯し、名義俱に無盡なるを云ふ。是くの如く所被の有情に五類の差別あるが故に、自ら能被の教に、小始終頓圓の一は法所談あらしむ。之れを要するに、所依の心識五教の所説同じからざるは、五教の體に於ひて、自ら五義門を具すると、一は衆生の機に五類の別ありて、得法

の分齊を異にするが故なり。心識建立に異説を生ずる所以を知るべし。

第四節 十重唯識論

第一項 十重唯識論の本據及び所由

前節既に唯心緣起論に就きて、其の本據及び諸教心識建立の差別の要義を略説せり。以下賢首大師の妙釋たる、十重唯識の深義を述ぶべし。然るに、賢首大師の十重唯識の深義を建立し給ふ所以は、華嚴經探玄記第十三右紙に、

言三界虛妄但一心作者。此之一文諸論同引證成唯識。今此所説是何等心。云何名作。今釋此義。依諸聖教。説有多門。

と云ひ、凝然大徳の華嚴十重唯識瓊鑑章に、

今就華嚴圓教所説。明唯識行相。解唯心體用。然華嚴經唯識相狀。散説非一。攝陳亦多。或普光之會問明一品。或夜摩之場偈讚一章。或他化之殿現前一地。或逝多之林知識一段。專明唯心之道。偏陳唯識之相。唯識法義由來久矣。故華藏世界是覺心之所變。娑婆國土迷識之所起。大師毘盧舍那世尊。廣

說此法。救度衆生。初成道暮。觀識性於樹下。二七日朝。唱心法於欲頂。虛曠宏遠。無彼此之門。寂寥冲玄。絕是非之域。斯迺德海廣蕩。騰濤瀾而音麗。義峰岷峨。榮稠林而色新。隨緣轉變之事。千象森然。任性生長之相。萬形歷焉。寔是衆義之朝宗。諸法之旨歸。蕩蕩乎圓通。洋洋焉鎔融者。唯此心道。頗盡要妙者也。華嚴圓教七處八會。其第六會有十地品。第六地中具說十二緣起並是唯心所攝。故彼文云。三界虛妄但是一心作。十二緣分是皆依心。華嚴高祖賢首大師。因釋此文。立十重識。示義寬狹。顯理淺深。諸教心法分齊炳然。圓宗識相建立窮究。と云ひ。又華嚴法界義鏡卷上二十六に、紙右唯識法門。源出華嚴第四會中覺林菩薩偈讚。廣說三無差別唯識道理。第六會說三界唯心。知識段中說唯識義。一經始終散說極多。第六地中三界唯心諸論皆引明唯識理。即二十唯識。成唯識論等。賢首大師。因此廣立十重唯識。一切諸法皆心所作。森羅萬像從此流出。是故諸法皆自心攝。心能作佛。心能修法。心謬流轉。心正感滅。本來真心常恒具德。一心業用不可思議。なりと云へり。即ち大師建立の十重唯識の義は華嚴經に廣く唯心緣起の文を

説く中別して經第二十六三紙十地品の中第六現前地の下に廣く釋迦牟尼佛菩提樹下成道自内證の法門たる十二緣起支の順逆二觀を明かして。次に三界虛妄但是一心作。十二緣起皆是依心と説けるもの、即ち是れにして、既に説けるが如く此の文は馬鳴菩薩の大乗起信論義記卷中末十七紙左には、是故三界虛偽唯心所作として之を引用し。而して其の唯心とは不生不滅と生滅と和合して、一に非ず、異に非ざる、眞妄和合の阿梨耶識と爲し。彌勒菩薩の辨中邊論頌初九、無著菩薩の攝大乘論卷上眞諦譯五、一左、玄、并譯三、四左、佛陀扇多譯六、七左及び世親菩薩の二十唯識論八、六右、護法等菩薩の成唯識論第七、紙左等には、並びに過去善惡の業に依りて招感せる異熟阿賴耶にして、其の性は無覆無記なりと云ひ。又世親論師の十地經論第八六紙以下には、自性清淨第一義心と爲して、其の性は純一無漏衆德具足なりと云へり。是くの如く同じく三界虛妄但是一心作の文を釋するに、或は有爲緣起となし、或は無爲緣起と爲し、其の所説必ずしも一準ならず。故を以て支那に在りても、淨影寺慧遠法師の如き、相州南道の地論師は、前七識を妄とし、第八阿梨耶識を以て眞識、即ち眞如識なりとして、阿梨耶は、此に正翻して

無没と云ふ生死に在りても、失没せざるが故なり。傍翻するに、八名あり。藏識と名づけ、聖識と名づけ、第一義識と名づけ、淨識、眞識、眞如識、家識、本識等と名づく。と云ひ、又道龍法師の相州北道の地論師は、第八阿梨耶を以て、無明妄心として、此の妄心が、即ち諸法を生ずる根本なりと説き、又、眞諦等舊譯の攝論宗の諸師は、阿頼耶は是れ無記無明隨緣の識にして、亦無没識と名づけ、第九阿摩羅識を立て、此れ眞常淨識なりとし、相州法勵等の涅槃宗の諸師は、涅槃經の佛性緣起の義に依るが故に、阿頼耶眞妄和合の義を立て、更に玄奘、慈恩等唯識家の諸師は、即ち無着、世親、護法等諸菩薩を相承して、即ち阿頼耶を以て、異熟識、無覆無記の性なりと爲せり。上來是くの如く、唯心緣起の法門は、根本華嚴經に發して、而かも諸家の間に幾多の異義を生じ、諍論紛紛、適從する所を知らざるに至れり。賢首大師の十重唯識の釋は、蓋し此等の紛亂錯雜せる諸家の異說を統合整理し、以て古今諸師の異說を階定せるものにして、即ち大師は、阿梨耶に關しては、馬鳴菩薩の眞妄和合說を認むると同時に、世親論師の自性清淨說をも認容し、殊に華嚴經十地品の、三界虛妄但是一心作の文に關しては、華嚴五教章卷下二紙には、

又如十地經云。三界虛妄唯一心者。攝論等約始教釋。爲頼耶識等也。十地論約終教釋。爲第一義眞心也。

と説きて、即ち經に三界虛妄唯一心と説ける。之を攝大乘論には、以て阿頼耶識となせとも、十地經論には、第一義眞心なりと爲す、此の義奉行すべし。阿梨耶は、眞妄和合の識にして、其の體眞如なり。眞如隨緣して、阿梨耶識を成すと云ふ。是れ馬鳴、世親兩大士の本源に依準して、唯生滅の有爲緣起說を排して、不生不滅と生滅と和合して、阿梨耶識を成する無爲緣起說を探り、更に進んで、自家獨特の唯心說を樹立せるものにして、換言すれば、華嚴經十地品所說の、但是一心作の文に基きて、幾多の論家、釋家各々所見に依りて、自の唯心說を成立するに、幾多の異說紛紛として競起し、其の末流に至りては、又融和すべからざるの狀を呈せるを以て、大師は即ち馬鳴、世親兩大士の所說に基きて、此等の唯心說を體系的に組織し、批判し、以て終に兩大士の本源に歸せしめ、猶ほ進んでは自家の法界緣起說を成立標榜せしものにして、十重唯識の中、前の三重に於ては、玄奘、慈恩等諸師の新譯家の阿頼耶緣起說に對する、根本的解釋と批判とを與へ、中の四重に於て

は、地論攝論等、舊譯家の眞如緣起に、根本的説明を試み、以て融和折衷して、彼此衝突矛盾するところなからしめ、後の三重に於ては、華嚴一家の生命たる無盡緣起の大義に則りたる、唯心緣起説の眞髓を發揮し、即ち爰に整然たる佛教唯心緣起論の體系を成立せるものにして、蓋し佛教史上に於ける、偉觀なりと云ふべし。

第二項 十重唯識の相承及び龜鏡

其一 十重唯識説の相承

前項既に説明せるが如く、十重唯識の深義は、三祖賢首大師の建立せし所にして、正しくは、華嚴經第二十六、十地品の中、第六現前地の下の所明に基き、多く馬鳴、世親等諸大士所立の心識説を以て、根本義と爲せり。然るに二祖至相大師の華嚴經孔目章第一紙右、十重唯識章に依るに、華嚴經第六初紙、菩薩明難品に、緣起甚深等の十甚深を明す中、初めの緣起甚深に於て、唯心緣起の法門を説くに就き、即ち十門を開きて、唯識の義を説明せり。一に擧數。二に列名。三に出體。四に明教興意。五に建立。六に辨成就不成就。七に明對治滅不滅。八に明薰不薰。九に

辨眞妄不同。十に歸成第一義無性性。是れなり。此の中、初めに擧數とは、諸經論の所説に依るに、一に或は一心を立つるあり、即ち第一義清淨心なり。二に或は三法を擧ぐるあり。心意識の三を建て、又は成唯識第二紙左、二十八に未渡の經たる密嚴經の伽陀を引きて、衆生心二性。内外一切分。所取能取纏。見種種差別と説き、見相二分と、識の自體分たる自證分の三法を説ける是れなり。三に或は八識を成するあり、阿頼耶等の八識是れなり。四に或は九識を建つるあり、八識及び阿摩羅識これなり。五に或は十心を成するあり。華嚴經第二十七紙右、十地品の中、第九善慧地の下に、十稠林を説く中、第一心行稠林の條に、衆生諸心差別相等の十心を説く是れなり。六に或は十一識を成するあり、成唯識論第八紙右、二十九に、十一識等と説けるものにして、即ち眞諦譯世親攝大乘論釋第五縮往八に、身識。三〇右、身者識。受者識。應受識。正受識。世識。數識。處識。言說識。自他差別識。善惡兩道生死識の十一識を説ける是れなり。七に或は攝して四識と爲す、眞諦譯攝大乘論釋次下の文に、若廣說有十一種識。若畧說有四種識。一似塵識。二似根識。三似我識。四似識識と説ける是れなり。八に或は開きて、無量識とす。

華嚴經第二十七紙左三十地品に、乃至無量百千種種心差別相等と説けるこれなり。以上心識の建立に、八門の別ある中、第一第二は終教の義、第三は始教の義、第五、第八は、圓教の義、第四第六第七は、亦始終二教の義にして、是れ諸教心識の異説なり。第二に列名とは、阿頼耶識。阿陀那識。心意識。乃至窮生死蘊。等の名を列ぬるを云ひ。第三に出體とは、諸法唯識の體を求むるに、究竟して如來藏を用ひて體と爲す、知ることを得る所以は、勝鬘經に云はく、如來藏法あるに依りて、衆苦を種へ、乃至涅槃を樂求する等と、故に知ることを得るなり。又、如來藏不染而染とは、是れ即ち生死の體なるに據る。染而不染とは、此れ生死即涅槃にして、更に異法無きに據る。又、經文に六識及び心法智等とは、是れ其の生滅にして、是れ可依に非ず、唯だ如來藏のみ不生不滅なり、究竟依と成ると云へり。第四明教興意以下、乃至廣く諸教に通じて論ずる所あり。案するに、至相大師唯識章の所明は、専ら新譯の論本を引き、以て、舊譯家の大乘起信論に合し來り、無著、世親等の根本義を探りて、所謂性宗相宗の融會を爲し、以て遂に一乘圓教の心識論を建立せんとするものにして、即ち若し心の體性を論ずるは、まさに舊譯家の所論に依

るべく、若し其の相狀に就かば、正さに新譯家の如くなるべしとは、蓋し至相大師の風格なり。第十歸成第一義無性性の條に曰く、

歸成第一義無性性者。此唯識門性。一切法皆是唯識。或唯三識。或唯一識。所謂本識。或唯八識。或唯九識。或唯十一識。或唯四識。是三乘唯識。此據同教言。或唯十識乃至種種。是一乘唯識。是據別教言。

と、以て至相大師所説の眞意を知るべし。藤田寺經曆和上の華嚴孔目唯識章講述に、

此是此章中。十門立唯識義林。華嚴宗教之元基也。賢首大師深入經相之奧堂。探玄。教章等。釋文之玄理。悉無不出從至相大師者。

と云へり。即ち賢首大師十重唯識の深義は、是れ二祖至相大師の深義を開顯せしものにして、其の基く所、孔目章唯識章の所説に在りと云ふべし。

其二 十重唯識義の龜鏡

前項既に十重唯識義所立の本據を明かにして、又、其の相承の依りて來る處を詳

かにせり。然るに至相大師の所明たる、其の所説頗る汎爾にして、未だ正しく十重唯識の明釋を見ず。然るに法相家の所談に依るに、慈恩大師は、其の著大乘法苑義林章第一之末右紙般若心經幽贊卷上紙十二等に於て、五重唯識義を建立し、以て諸經論に散説せる、唯識の義を集成統一せり。蓋し恐らくは、賢首大師の十重唯識建立の龜鏡たるものにして、賢首大師はこの五重唯識に基きて十重の唯識を建立し、彼の家に五重唯識を以て、一は唯識の教門を施設し、一は實踐修行の觀門に當てしが如く、大師も亦十重の唯識を以て、一は以て教に約し、解に就きて説き、一は以て華嚴行者の實踐修道の觀門に配したるなるべし。是れ猶ほ一家十宗の教判が、一面初祖大師以來の教判を相承すと雖も、其の正しく龜鏡とする處は、即ち慈恩大師所立の我法俱有等の八宗の判にあるが如し。即ち爾下慈恩大師の所立に係る、五重唯識の要旨を略述すべし。抑も五重唯識とは、一に五重唯識觀と稱し、戒賢論師相傳の法門と唱へ、諸經論に散説せる、唯識の義を集成統一せるものにして、是れ萬法唯識を觀する、唯識觀門の愈より細に入り、淺より深に至る次第に就きて、總じて五重の別を立てたるものなり。大乘法苑義林章第一

之末右紙に所觀の唯識は、一切の法を以て、而かも自體と爲し、通じて有無を觀じて、唯識と爲すが故に、略して五重ありと云へり。五重とは、一に遣虛存實識。二に捨滯留純識。三に攝末歸本識。四に隱劣顯勝識。五に遣相證性識是れなり。初めに遣虛存實識とは、遍計所執は、唯だ虛妄より起りて、都べて體用無しと觀じ、正しく空と遣るべし、情有理無の故なり。依他と圓成とは、諸法の體實にして、二智の境界なりと觀じ、正しく有と存すべし、理有情無の故なり。是くの如く空有を觀じて、有空を遣るを、遣虛存實と云ふ。凡夫異生は、無始已來我法を執じて有と爲し、事理を撥して空と爲すに由るが故に、此の觀の中、空觀を以て有執を對破するを遣とし、有觀を以て空執を對遣するを存とす。此れ唯識最初の觀門にして、一切位に於て思量し修證するなり。大乘法苑義林章第一之末右紙に、遣虛存實識。觀遍計所執唯虛妄起都無體用應正遣空。情有理無故。觀依他圓成諸法體實二智境界應正存有。理有情無故。(中畧)此觀中遣者空觀。對彼有執。存有有觀。對遣空執。今觀空有而遣有空。有空若無亦無空有。以彼空有相待觀成。純有純空誰之空有。故欲證入離言法性皆須依此方便而入。非謂有

空皆即決定。證真觀位非有非空。法無分別。性離言故。說要觀空方證真者。謂要觀彼遍計所執空爲門故入於真性。眞體非空。此唯識言既遮所執。若執實有諸識可唯。既是所執。亦應除遣。此最初門所觀唯識於一切位思量修證。と云へり。二に捨濫留純識とは、依圓の事理皆識を離れずと觀すと雖も、然かも此の内識には境あり心あり、心は唯だ内有なるも、境は亦外に通ず、故に但だ唯識と言ひて唯境と言はず。是くの如く、境は心外の妄境に濫する恐れあるを以て、之を捨て、唯だ心體の純を留めて、唯識と觀するを捨濫留純と名づく。義林章に、捨濫留純識。雖觀事理皆不離識。然此内識有境有心。心起必託内境生故但識言唯不言唯境。(中畧)成唯識言。識唯内有。境亦通外。恐濫外故但言唯識。又諸愚夫迷執於境。起煩惱業生死沈淪。不解觀心懇求出離。哀愍彼故說唯識言。令自觀心解脫生死。非謂内境如外都無。由境有濫捨不稱唯。心體既純留說唯識。

と云へり。三に攝末歸本識とは、前に留めたる心法に、識の自體の本と作用の未たる見相二分との別あり。今其の末を攝して、本に歸せしむるが故に攝末歸本

と名づく。義林章に

攝末歸本識。心内所取境界顯然。内能取心作用亦爾。此見相分俱依識有。離識自體本末法必無故。(中畧)攝相見末歸識本故。所說理事眞俗觀等皆此門攝。と云へり。四に隱劣顯勝識とは、心及び心所は、俱に能く變現するも、其の中、心王の體は殊勝なり。心所は劣にして、但だ勝に依りて生ず。故に但だ唯心と説きて、心所と説かず。今劣を隠して彰はさず、唯だ勝法を顯はすを隱劣顯勝と名づく。義林章に、

隱劣顯勝識。心及心所俱能變現。但說唯心非唯心所。心王體殊勝。心所劣依勝生。隱劣不彰唯顯勝法。

と云へり。五に遣相證性識とは、凡そ識を論ずるに、具さに理事あり、事は相用と爲して遣て取らず。理は性體と爲して求めて、作證すべし。依他を觀じて所執の覺を遣るは、繩の覺を起す時、蛇の覺を遣るが如く。今圓成を見て、依他の覺を遣るは、繩の衆分を見て、蛇の覺を遣るが如し。之を遣相證性と名づく。義林章に、

遣相證性識。識言所表具有理事。事爲相用遣而不取。理爲性體應求作證。勝鬘經說自性清淨心。

と云へり。上來五重唯識の中第一重は、三性の中の遍計所執を遣除して、依他圓成の實を存じ。二三四の三重は、依他の中に就きて、次第に濫末を捨遣して、本勝を留め。第五重は、更に依他の相用を遣去して、圓成の性體を證見することを明かせるなり。賢首大師の十重唯識論は、蓋し其の範を此の五重唯識觀に取るものにして。即ち十重唯識の第一相見俱存の唯識は、第一遣虛存實識に。第二攝相歸見の唯識は、第二捨濫留純識に。第三攝數歸王の唯識は、第四隱劣顯勝識に。第四以末歸本の唯識は、第三攝末歸本識に。(造語は全く同じと雖も、其の内容全く異なる) 第五攝相歸性の唯識は、第五遣相證性唯識に當り、彼此能く其の軌を一にせり。想ふに賢首大師の十重唯識は、此の五重唯識觀を基礎として、更に擴充補足せるものなるべし。

第三項 十重唯識の要旨

其一 相見俱存唯識

前項既に慈恩大師所立の五重唯識の要義を畧述せり、以下正しく十重唯識の要義を説明すべし。第一相見俱存唯識とは、華嚴經探玄記第十三紙十七に、賢首大師釋して、

一相見俱存故說唯識。謂通八識及諸心所并所變相分本彰具足。由有支等薰習力故。變現三界依正等報。如攝大乘及唯識等諸論廣說。

と云へり。凡そ此の門の意は、諸の愚夫等の心外の實我實法の執著を破拆して、直ちに心内の甚深の諸法唯識の道理を顯はさんと欲するに在り。蓋し諸の衆生は、心外に法を執して、虛妄顛倒して、業を造りて執受し、生死相續して休息あること無し、佛爲めに慙念して唯識の道理を説き玉ふ。諸法は唯識にして、別に法あること無し、自心轉變して諸法を作成す。愚夫所執の心外の諸法は、本來都無にして體性皆空なり、遍計所性は、是れ虛妄なるが故なり。已に心外の諸法を遣る、須らく内を留むべし。識内の諸法の緣起を見るに、依他起性は、因緣和合して種種の法、假りに成立するが故に。又、圓成實性は、是れ諸法の體なり、常恒湛然にして眞の妙有なるが故に、此の二性俱に有なり。依他法の中に、心あり、境あり、心

は是れ能緣境は即ち所緣なり。能緣の心生すれば、必ず其の境を變ず、自所變の境を所緣と爲すが故に、之を内境と名づく、心外に非るが故なり。能變能緣を見分と云ふ。見解照了にして事顯著なるが故なり。所變所緣を相分と云ふ。行狀相貌事差別するが故なり。相と見と異なりと雖も、並びに心内の法なり。故に相見の俱存を名づけて唯識と爲す。外の妄法を遣去して、心内の能所緣を存留するが故なり。唯だ是れ外塵を簡持し簡去して、内識を持取す。識は是れ所持なり。能緣所緣通して識内の作なるが故なり。凡そ心識の内、若し實法に約すれば、色心の二法あり。若し分位を取れば、更に非心非色の不相應行法を加へて、三法を成し、又更に若し相應を分たば、心王の外に別に心所を取りて四法を成す。此の四種の法は、並びに依他起の法にして、即ち是れ有爲聚集の相なり。若し識性を取れば五種を成す。眞如無爲圓成實性を加ふるが故なり。是れを五法事理又は五種の唯識と稱す。五種唯識は、即ち開きて、百法を成す。百法通じて皆識を離れざるが故なり。百法の中、九十四法は、是れ有爲法にして、餘の六法は、無爲法なり。依他起の有爲法は、九十四法の中、攝して四分と爲して、其の法相

を盡す。一に相分、是れ所緣の境なり。二に見分、是れ能緣の心なり。三に自性分、是れ心の自體なり。體能く緣境の事を證知するが故に、自證の名あり。四に證自證分、心の自體分に證知あり。自證と證自證との二分互に證して無窮に非るが故なり。此の四分を攝して、三分と爲す。第四分を以て、自證分に攝入するが故なり。或は二分と爲す。後三分は通じて、是れ能緣の性なるが故に、總じて見分と名づくるが故なり。或は總攝して一體と爲す。心用の分齊に四の差別ありと雖も、皆心を離れざるが故なり。是れに依りて、西天の論師、依他起の法に依りて、分を立つるに、總じて四家の不同あり。一に安慧論師は、一分の義を立つ、謂く自證分なり。相見の二分は、是れ所執なるが故に、別立せず。二に難陀論師は、二分の義を立つ、謂く見分と相分となり。此の二は、是れ能緣、所緣の法なるが故なり。三に陳那論師は、三分の義を立つ、相分と見分と自證分となり。能緣所緣は、必ず體有るが故なり。四に護法論師は、四分の義を立つ、更に證自證分を加ふるなり。これを安難陳護、一、二、三、四と云ひ、護法の義を以て正義とす。相見俱存の唯識と稱するもの、護法論師の義に依るなり。四祖清涼大師は、華嚴經疏演義鈔

第三十七之上記第一輯第十卷第四紙右に、相見俱存者。唯識正義と云へり。相分の中に、所變所緣色等の境界の諸法あり、此の所變の境に、二種あり。一に本質境とは、阿頼耶の能所變の相分生ずれば、一念の異熟識、起ることありて、頓に三種の境を變ず、種子五根器界是れなり。此の三境を以て、所緣とするが故に、等流習氣の異熟識生ずるは、即ち等流果にして、是れ因能變なり。所生の異熟の頓に三境を變ずるは、是れ果能變なり。六識の起るや、此れを以て、本質と爲して、各々影像を變ず。二に影像境とは、六識の緣境、各々自識に住して、其の所應に隨ひて、影像を緣起するを云ふ。諸識通じて、此の影像を親所緣と爲す。即ち前五識の如きは、第八識所變の五塵に託して、彼に似たる影像の相分を變起して、以て所緣と爲して、籌慮了別し、第六識之に同じく、第七識は、但だ第八の見分を緣し、第八所緣の境に杖するに非ずして、而かも見分に託して、影を變じて、境と爲し、第八は直ちに自の所變の境を緣す。自の所變の境は、即ち影像なるが故なり。然るに識所緣の境に總じて三種あり。一に性境とは、實種より生じて、實の體用あり、能緣の心、彼の自相を得る、五八識所緣の境界を云ひ。二に獨影境とは、能緣の心と同一種より

生じて、實の體用無く、能緣の心自相を得ざれば、本質あること無く、即ち影像のみ獨り起る、第六識の龜毛等を緣するが如きを云ひ。三に帶質境とは、能緣の心自相を得ざるも、而かも其の緣相に本質ある、第七識所變の相の如きを云ふ。此等の三種は、並びに所緣の相分なり。然かも彼の見分も、亦見の所變なり、自體轉じて相見に似て起るが故なり。今且らく相分を變と名づくるに約して、是の如きを相見俱存唯識と名づく、是れ依他の心内の諸法なり。此の門の所立は、多く攝大乘、成唯識等の論に依るものにして、護法論師等、盛んに此の義を立てたり。これを慈恩大師所立の五重唯識觀に見るに、即ち第一遺虛存實識是れにして、心外所執の遍計所執の妄法を遣去して、心内の能所緣たる、見相二分、即ち依他等の諸法を留存するなり。

其二 攝相歸見唯識

十重唯識の第二攝相歸見唯識とは、第一重には、心外の妄法を遣りて、心内の諸法を留む。第二重は、即ち心境の中に於て、所緣の境相を攝して、能緣の見分に歸し、

内境の相分を置かず、故に唯識と説くものにして、賢首大師釋して、

攝相歸見故說唯識。謂亦通入識王數差別。所變相分無別種生。能見識生帶彼影起。如解深密經、二十唯識觀所緣論、具說斯義。

と云へり。是れ前には、心外の妄法を遣りて、具さに識内の諸法を存するが故に、所留の法に心あり境あり。今此の門の意は、心境の中に於て、境を攝して、心に歸するを名づけて、唯識と爲すなり。蓋し所緣の境は、心を離れてはあることなし。心識心所の生起する時、必ず前境を變じて、以て所慮所託の法と爲し、此の境法に託りて、能緣の心を起す、所慮は是れ境なり。所託は即ち是れ親所緣緣なり。若し其の本質は疎所緣緣なり。是の故に心の起ることは、必ず内境に託す。内境は即ち心の所緣なり、心を離れては緣無し、是の故に境を攝して、能緣の心に歸す、心所も亦爾かなり。皆境を變ずるが故に、一切の境界は、既に心心所の所變の影像なり。是の故に境界として、別の種子よりして、生ずること有ること無し。心所生して、彼の影を帶して、心心所の法を起す。實種より相分の心影を生じて、實に別の種無し。此の義に依るが故に、境を攝して心に歸す。若し實に別種あ

らば、攝歸し難きが故なり。然るに親光論師の所立に依るに、相分は是れ虚にして、見分は實なりと云ひ。難陀論師は、相見は同種より生ずと云ひ。陳那論師は、相分は實有に非すと云ふ、攝相歸見と説くは是の故なり。若し護法論師の所立に依れば、相分も亦別種より生ずと云ふ、今此の義に依るに非ざるなり。是を慈恩大師の五重唯識觀に見るに、第二の捨濫留純識に配すべし、蓋し所緣の境は、心外の妄境に濫する恐あるが故に之を捨て、唯だ心體の純を留めて、唯識と觀するが故なり。

其三 攝數歸王唯識

十重唯識の第三攝數歸王唯識とは、前の第二重には、心境相對して、所緣の境たる相分を攝して、能緣心の見分に結歸せり。然るに其の見分に、具さに八識の心王心所あり。諸の心所は、心王に依託して、別の自體無きが故に、心王に結歸して、唯識と説く。相宗の義に依るに、心王に別にして、心所に體ありとなせり。今心所無別體を説くは、即ち性宗の所談に依るなり。賢首大師釋して、

攝數歸王故說唯識。謂亦通具八識心王。以下彼心所依於心王無自體故。許彼亦是心所變故。如莊嚴論說。

と云へり。此の意を釋するに、既に説けるが如く、前門の唯識には、具さに八識及び諸の心數ありて、心王心所の差別を建立せり。今此の門にありては、諸の心所を攝して自の心王に歸す。是れ即ち八識の中に、各々相應する所の、一の心所を攝して、自の心王に歸して、以て唯識の義を談するなり。諸八識の中、第八阿賴耶識に、五の相應の心所あり、遍行是れなり。第七末那識に、十八の心所あり、五遍行と別境の中の慧と四根本惑たる、貪、癡、慢、我と、及び掉舉、昏沈等の八隨煩惱是れなり。第六識には、五遍行、五別境等の一切の心所あり。眼等の五識に、三十四の心所あり。五遍行、五別境、善の十一、本惑の中、貪、瞋、癡の三、中隨惑の二及び八大隨惑是れなり。是くの如く、諸八識に、應に隨ひて、相應の心所あり。然るに是等相應の心所は、心王に依託して、別の自體無く、一一の心所は、心王の所變なるが故に、即ち一切の心所は、皆悉く心王に歸して、別體あることなく、留むる所は、唯八識心王のみ。而して八識心王は、若し當教に約して論ずれば、八識別體あり。若し後

教に對望せば、八識は、體是れ一にして、別體あること無し。末を開きて本に異にし、本末合數して、通じて八識あり。此の義に依るが故に、一切の諸法は、唯だ八識心王の體あるのみ、無著論師の大乗莊嚴經論の所説の如き是れなり。是を慈恩大師の五重唯識觀に見るに、第四隱劣顯勝識に配すべし。慈恩の第三攝末歸本の唯識は、其の語、今の第四以末歸本の唯識に同じ、然かも、頗る其の内容を異にし、正しく配すべからず。

其四 以末歸本唯識

十重唯識の第四以本歸末の唯識とは、前の第三重には、八種の心王を以て、攝數歸王の心王と爲せり。然るに諸八識の中に、本あり末あり。此の故に、今第四重には、其の末を攝して本に歸し、以て唯識の義を談す。賢首大師釋して、

以末歸本故說唯識。謂七轉識皆是本識。差別功能無別體故。楞伽云。藏識海常住。境界風所動。種種諸識浪。騰躍而轉生。又云。譬如巨海浪無有若干相。諸識心如是。異亦不可得。解云。既離水無別有浪。明離本識無別六七。

廣如彼說。

と云へり。此の意を釋するに、前門の唯識には、具さに八識を存し、八相森然として、各々業用を爲す。然るに諸八識の中には、第八阿賴耶識を以て本と爲し、末那等の七識を以て末と爲す。八より七を流出し、七は八に従りて出生するなり。故を以て、末那等の七識は、皆是れ本識第八阿賴耶の差別功能にして、第八阿賴耶を離れて外に別體あること無し。抑も第八本識の相とは、凡て阿賴耶識に、眞あり妄あり、眞妄の二義、和合集成して、第八阿賴耶の體を成するを一心と云ふ。本覺眞如、無明の薰を受けて妄と和合して、阿賴耶となるが故に、第八識は是れ其の根本の一心なり。此の一心轉變して七轉識と爲る。中に於て、第七を末那識と名づけ、第八阿賴耶識を緣して、計して我と爲し、更に我所を執して、展轉絶ゆること無く、前六の事識は、境に隨ひて麤動す。並びに是れ本識第八阿賴耶の功能隨緣流變を作成し、七轉の波を成せしなり。是の故に、若し末を以て本に歸せば、本の外に何者の存するなく、唯是れ第八阿賴耶識のみ。楞伽阿跋多羅寶經第一縮黃六紙右に、藏識の海は、常住なれども、境界の風に動せられて、種種の諸識の浪騰躍

して、而かも轉生すと説き。又譬へば海の波浪の如し、是れ則ち差別無し。諸の識心も是の如し、異も亦不可得なりと説ける即ち是の意なり。

其五 攝相歸性唯識

十重唯識の、第五攝相歸性の唯識とは、前の第四重には、本覺隨緣して、阿賴耶識を成じ、此の阿賴耶より、末那等の七識を流出するが故に、即ち末那等の七識を攝して、如幻假有の識相たる阿賴耶の本識に歸したり。此の故に、今此の第五重に來りて、更に其の阿賴耶の事識を攝して、無爲の眞性に歸して、諸法唯識の義を明す。賢首大師の釋に、

攝相歸性故說唯識。謂此八識皆無自體。唯是如來藏平等顯現。餘相皆盡。經云。一切衆生即涅槃相。不復更滅等。楞伽云。不壞相有八。無相亦無相。如是等文。誠證非一。

と云へり。此の意を釋するに、前にも説くが如く、前門の唯識には、本覺動に隨ひて、阿賴耶と爲ると説きて、事に約して識相を存留せり。此の故に、今第五重に至

りて其の立つる所の頼耶は素と是れ眞を離れて別の自體あること無きが故に、即ち其の識相を攝して、本覺の理に歸して、以て唯識と爲すなり。蓋し眞如隨緣して、諸法となるも、諸法は素とより無性にして、別に自體あること無く、唯だ是れ本覺の如來藏性、平等に顯現して餘相皆盡き、一切衆生即ち涅槃の相、本來常住にして、後際盡くること無く、徳相圓滿して復た更に滅せず。此の故に所談の唯識は、一切諸法眞如實際にして、無相寂滅不可思議、諸佛衆生平等にして、有情非情夷齊無二なり。楞伽阿跋多羅寶經第一縮黃六に、不壞の相に八あり、無相も亦無相なりと説き。維摩詰所説經註維摩經第四取六紙右に、一切衆生、即ち涅槃の相なり、復た更に滅せずと説ける、此の意なり。之を慈恩大師の五重唯識觀に見るに、第五の遣相證性識に配すべし。然るに彼此俱に事理相對して、事を遣りて理に歸するは、同なりと雖も、相宗の所談に依れば、眞如凝然不作諸法と説きて、眞如の隨緣を許さず。凝然常住の一邊にして、唯だ依他の識性と爲るのみと立て、然かも有爲生滅の依他の識相を捨て、無爲常住圓成の理に證入するを遣相證性と云ひ。今は眞如隨緣して諸法と爲り、生滅と不生不滅と和合して、第八阿頼耶を成

すと説くが故に、即ち阿頼耶は、別の自體あること無く、眞如如來藏性の顯現なり。此の故に、其の阿頼耶を攝して、眞如如來藏性の理に結歸すと云ふ。其の所談に、性相兩宗の相違あることを知るべし。

其六 轉眞成事唯識

十重唯識の第六轉眞成事の唯識とは、前の第五重には、事理の相對を以て事を攝して理に歸せり。是の故に今第六重に至りて、更に理を攪りて事を成じ、如來藏の理、自性を守らず、染緣に隨ひて、種種の法を作成することを明かす。賢首大師釋して、

轉眞成事故説唯識。謂如來藏不守自性。隨緣顯現。八識王數相見種現故。

楞伽云。如來藏爲無始惡習所薰習故。名爲識藏。密嚴經云。佛説如來藏。以爲阿頼耶。惡慧不能知。藏即頼耶識。又云如來清淨藏。世間阿頼耶如金作指環。展轉無差別。又勝鬘經。實性論。起信論。皆説此義。誠證非一。と云へり。此の意を釋するに、前門の唯識は、獨り眞性を立て、其の體相と爲し

て餘相を見ず。此の門の所立は、即ち眞如を轉じて、有爲の事を成ず。如來藏の理、自性を守らず染淨の縁に隨ひて種種の法と爲る、若し流轉門には、眞妄に隨ひ、若し還滅門には眞淨に隨ふ。是れ覺の上の無作の大用に約せるものにして、普現色身、全く性海なるが故に、眞如隨縁して、一切の相と爲る。楞伽阿跋多羅寶經第四^{縮黃六}に、如來の藏は、是れ善不善の因なり。能く遍ねく一切の趣生を興造す。乃至無始の虚偽惡習の爲めに熏せらるるを、名づけて藏識生すと爲す、無明住地七識と俱なりと説き。大乘密嚴經卷下^{縮黃八}に、佛、如來藏を説きて以て阿頼耶と爲す、慧は知ること能はず、藏は即ち阿頼耶なりと説き。又、如來清淨藏は、世間の阿頼耶なり、金と指環との如し、展轉して差別なしと説き。又、大乘起信論、究竟一乘寶性論等の論に多く此の義を説けり。

其七 理事俱融唯識

十門唯識の第七理事俱融の唯識とは、前の第五第六の兩重に於て、理性の湛然平等と、其の理を全ふして、諸法の事を成ずることを明すが故に、即ち第七重に至り

て其の所成の事法と理性とは、混融無礙にして、互に和會すと談じ。理事の俱融無礙を説くものにして、賢首大師は釋して、

理事俱融故説唯識。謂如來藏舉體隨縁成辨諸事。而其自性本無生滅。即此理事混融無礙。是故一心二諦皆無障礙。起信論云。依一心法有二種門。一心眞如門。二心生滅門。然此二門。皆各總攝一切法。勝鬘經云。自性清淨心不染而染。難可了知。染而不染亦難可了知。解云。不染而染。明性淨隨縁舉體成俗。即生滅門也。染而不染。明即染常淨本來眞諦。即眞如門也。即染之淨不礙俗而恒眞。此明即淨之染不礙眞而恒俗即染之淨不礙俗恒眞。是故不礙一心存二諦。此中有味。深思當見。經云。於諦常自二。於解常自一。論云。智障極盲闇。謂眞俗別執。皆此義也。

と云へり。是の意を案するに、既に説けるが如く、前門の唯識は、理を全ふして事を成ず。今此の門の意は、所成の事法と理と、混會し融通し和液することを説くものにして、如來藏性、舉體隨縁して、諸事を成辨し、萬象森羅として、而かも其の自性は、本とより生滅せず、即ち此の理事混融して無礙なり。理は是れ第五重所明

の相想俱に絶して、湛然寄るなき是れにして。事は第六重の唯識に説く諸識顯現なり。今は此の二の無礙混融を顯はすを以て所詮と爲す。大乘起信論（義記卷中本^{初紙}）に、一心の法に依りて二種の門あり。一には心真如門。二には心生滅門なり。然るに此の二門に皆各々一切の法を攝すと説けるが如き是れにして勝鬘、仁王等の經、梁譯攝大乘論等に、廣く此の義を明かせり。

其八 融事相入唯識

十重唯識の第八融事相入の唯識とは、前の第七重には、理事無礙性相混融を以て體狀となせしも、以下の三重は、事事無礙を以て相貌と爲す。就中、今の第八重は、用に約して、體上の功能の相入無礙なることを示せり。賢首大師の釋に、

融事相入故説唯識。謂由理性圓通無礙以理成事。事亦鎔融互不相礙。或一入一切。一切入一。無所障礙。上文云。一中解無量。無量中解一等。舍那品云。於此蓮華藏世界海之内。一微塵中見一切法界。又此品下云。於一微塵中。現有^三惡道天人阿修羅各各受業報。如是等文。廣多無量。如上下經説。と云へり。此の意を案するに、爾下三重の唯識に、事事無礙を以て、相貌と爲す中、

此の門には、事事相入し、方用交徹して、無礙の相を陳ふるを以て要旨とす、夫れ理性圓通、虛融無礙なり。理を以て事を成すれば、事亦鎔融し、彼此相入して、互に障礙せず。華嚴經第四^{二紙}盧舍那佛品に、此の蓮華藏世界海の内^左に於て、一一の微塵の中に、一切の法界を見ると説き。同第五^{左九紙}如來光明覺品に、一の中に無量を解し、無量の中に一を解すと云ひ。又同第二十六^{右十一紙}十地品第八不動地の下に、一微塵の中に於て見るに、三惡道天人阿修羅あり、各々業報を受くと説けるが如き、即ち是れなり。

其九 全事相即唯識

十重唯識の第九全事相即の唯識とは、事事無礙を以て相貌と爲して、唯識を談ずるの中、前の第八重には、用に約して、體上の功能を融することを明かして、即ち相入の義に就けり。今は體に約して、相即の義を論せり。賢首大師の釋に、

全事相即故説唯識。謂依理之事事無別事。理既無此彼之異。令事亦一即一切。上經云。知一世界即是一切世界。知一切世界即是一世界。又云。知一即

多多即一等。廣如經文。
 と云へり。此の意を解するに、夫れ理性圓通して、虛融無礙なり。此の故に理に依るの事は、事に別事なし。理に既に彼此の異なること無ければ、事も亦一多の別を混絶して、一即一切なり。一塵十方に即するが故に、一切即一なり。刹一塵に即するが故に、一念即無量劫なり。現在の一念を以て、過去未來の無量劫に即するが故に、多劫即一念なり。過去未來の無量劫時を以て、現在の一念に即するが故なり。華嚴經第四_{左九}紙盧舍那佛品に、一國土を以て十方に滿て、十方を一に入るゝも、亦餘り無し。世界の本相亦壞せず、無比の功德の故に、能く爾かるなりと説き。又同第八_{紙十五}菩薩十住品に、一即是多、多即是一と説けるが如き、即ち是れなり。

其十 帝網無礙唯識

十重唯識の第十帝網無礙の唯識とは、前の二重の唯識は、次第の如く、相入相即に約して、事事無礙唯識を談するも、何れも皆是れ單に一重にして、未だ累現に至ら

ず。此の故に今此の門の唯識は、譬に約して、一一の法の中に、重重に影現し、無盡無盡に顯現すと、法の至極を示すものにして、賢首大師の釋に、

帝網無礙故說唯識。謂一中有一切。彼一切中復有一切。既一門中如是重重不可窮盡。餘一一門皆各如是。思準可知。如因陀羅網重重影現。皆是心識如來藏法性圓融故。令彼事相如是無礙。廣如上下文說。

と云へり。此の意を解するに、既に説明せるが如く、理性圓通虛融無礙の故に、事事無礙相即入一即一切。一切即一にして、而かも重重影現して、一の中に一切あり。彼の一切に各々一切ありて、窮盡あること無く、永く際限を亡す。譬へば天帝釋宮所懸の網珠の重重に影現するが如し。是等の諸相は、皆如來藏識の法にして、自性本來圓通鎔融し、彼の事をして、一一理の如く、重重無礙ならしむ。依正の二報に、各々分圓あり、佛の中に佛あり、或は衆生あり、刹の中に刹あり、或は如來あり、塵の中に國あり、毛端に佛あり、依正の二報、交絡更互にして、重重に影現し、無盡無盡なり。華嚴遊心法界記_{紙十九}に帝網無盡を説きて、
 其猶因陀羅網。皆以寶成。由寶明徹影遞相現。於一珠中現餘影盡。隨一即

爾。更無去來也。今且向西南邊取一顆珠驗之。即此一珠能頓現一切珠之影。此一珠既爾。餘一一亦然。既一一珠皆一時頓現一切珠影。即此西南邊珠。復現一切珠中一切珠影。此珠既爾。餘一一亦然。如是重重無有邊際。即此重重無邊際之影。皆在此一珠中炳然遞現。餘皆準是。若入一珠中即入十方重重一切珠中也。何以故。此一珠中有十方重重一切珠。故十方重重一切珠中有此一珠。是故入一珠時。即入重重一切珠也。一切亦然。反此思之。即於一珠中得入重重一切珠。而竟不出此一珠。於重重一切珠中入一珠。而竟不離此重重一切珠也。と云ひ。凝然大徳の華嚴十重唯識圓鑑記卷下に、
 如因陀羅網等者。帝釋宮殿。珠網莊嚴。無量寶珠。羅列間錯。一珠之內現餘珠等。珠珠皆爾。所現諸現亦現餘珠。其中所現亦現諸珠。如是重重不可知數。如是圓教依正二報及一切法門。教義。理事。境智。行位。因果。體用等。一中一切。一一所現。一切諸法。重重無盡行相亦爾。喻是可思議法。即不思議少分相似。以顯圓融。
 と云へり。上來大師所立の妙釋たる十重唯識の要旨を略述せり。昔東大寺凝

然大徳華嚴經探玄記洞幽鈔一百二十卷を撰し、其の第九十一卷の末尾に、十重唯識の妙義を解釋し終りて、十重唯識總攝頌を作りて曰く、
 相見俱存說唯識。護法戒賢立此義。攝相歸見說唯識。陳那難陀親光等。
 攝數歸王無着等。攝末歸本相歸性。轉真成事二俱融。馬鳴堅慧同所說。
 相入相即帝網識。香象清涼別教宗。略去成事加假說。清涼圭山同所立。
 初三唯識始教意。中四終教亦通順。後三別教不共門。具足十重同等義。
 と。又、十重唯識義を要畧讚述して、述懐の頌に曰く、
 華嚴法界妙唯心。高大深遠超言聲。十重精詳義不紊。五階研覈理甚呈。
 瓊巖聳聳雲千里。光照赫赫月萬晴。主伴交映是吾識。體用宛然舊來成。
 と。高遠の妙釋、また深く研鑽すべきなり。

第四項 十重唯識の分齊

廣く諸經論に涉りて、唯識の義を談ずるに、相見俱存等の十重ある中、初の三重は、初教に就きて説く。第一相見俱存唯識、第二攝相歸見唯識、第三攝數歸王唯識、是

れなり。中の四重は、終教頓教に約して説く。第四、以末歸本唯識、第五攝相歸性唯識、第六轉真成事唯識、第七理事俱融唯識是れなり。後の三重は、圓教の中別教に約して説く。第八融事相入唯識、第九全事相即唯識、第十帝網無礙唯識是れなり。而して總じて十門を具するは、是れ同教位の説なり。華嚴經探玄記第十三

紙十九に、

十門唯識道理。於中初三門約初教説。次四門約終頓教説。後三門約圓中別教説。總具十門約同教説。

と云へり。然るに第四、以末歸本の唯識は、是れ事の唯識なれば、始教の攝なるべし。何が故に終教の攝となすやと云ふに、蓋し終教にも亦事識を談ず。事識なりと雖も、源理性に存し、真如如來藏隨緣して、阿頼耶識を成せしものなるが故に、判して終教となすなり。次に頓教は、一念不生を以て宗と爲す、何が故に、以末歸本等の四重を判して、頓教と爲すやと云ふに、蓋し是れ無念理性を以て、頓教と爲すものにして。其の中第四、以末歸本の唯識は、隨緣の性を取り、第五攝相歸性の唯識は、正しく頓教に配すべく、第六轉真成事の唯識は、眞源を取り、第七理事俱融

の唯識は、亦理性の義邊を取りて、頓教と爲すなり、中間の四重を以て、終頓二教となすの意を知るべし。更に又、此の十重唯識は、以て四法界に配すべし。即ち第一相見俱存の唯識等の四重及び、第六轉真成事の唯識は、是れ事法界なり。第五攝相歸性の唯識は、理法界なり。第七理事俱融の唯識は、理事無礙法界なり。第八融事相入の唯識以下の三重の唯識は、是れ事事無礙法界なり。此の三重に嚴家不共の法門たる十支緣起無礙法門義を要略して漏すなし。下に至りて説明すべし。華嚴法界義鏡卷上紙三十四に、左の如く云へり、

前四及六。是事法界。第五一門是理法界。第七理事無礙法界。後三事事無礙法界。舉一全攝無不窮盡。此一念心不起而已。起則頓具十重法義。十中後三要畧。即舉十支。中三具而言之。

と云へり。十重唯識の法界廣しと雖も、唯是れ一念の心を出です。卷けば則ち一心舒ぶれば、則ち十重。開合自在にして、思議し難し。終りに總じて、十重を具するは、是れ同教の所談なること。華嚴法界義鏡卷上紙三十四に、四法界の義に約して、若前七重別教一乘所同之法。即十重識皆圓教攝。圓教必具四法界故。

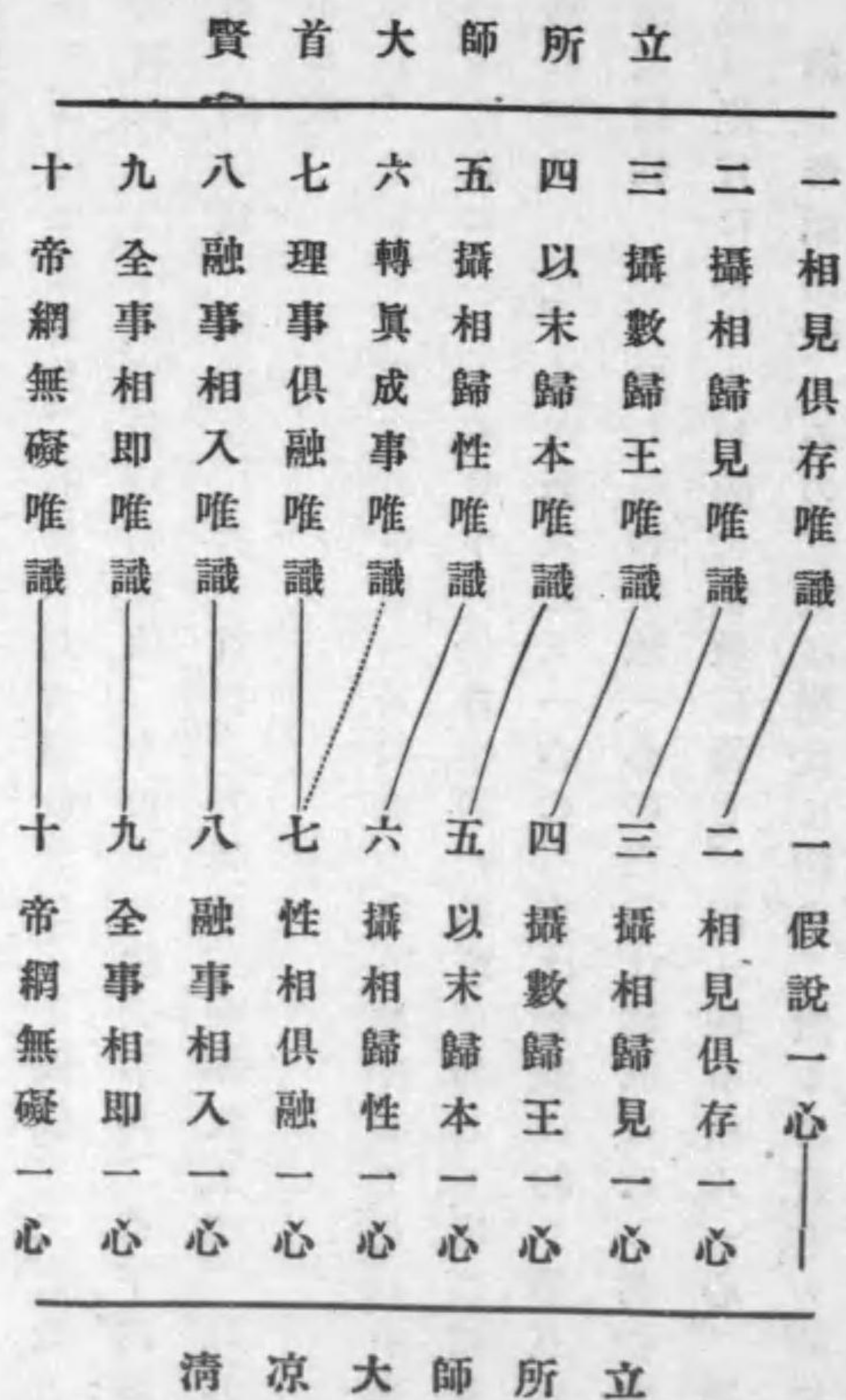
と云へり。十門唯識の分齊を知るべし。

第五項 清涼、圭山兩大師の十重唯識論

上來既に賢首大師の妙釋たる、十重唯識の要義を説明し畢れり。然るに第四祖清涼大師に依るに、賢首大師の十重唯識を相承して、嚴家唯心の法門を弘通するに當り、其の所說少しく賢首大師と異なるものあり。即ち華嚴經疏演義鈔第三十七之上記第一輯第十卷第に、十門唯識を明かすに、初の一門を假説の一心と名づけて、

初之一門假説一心。謂實有外法。但由心變動故。下之九門實唯一心。と説き、二に相見俱存故説一心。三に攝相歸見故説一心。四に攝數歸王故説一心。五に以末歸本故説一心。六に攝相歸性故説一心。七に性相俱融故説一心。八に融事相入故説一心。九に全事相即故説一心。十に帝網無礙故説一心。以て十重唯識を建立せり。是を二祖至相大師所立の十重唯識に比較するに、十重の第一に假説の唯識を建立して、以て小乘教に配し、三祖賢首大師建立の十重唯

識中、第六の轉眞成事の唯識を建立せざるの相違あり。圖示すれば左の如し、



是を嚴家五教の判に配するに、華嚴經疏演義鈔に、

上之十門。初一小教。次三涉權。次三就實。後三約圓。中不共若下同諸乘。通十無礙。

と云ひ、

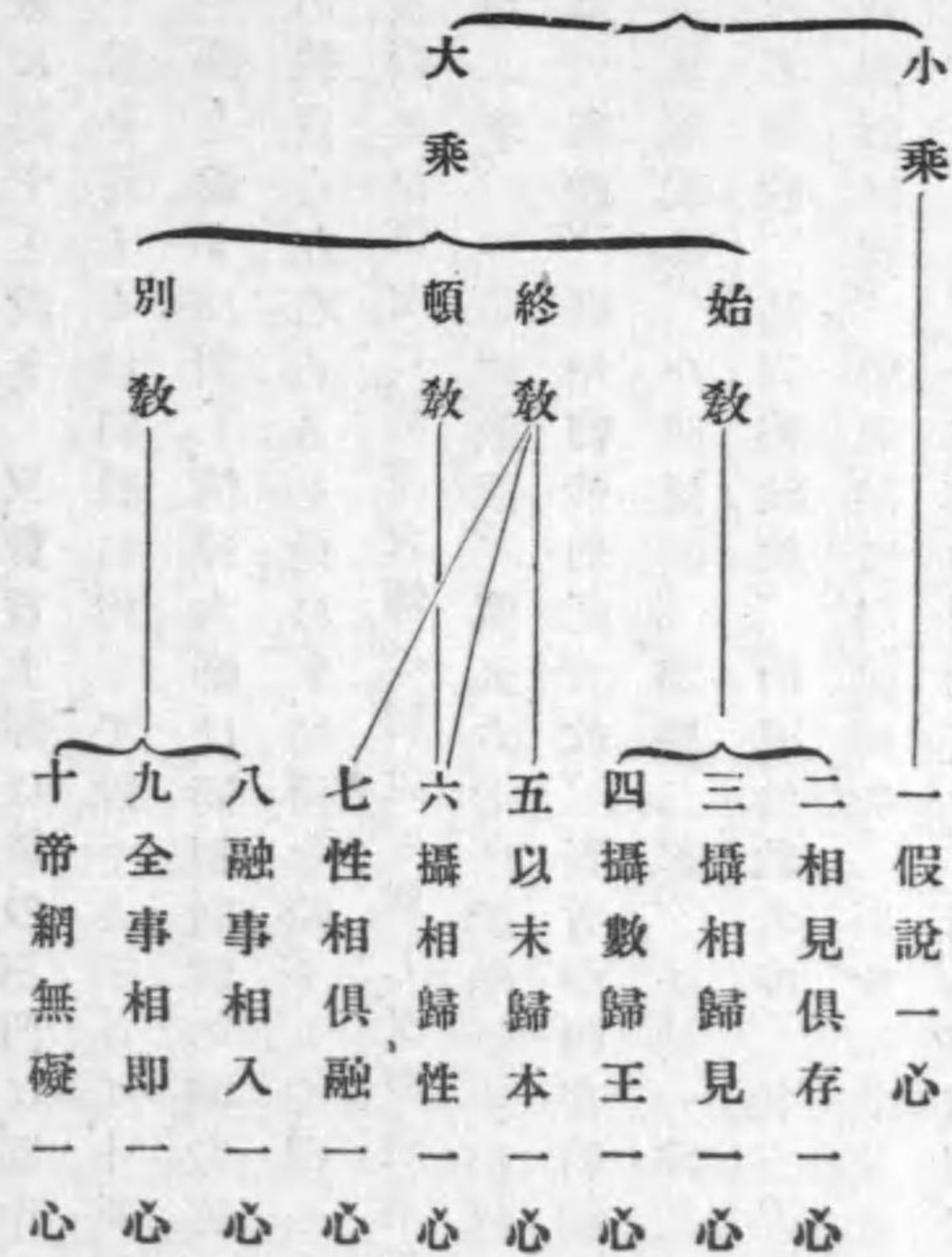
上之十門下二約教分別即具五教。涉權是始教。就實通二。一即終教。終教亦名實教故。其攝相歸性亦通頓教。以後三教皆同一乘。並據於權故。頓亦名實。後三圓融即是圓教。而言不共者圓教有二。一同教。二別教。別即不共。不共實頓故。二同教者同頓同實故。今顯是別故云不共。若下同諸乘下約融通說。若下同同教一乘即收。次三就實。若同於三乘亦收前四。以其圓教如海包含無不具故。

と云へり。即ち十重唯識の中第一は假説の唯心説にして、是れ小乗教、後の九重は實の唯心説にして、大乘教中の始終頓圓の四教に約して、第二相見俱存一心。第三攝相歸見一心。第四攝數歸王一心の三重は始教に約し、第五以末歸本一心。第六攝相歸性一心。第七性相俱融一心の三重は終教に約し、其の中第六攝數歸性一心は、絶言に約するが故に、頓教に通じ。第八融事相入一心。第九全事相即一心。第十帝網無礙一心の三重は圓教に約す。然るに賢首大師に依るに、第五以末歸本以下三重の唯識を以て、終頓の二教に配するに對し、清凉大師は、以末歸

本以下三重は、正しく終教に約し、第六攝相歸性の唯識は、の相想俱絶に約するが故に、頓教に通すと説き。又、賢首大師は、後の三門は、圓中の別教に約して説く。總じて十重を具するは、同教に約して説くと云ひて、十重唯識を、總じて具足するを同教一乘と爲すに對し、清凉大師は、同頓同實の同教義を以て論するが故に、其の所説の義、自ら左右あるを免れず、始權を論する亦爾なるなり。凝然大徳の華嚴十重唯識鐫鑑記第七に、清凉大師の所説と釋し、又、兩祖所説の左右を論じて、

就實通二者。一是終教意。第五六七所説唯識正約終教故。二即通頓教。於中唯取第六唯識。攝相歸性約絶言故。賢首中四亦約頓教。若準此疏正取頓教。兼通餘三眞理義邊。今明通頓。即舉二義。一是一乘故。二亦名實故。賢首始終頓三皆名權教。是三乘教故。清凉始教名權。後三名一。並説一性成佛義故。清凉同教同頓同實。香象同教同前四教。別教不共反此可知。言即收次三就實者。即第五六七也。此三並約實教義故。同教即同頓實教故。言若同於三乘亦收前四者。即第四五六七門也。圓教之中惣攝頓終始教義故。此約所目故通諸教。若爾何故不通小教。此中且約大乘明故。若細言之亦攝小教。別教所目亦

攝此故。と云へり。清凉大師所立の十重唯識の分齊を圖示すれば、左の如し、



第五祖圭山大師に依るに、前祖の妙釋を稟けて、十重唯識の深義を弘宣するに、全

く嚴家五教の判に依りて、十重の次第を立てたり。即ち華嚴經普賢行願品疏鈔第四左紙、圓覺經畧疏之鈔第七右紙、己下の所明に依れば、第一愚法聲聞教には、實に外境ありと謂ふ。是れ心は諸業を造るの感、招する所なるが故に、唯心と曰ふも、即ち是れ心にあらず、故に假說一心の名あり。行願品疏鈔に、

第一愚法聲聞教。假說一心。二乘之人實有外境、不了唯心。縱聞一心。但謂真諦之一心。縱云外法由心轉變。亦不礙言境即是一心。故唯識破云。復有迷謬唯識理者。或執外境如識非無。釋云。此即有宗。依十二處起執。心境俱有。故言假說一心也。

と云へり。第二大乘權教には、異熟賴耶を明かして、名づけて一心と爲す。外境無しと簡ぶが故に、一心と説くなり。然るに此の教の中、若し詳かに分別すれば、凡そ三種あり。一に相見俱存の故に一心と説く、是れ八識及び諸の心所並びに所變の相分に通じて本影具足す。二に攝相歸見の故に一心と説く。亦王所に通ずるも、但し所變の相に別種の生なく、唯だ是れ識の生ずるとき、彼の影を帶して起ること、譬へば虚空中には、本より華種無きも、但だ眼翳の時、彼の相を帶して

起るが如し。三に攝數歸王の故に一心と説く。唯だ八識に通ず彼の心所は心王に依りて體なく、又心の所變なるが故なり。第三大乘實教には、如來藏識唯、是れ一心なりと明かす、理無二の故に、一心と説くなり。中に二門あり、一には前七識を攝して、如來藏に歸するが故に一心と説く。是れ七轉識は、皆是れ本識の差別功能にして、別體あることなきが故なり、即ち賢首清涼の以末歸本の唯識と稱するもの是れなり。二には總じて染淨を攝して、一如來藏性に歸するが故に一心と説く。謂く如來藏の舉體隨縁して、諸事を成辨して、而かも其の自性は本より不生不滅なり。是の故に一心二諦皆障礙なし、即ち賢首の理事俱融の唯識と名づけ、清涼の性相俱融の一心と説くもの是れなり。第四大乘頓教には、染淨を泯絶するが故に、一心と説く。謂く清淨本心は、本より染淨無し。妄想垢假に對するが故に説きて淨と爲すも、妄既に本空なれば、淨相も亦盡きて、唯、本覺心清淨に顯現す。諸教を破せんが爲めに、假に一心と説くも、本是れ無相寂滅なり。即ち前祖の攝相歸性の唯識と稱するもの是れなり。第五に總該萬有の故に一心と説く。即ち是れ法界性海圓融縁起無礙全真心現なり。中に於て三重あり、一

に融事相入の故に一心と説く。謂く一切の事法は、既に是れ真心を全ふして現す。故に、心を全ふするの事は心に隨ひて、一切の中に徧し、心を全ふするの一切は、心に隨ひて一事の中に入り、心に隨ひて回轉し、相入無礙なり。二に融事相即の故に、一心と説く。謂く一事即真心なるを以ての故に、心即ち一切時、此の一事心に隨ひて、亦即ち一切なり。一切即一も亦是くの如し。三に帝網無盡の故に、一心と説く。謂く一切全く是れ心なるが故に、能く一切を含み、所含の一切、亦唯心なるが故に、復た一切を含みて、重重無盡なり、故に帝網無盡と云ふ。上來小始終等の五教に、總じて十門あり。前前は淺く、後後は轉た深きなり。圖示すれば左の如し。

第一 愚法聲聞教—一假說一心

第二 大乘權教

- 二 相見俱存一心
- 三 攝相歸見一心
- 四 攝所歸王一心

五 歸

第三 大乘實教

五 以末歸本一心

十重唯識

第四 大乘頓教

六 理事俱融一心

第五 圓教

七 攝相歸性一心

第五 圓教

八 融事相入一心

第五 圓教

九 融事相即一心

十 帝網無盡一心

圭山大師所立の十重唯識義の前祖と稍々所談を別にすることを知るべし。上來三祖賢首大師所立の深義たる十重唯識の要義及び涼、圭兩大師の所承の要旨を畧說せり。之を要するに、嚴家十重唯識の妙釋は、是れ彌勒、馬鳴、無著、世親等の諸大士を始め、地論師、攝論師等所說の、古來の唯心緣起說を網羅し來りて、之を批判し、統一し、以て末師の釋を排して、直ちに經論の眞髓を發揚し、西天に於て既に凝結し、東土に來りて、益々確執の態度を取りて拮抗し來り、異義紛紜、到底調和の見込み無きかの感あらしめたる、無爲緣起說と、有爲緣起說、眞如緣起說と、阿頼耶緣起說。六識說と八識說。南北兩地論師の所執、新舊兩攝師の論淨等をして、

此に鋒を投げて、其の歸趣する所の唯一路なることを知らしむると共に、高く法界緣起說を標幟して、諸家をして、華嚴圓教の唯心の法門に歸入せしめたるものにして。實に西天以來の幾多の唯心緣起說は、此の十重唯識の妙釋に依りて、始めて組織と統一を與へられ、其の唯心緣起上の地位を確定せられたりと稱するを得べし。蓋し三祖賢首大師の十重唯識の研究は、全く佛教唯心論の組織的研究と仰鑽すべきなり。

は、體常に不變なるを、目づけて眞如と爲す、都べて是れ如來藏なり。故に楞伽に、寂滅とは、名づけて一心と爲す、一心とは、即ち如來藏なり。如來藏は、亦是れ在纏法身なりと云へりと説けり。三祖賢首大師の、入楞伽心玄義紙十八に、依るに楞伽、純利陀耶とは、此に楞伽心と云ふ、舊に乾栗太心と云ふは、訛なりと云ひ。又、是れ緣慮等の心に非ず、般若心等の如しとあり。故を以て、華嚴家の師賢、多く圭山大師の義を依用すと雖も、其の梵漢對譯して、四心となすに至りては、諸家の異説擧なからず。今爰に一心と説くは、賢首大師の華嚴經探玄記第四紙三十七に、華嚴經第六卷左紙菩薩明難品に、文殊師利菩薩が、覺首菩薩に向ひて、佛子心性是一。云何能生種種果報と問ひ。覺首菩薩これに答ふるに、唯心緣起の理を説きて、緣起甚深を明かす下に、心性一と云ふは、謂く心の性なるが故に、是れ如來藏平等一味なるが故に、一と云ふなり。又、心即性なるが故に、是れ第八識は、二類無きが故に、一と云ふなりと釋し。又、同第六左紙には、本經第十一左紙夜摩天宮菩薩說偈品所説の有名なる如來林菩薩の、心如工畫師等の唯心偈を釋するに、此の中の意に説く、一切衆生皆眞に依りて緣起し、本識の心名言有支の我見等の薰に隨ひて、六道

の身現することありて、緣起虛假にして、無を礙へず、有を壞せず、是の故に會攝するに、其の二門あり。若し緣を會して實に従へば、即ち差別の相盡きて、唯一眞如なり。若し末を攝して本に歸せば、即ち六道の異形唯心にして轉ず。初めに約すれば、緣起存せず、是れ眞如門の故に。後に約すれば、緣起壞せず、是れ生滅門の故に。是の故に存壞無二、唯一緣起、二門無礙、唯だ是れ一心なり。故に起信論に云く、一心の法に依るに、二種の門あり。一には、心眞如門、二には、心生滅門なり。然かも此の二門に、各々總じて、一切の法を攝すと、是れ此の謂なりと云へり。五教に約して、所依の心識建立の差別を論ずることは、前章既に説けるが如し。蓋し華嚴一家に、一心と説くは、一とは、是れ二三等に對する、算數の一に非ずして、是れ唯一絶對の義、又、無二唯一の義なり。心は本體實體に名づけ、集起、又は思慮、知覺の義に非ず。即ち一心とは、宇宙萬有の根本實體にして、眞妄未分、生佛未分の絶對平等の眞源たり。大乘起信論義記卷中本左紙に依るに、一心の法に依りて、二種の門あり、一に心眞如門、二に心生滅門なり。是の二種の門に、皆各々一切の法を總攝すと云ひ。次に心眞如とは、即ち是れ一法界の大總相法門の體なり

と云へり。爰に一とは、此れ算數の一に非ず、如理虛融、平等不二の故に、一と稱するものにして、無二の真心を名づけて、一法界と爲すなり。清涼大師は、これを唯一眞法界と名づけ、又總該萬有の一心と云ふ。即ち華嚴經普賢行願品疏（別行疏鈔第四_{左三紙}）に、

統唯一眞法界。謂寂寥虛曠。沖深包博。總該萬有。即是一心。體絕有無。相非生滅。莫尋其始。寧見中邊。迷之則生死無窮。解之則廓然大悟。と云ひ。圭山大師是を釋して、

言統唯一眞法界者。標指也。謂寂寥等。辨其相也。無聲曰寂。無色曰寥。虛謂虛無。曠謂寬曠。沖即玄奧。深即幽微。包謂普含。博謂廣徧（中畧）總該萬有。即是一心者。直指眞界之體也。然此心非佛非生非眞非妄。雖非一切。而爲一切根本。故序云。萬法資始。既世出世間之法不出此心。故云總該萬有。然體非萬有。故云一心。（中畧）又一切衆生悉具。亦是該有之義。

と云へり。此の心は、是れ一切衆生本來箇々圓成して、而かも宇宙萬有の本源なるが故に、之を大總相法門の體とし、又總該萬有一心と云ふ。圭山大師の普賢行

願品別行疏鈔第四_{右六紙}に、五教に約して、十重唯識を談ずるに、第五圓教には、總該萬有即是一心、則ち唯だ是れ法界性海圓融緣起無礙全真心現なりと云ひ。中に於て融事相入。融事相即。帝網無盡の三重の唯識を開きて詳釋せり。文に、

第五總該萬有。即是一心。則唯是法界性海圓融緣起無礙全真心現也。謂未知心絕諸相。令悟相盡唯心。然見觸事皆心。方了究竟心性。故梵行品云。知一切法即心自性。成就慧身不由他悟。於中有三。一融事相入故說一心。謂一切事法既是真心而現。故全心之事。隨心徧一切中。全心之一切。隨心入一切時。隨心回轉相入無礙。二融事相即故說一心。謂以一事即真心故。心即一切時。此一事隨心亦即一切。一切即一亦然。三帝網無盡故說一心。謂一切全是心故能含一切。所含一切亦唯心故。復含一切。無盡重重。皆一一全具真心。隨心無礙故無盡也。

と云へり。則ち前章所説の十重唯識の中、華嚴別教の下の三重唯識は、是れ總該萬有一心の義別なることを知るべし。

第二項 法界の意義

法界とは、辨中邊論卷上縮來九、四左紙に、

由聖法因義說爲法界。以一切聖法緣此生故。此中界者即是因義。

と云ひ。異譯の中邊分別論縮來九、一七左に、

聖法因爲義故。是故說法界。聖法依此境生。此中因義是界義。

と云へり。此の意に依れば、界は是れ因の義、聖法の因となり、聖法此の境に依りて生ずるが故に、法界と云ふなり。是を嚴家の列祖に見るに、初祖杜順大師に、華嚴法界觀門一卷、華嚴五教止觀一卷の著あり。俱に華嚴行者の邪を去り、正に就き、法界に悟入するの要路を開示せり。二祖至相大師また初祖大師の説を承けて、華嚴一乘十玄門一卷を著し、以て一乗の緣起自體法界の義を示し。又、華嚴經搜玄記第五上右初紙に、華嚴經入法界品の法界を釋して、法有三種。謂意所知法。自性及軌則也。界者是一切法通性。亦因。亦分齊也と示すと雖も、兩祖共に其の釋、甚だ簡單にして、未だ精細なる解釋を見ず。第三祖賢首大師に依るに、華嚴

經探玄記第十八右初紙に、法界を釋するに、至相大師の搜玄記の釋を稟けて、

法界是所入法有三義。一是持自性義。二是軌則義。三對意義。界亦有三義。

一是因義。依生聖道故。攝論云。法界者是一切淨法因故。又中邊論云。聖法

因爲義故。是故說法界。聖法依此境生。此中因義是界義。二是性義。謂是諸

法所依性故。此經上文云法界法性。並亦然故也。三是分齊義。謂諸緣起性不

雜故。初一唯依主。後一唯持業。中間通二釋。

と云へり。此くの如く法と界とに、各々三義ありといへども、要するに法界とは、宇宙萬有を總稱したるものにして、即ち宇宙萬有は、各々法を踐みて、顯はれたるものなるが故に、之を名づけて法と云ひ。其の法を踐みて現はれたる萬物は、又各々能く自己の本性を守りて、亂れざるが故に界と云ふ。宇宙萬有何者としてか、法を踐みて現はれざる、善は善たるの法を踐み、惡は惡たるの法を踐み、萬有一として法を踐まざる無し。故に宇宙萬有を總稱して、法界と稱するなり。第四祖清涼大師に依るに、華嚴經疏演義鈔第六十記第一輯第十一卷、第二册一七五紙左に、法界の二字を釋して、

法界是所入之法。謂理事等別。然法含持軌。界有多義。梁論十五云。欲顯現身含法界五義故轉名法界。一性義。以無二我爲性。一切衆生不過此性故。二因義。一切聖人四念處等法緣此生故。三藏義。一切虛妄法所隱覆故。非凡夫二乘所能緣故。四眞實義。過世間法。以世間法或自然壞或對治壞。離此二壞故。五甚深義。若與此相應自性成淨善故。若外不相應自性成殼故。上之五義皆理法界。復有持義族義及分齊義。然持曲有三。一持自體相。二持諸法差別。三持自種類。不相雜亂與法義同。族者種族。即十八界。上二並通事理。分齊者緣起事法不相雜故。於中性通依主持業。因唯依主。後六唯持業。と云ひ。華嚴經畧策紙右二十五に、

法者軌持爲義。界者有二義。一約事說。界即分義。隨事分別故。二者性義。約理法界。爲諸法性不變界故。

と云へり。蓋し凡そ法界を談ずるに、事理の別あり。事とは即ち因縁和合して顯現する森羅の萬象を云ひ。理は即ち其の諸法の體性を云ふ。故に事は是れ有爲衆縁集り、無性縁成にして、假相森然たり。理は是れ無爲本來自體是れ作成

に非ず、縁起無性にして、常恒湛然たり。清涼大師の界の義を釋するに、事理の分別を爲せるは此の故にして、是れ前祖の微意を發揮する所以。四法界の釋ある又この故なり。賢首大師の華嚴經探玄記第十八初紙以下に依るに、凡そ法界の義を分別するに、一に約義、二に約類、三に約位の三門あり。初めに義に約して論ずれば、先づ所入の法界の義を明すに五門あり。一に有爲法界。二に無爲法界。三に亦有爲亦無爲法界。四に非有爲非無爲法界。五に無障礙法界なり。有爲法界に二門あり、一に本識能く諸法の種子を持するを法界と云ふ。是れ因の義に約す。二に三世の諸法の差別邊際を名づけて法界と云ふ。華嚴經第三十二左紙佛不思議法品に、一切諸佛過去の一切法界悉く餘あること無しと知り。未來の一切法界悉く餘あること無しと知り、現在の一切法界悉く餘あること無しと知る等と説けり。無爲法界に亦二門あり、一に性淨門、凡位に在るも、性恒に清淨にして、真空一味無差別なるを云ふ。二に離垢門、對治に由りて、方に淨を顯はすを云ふ、行の淺深に隨ひて十種の別あり。亦有爲亦無爲法界に亦二門あり。一に隨相門。是れ十八法中に名づけて法界と爲すものにして、唯意識の所知た

る、受想行蘊及び極略色、極迥色等の五種の色、并びに八無爲の十六法を云ふ。二に無礙門、一心法界に二門を具含す。心眞如門、心生滅門是れなり。此の二門に各々總じて一切の諸法を攝すと雖も、然かも、其の二位恒に相離らず、猶ほ水を攝するの波は靜に非ず。波を攝するの水は、動にあらざるが如し。華嚴經第六十二金剛幢菩薩回向品に、無爲界より有爲界を出して而かも亦無爲の性を壞せず。有爲界より無爲界を出して、而かも亦有爲の性を壞せず等と説けるもの、此の意なり。非有爲、非無爲法界に亦二門あり。一に形奮門とは、縁は理ならざるの縁無きが故に、有爲に非ず。理は縁ならざるの理無きが故に、無爲に非ず。法體平等形奮雙混せるを云ふ。大品般若經第三十九(智度論第三十九縮往二一七左)に、須菩提、佛に白して言く、是の法は平等なり。是れ有爲の法と爲んや、是れ無爲の法と爲んや。佛の言く、有爲の法に非ず、無爲の法に非ず。何を以ての故に、有爲法無爲法を離れて不可得なり。無爲法有爲法を離れて不可得なり。須菩提、是の有爲の性、無爲の性の、是の二法は、合せず散せずとは、是れ此の謂なり。二に無寄門とは、此の法界は、離相離性の故に、此の二に非ず。離相に由るが故に、有爲に非ず。

離性の故に無爲に非ず。又、是の眞諦に由るが故に、有爲に非ず。是の安立諦に由るが故に、無爲に非ず。又、二の名言の能く至る所にあらざるが故に、是の故に俱非なり。解深密經第一右四紙に、一切法とは、畧して二種あり。所謂有爲と無爲となり。是の中に、有爲は有爲に非ず、無爲に非ず。無爲は有爲に非ず、無爲に非ず等と、乃至廣説せるものは、是れなり。無障礙法界に亦二門あり。一に普攝門とは、上の四門に於て、隨一に餘の一切を攝するを云ひ。善財童子の或は山海を觀或は堂宇を見るを、皆入法界と名づくる如き是れなり。二に圓融門とは、理事を融するを以て、事をして分齊なからしめ、事理を融するを以て、理をして分無きにあらざらしむるものにして、微塵も小に非ず、能く十刹を容れ、刹海も大に非ず、潛に一塵に入るは前者に屬し。一多無礙にして、或は一法界と云ひ、或は諸の法界と稱するは、後者に屬す。華嚴經第三十四紙二十六寶王如來性起品に、譬へば諸の法界は、分齊不可得なり。一切も一切に非ず、見に非ず、取るべからざるが如しとは、是れ諸も即ち諸に非ることを示し。經第四紙二盧舍那佛品に、此の蓮華藏世界海の内の、一一の微塵の中に於て、一切の世界を見ると、是れ一も即ち一に非

ることを明かすものあり。以上所入の法界を明かすに五門十義あり。次に能入法界を辨するに亦五門あり。一に淨信。二に正解。三に修行。四に證得。五に圓滿なり。此の五門は、前の所入の法界の五門の中に於て二門あり。一に能入五の所入に通じ、一の所入に隨ひて五の能入に通ず。二に此の五の能入其の次第の如く、各々所入の五の中の一に入る是れなり。能所入心境の二義十門無礙圓融して、總じて一聚となり不可説不可説なり。第二に法界を類別するに亦五重あり。一に法法界。二に人法界。三に人法俱融法界。四に人法俱混法界。五に無障礙法界是れなり。初めに法法界とは、これに十種の法界あり。一に事法界。謂く十重の居室等なり。二に理法界。謂く一味湛然等なり。三に境法界。謂く所知の分齊等なり。四に行法界。謂く悲智廣深等なり。五に體法界。謂く寂滅無生等なり。六に用法界。謂く勝通自在等なり。七に順法界。謂く六度正行等なり。八に違法界。謂く五熱衆齊等なり。九に教法界。謂く所聞の言説等なり。十に義法界。謂く所詮の旨趣等なり。此の十種の法界は、同一緣起無礙鎔融して、一に一切を具し、一切一に融し、主伴無礙なり。第二に人法界とは、亦十門あり。

り。謂く人天男女在家出家、外道諸神菩薩及び佛なり。是れ並びに緣起相分れ、參へて而かも雜せず、一多同時に具足せり。三に人法俱融法界とは、即ち前の十人十法は、並びに是れ同一緣起にして、義相に隨ひて分れ、融攝無二なるを云ふ。四に人法俱混法界とは、平等果海は、言説を離れ、緣起性相俱に不可説なるを云ひ。五に無障礙法界とは、前の四句を合し、彼の前の人法に於て、一異無障、存亡不礙、自在圓融なるを云ふ。次に能入を明かすに、亦五重あり。一に身、二に智、三に俱、四に混、五に圓なり。善財童子の彌勒菩薩の處に在りて、樓觀を觀察し、身樓觀に遍きは身證なり。無邊の理事を鑒みるは智證なり。普賢に同じくして、普ねく法界に通入するは俱證なり。身智相即して、而かも兩亡するは俱混なり。一異存亡、無礙自在圓融なるは圓證なり。又華嚴經第九紙右、初發心菩薩功德品に、甚深眞法性妙智隨順入無邊佛土中。一念悉周遍とあり。是れ智法界に入り、身法界に入り、身智無礙なるが故に、智理に入り、身土に遍し、能入所入混融無二にして、際限を分たず。能所圓融して、形奪俱混し、一異存亡無礙具足せることを明かせるなり。第三に因に約して、入法界を明かせば、所入の法界に大位二あり。因と果是れな

り、果とは前の入法に於て、皆是れ佛果の所收ならざることなき、即ち如來の師子奮迅三昧所現の法界自在を云ひ。因とは前の入法に於て、皆因位の所收に屬せざることなき、即ち文殊普賢所現の法界法門を云ふ。此の因位の十に、更に信等の五位の法界あり。次に能入法界に亦二對あり。諸の菩薩の頓入法界と、善財童子の漸入法界是れなり。上來法界の義を明かすに、是くの如く重重の分別あり。之を要するに、法界とは若し理に約すれば、即ち一心真如にして、是れ宇宙の萬象の本源たり。又、若し事に約すれば、宇宙森羅の萬象にして、日月星辰の燦然たる、山河大地の浩然たる、皆是れ法界ならざるなし。五祖圭山大師の註華嚴法界觀門右十紙に、一切の諸佛、一切の衆生、若しくは身心、若しくは國土、二に是れ此の法界の體用なりと云い。又、法界は萬象の眞體、萬行の本源、萬徳の果海なりと示し。凝然大徳の華嚴法界義鏡卷上五紙に、法界の異名を列ねて、眞如。眞諦。佛性。法性。中道。實相。般若。涅槃。唯識。唯心。一實。一諦。一乘。一道。圓覺無相。心地。佛藏等並びに是れ法界法門の異名にして、然かも其の一分の義門なりと云ひ。又、一眞法界の體性を釋して、若し總じて之を言はば、法界なり。法

とは無礙圓融にして、事理を體と爲す。舉一全收して、連貫互徹し、包遍含入して、相離れざるが故なり。若し別して之を言はば、法界の義相に、即ち四種あり、數相ありと雖も、精要は唯だ二のみ。一には事法。心王。心所。不相應行を以て體性と爲す。或は質礙の相。或は縁慮の相。或は分位の相。皆是れ因縁和合の所生なり。二には理法諸法の體性圓滿成就して、如常眞實を以て狀相と爲す。事は是れ有爲衆縁集り無性縁成にして、假相森然たり。理は是れ無爲本來自體の是れ作成に非ず、縁起無性にして、常恒湛爾なりと云へり。以て高遠なる法界の玄理を知るべきなり。

第二節 四法界義

第一項 四法界義の起原及び相承

其一 四法界義の起原

前節既に一眞法界の要旨を説述せり、四法界は、即ち此の一眞法界の法門を、最も

明確に論究し、其の教義の淺深に従ひて、四種の配列をなせるものにして、又是れ華嚴行者の、淺より深に入る、觀門實修の次第を示せるなり。然るに四法界義の法門たる、其の正しき能建立の人を求むれば、即ち第四祖清涼大師なりと雖も、更に其の淵源を窮むれば、即ち初祖杜順大師の華嚴法界觀門一卷の所説に在り。此の書具さに修大方廣佛華嚴法界觀門と云ひ。華嚴觀道門の書にして、行者をして、華嚴大經所説の法界眞理を實踐修行せしめ、觀解の智を生じ、妄謂の情見を除きて、圓融無礙の法界眞理に悟入せしめんがために、説述せるものにして、一部の所明は、眞空第一。理事無礙第二。周徧含容第三の三重の觀門を開きて、法界眞理に體達せしむるに在り。其中第一の眞空第一とは、是れ四法界の中の理法界にして、其の實體を原ぬれば、但だ是れ本心なり、虛妄の念慮に非ずと簡ぶを以て眞と云ひ。形礙の色相に非ずと簡ぶが故に空と云ふ。蓋し凡そ眞理なるものは、普遍平等にして、一切に遍滿し、至らざる處無し。然るに凡夫有情は、常に我他彼此の妄情の爲めに礙へられ、容易に此の性空平等の眞理に體達すること能はず。故に若し人、此の理性の眞理を知らんと欲せば、須らく情執の妄念を拂ひ

て、諸法は空無にして、實性なしと觀じ。萬象差別は、是れ妄情の所現なりと拂拭して、空無の境に至らざるべからず、是を眞空觀と云ふ。細説するに四句十門の分別あり、四句とは、一に會色歸空觀。二に明空即色觀。三に空色無礙觀。四に泯絕無寄觀を云ひ。十門とは、更に初句に四門、二句に四門、三句と四句とに、各一門を開きて、分別せるものにして。要するに、諸法の事色は、悉く空にして、而かも空の當體色に異なること無し。されば此の色と空とは、二者別體あること無く、共に唯一眞理中に含有して、不一不二なり。既に不一不二なるが故に、其の眞理は、有無の情計を泯絶して、寄せんとするに物無く、顯はさんと欲するに法なし。是を眞空觀と爲すなり。第二の理事無礙第二とは、是れ四法界の中の理事無礙法界にして、前に既に色を説くと雖も、是れ情計を簡びて、以て眞空を成じ、空色無礙泯絶無寄を、方に眞如の理と爲して、未だ眞如の妙用を顯はさざるが故に、唯だ是れ眞空觀門にして、未だ理事無礙と爲さず。故を以て今更に理と事との銘融無礙を觀するが故に、理事無礙の名あり。然るに此の理事無礙銘融の相を論ずるに、通じて十門の分別あり。一に理徧於事門。二に事徧於理門。三に依

理成事門。四に事能顯理門。五に以理奪事門。六に事能隱理門。七に眞理即事門。八に事法即理門。九に眞理非事門。十に事法非理門是れなり。此の十門は更に束ねて相徧。相成。相害。相即。相非の五對と爲し。五對十門を以て萬象差別の事法と平等無差の無性と鎔融相攝して無礙自在なりと爲すが即ち理事無礙觀なり。法界觀門三十七に此の上の十義同一緣起理に約して事に望むに即ち成あり壞あり即ち離あり。事を理に望むに顯あり隱あり一あり異あり逆順自在無障無礙同時に頓起して前後に非ず深思して觀すべしと云へり。第三の周徧合容第三とは是れ四法界の中の事事法界即ち圓教の觀にして上の觀に於て己に理事融通して無礙なるが故に更に一步を進めて是を彼此の事事物物互に相望するも亦無礙を成じて一多相即して交渉自在なりと顯はす一門なり。凡そ吾人迷界の凡夫は隔礙の妄情に礙へられて事事差別して一も融すること能はざれども。若し悟界の佛陀の所見の如きは悉く差別の妄見を打破して平等無差の知見に住するが故に毛孔に刹海を現じ國土を塵中に攝して一多相即相入して無礙自在なりと爲すは是れ圓教の觀なり。此に事事

無礙觀と云ふもの即ち是れにして一一の事皆理の如く融通するが故に徧攝無礙交參自在なりと顯はす。然るに是を詳説するに十門の分別あり。一に理如事門。二に事如理門。三に事合理事門。四に通局無礙門。五に廣狹無礙門。六に徧容無礙門。七に攝入無礙門。八に交渉無礙門。九に相在無礙門。十に溥融無礙門是れなり。是くの如く十門の分別ありと雖も要するに事事無礙の相即を説きて諸法の無礙を談するに外ならず。以上法界觀を明かすに三重の觀門あり。是れ華嚴大經所説の一心法界を以て能觀の智の淺深に隨ひて三種の不同を成せしものにして敢て三種の法界あるに非ざるなり。爾下説明せんとする四種法界の深義は蓋し此の三重の法界觀に淵源するものにして更に其の基く所は即ち華嚴大經所説の一心法界に在り。清涼大師の華嚴法界玄鏡第一三紙に、

言法界者一經之玄宗。總以緣起法界不思議爲宗故。然法界之相要唯有三。然總具四種。一事法界。二理法界。三理事無礙法界。四事事無礙法界。今是後三。其事法界歷別難陳。一一事相皆可成觀。故略不明。總爲三觀所依體。

と云へり。蓋し法界玄鏡は、是れ初祖大師の華嚴法界觀門一卷の疏釋にして、所引の文は、即ち法界に總じて四種ありと雖も。其の中第一の事法界は、是れ總じて三觀所依の體にして、歷別陳べ難く、一一の事相、皆觀を成すべきが故に、略して明かさすとの意なり。四法界義の、初祖大師に淵源し、然かも基く所は、根本華嚴大經の所尊所崇所主とする、一眞法界の玄理にあることを知るべし。清涼大師の華嚴經普賢行願品疏（別行疏鈔第四_{三紙}）に曰く、

統唯一眞界。謂寂寥虛曠。冲深包博。總該萬有即是一心。體絕有無。相非滅滅。莫尋其始。寧見中邊。迷之則生死無窮。解之則廓爾大悟。諸佛證此。妙覺圓明。現成菩提爲物開示。不知何以名目。強分理事二門。而理事渾融無有障礙。略爲三門。第一事法界。第二理法界。第三無障礙法界。と云へり。而して第三無障礙法界の下、更に相即無礙門。形奪無寄門。雙融俱離性相渾然。の三門を開きて、法界の無障礙なることを説明せり。三重四重の別ありと雖も、並びに一眞法界中の義別にして、即ち開合の異に外ならず、以て此の法門の基く所を知るべし。

其二 四法界義の相承

既に説明せるが如く、四法界義の基く所は、根本華嚴大經に依りて、初祖杜順大師、爲めに三重の法界觀を建立せしに在り。二祖至相大師之を稟けて、此の經の宗を判して、因果縁起理實を宗と爲すと云ひ。又、十玄縁起無礙法門義の深義を立て、事事無礙法界の義を釋し。三祖賢首大師は、更に此の經の宗を判して、因果縁起理實法界を以て宗と爲すと云ひ。又、至相大師の釋を承けて、益々十玄無礙の法門を發揮し。又、所入の法界を釋するに、一に有爲法界。二に無爲法界。三に亦有爲亦無爲法界。四に非有爲非無爲法界。五に無障礙法界の五門を開き。又、法界を類別して、一に法法界。二に入法界。三に入法俱融法界。四に入法俱混法界。五に無障礙法界の五重を開き、初めの法法界に、又更に事法界、理法界等の十法界を開きて、重重の法界の義を釋せり。蓋し此等の釋は、即ち三重四重等の法界とは、是れ開合の異にして、清涼大師の四法界義は、即ち是等の祖釋を相承せるに過ぎず。圭山大師に依るに、杜順大師の華嚴法界觀門を釋して、註法界

觀門一卷を著し、四法界義を説きて、

清涼新經疏云。統唯一眞法界。惣該萬有即是一心。然心融萬有便成四種法界。一事法界。界是分義。一一差別有分齊故。二理法界。界是性義。無盡事法同一性故。三理事無礙法界。具性分義。性分無礙故。四事事無礙法界。一切分齊。事事一如性融通重重無盡故。と云い。又、普賢行願品疏鈔を著して、清涼大師の事法界、理法界、無障礙法界の三重の法界を釋せり。以て四法界法門の相承の概要を知るべし。

第二項 四法界義の要旨

其一 事法界義の要旨

四法界とは、一に事法界。二に理法界。三に理事無礙法界。四に事事無礙法界なり。初めに事法界とは、事は理性に對する語にして、萬象差別の事法、法とは、其の事法に名づけ、界は是れ分の義なり。萬象差別の事法は、一一差別して分齊あ

るが故に事法界と云ふ。華嚴經略策二十五に、法とは軌持を義と爲す。界とは事に約して説けば、界は即ち分の義なり。事に隨ひて分別するか故にと云へり。是れ宇宙の森羅萬象を種々に差別して、其の無限なるに、事法界の名を與へたるものにして、即ち現象界のことなり。凡そ宇宙の萬有は、若し現象差別に就きて之を論ずれば、實に千態萬狀にして、其の限量を窮むること能はずと雖も、其の類同に依りて之を云へば、薩婆多有部等には、色。心。心所。不相應。無爲の五位の中、無爲の三法を除きて、前四位七十二法是れなりとし。訶梨跋摩の成實論には、五位八十四法の中、無爲の三法を除きて、餘の八十一法是れなりとなし。大乘唯識には、無爲の六法を除きて、餘の九十四法是れなりと爲せり。然るに華嚴教學に依るに、此の森羅せる萬象、深遠たる千門を總該して、十門と爲し、以て無盡の義を表せり。一に教義。二に理事。三に境智。四に行位。五に因果。六に依正。七に體用。八に人法。九に逆順。十に應感。是れにして、此の十對に總じて二十句あり。一切の事法を此の中に攝盡し、十玄緣起所依の體事も、之を措きて外にあらざるなり。蓋し此の十門二十句は、即ち第二祖至相大師の初祖杜順大師の説を

承けて輯録せし、華嚴一乘十立門五紙の所説にして。賢首大師は、華嚴經探玄記第一、華嚴五教章卷中等に之を祖述し、清涼大師は、華嚴經玄談第四二紙に、今別教一乘を顯はすに略して四門を顯はす。一には所依の體事を明かし。二には總じて眞實に攝歸し。三には其の無礙を彰はし、四には周遍含容なりと説きて。即ち四法界を列ね、其の事法界には、教義理事等の十門を擧げて、所依の體事を明かすと云へり。以て事法界義の相承を知るべく。又華嚴法界玄鏡第一三紙に、其事法界歷別難陳。一一事相。皆可成觀。故略不明。總爲三觀所。依體其事略有十對。と云へるを知るべし。十門の詳細は、下の十立緣起の章に至りて説明すべし。此の事法界を、嚴家五教の判に對するに、第一小乘教及び第二大乘始教の中の相始教是れなり。即ち小乘教には、多く三世實有法體恒有と説きて、五位七十五法を説き、大乘始教の中、相始教には、五位百法を立て、總じて依他起の法と爲せり。之を各種の緣起論に對配するに、即ち小乘の業感緣起、大乘始教の阿賴耶緣起の兩説を以て配すべし。是れ業感緣起説は、有情の業力に依りて、萬有の緣起開發を論じ。又阿賴耶緣起説は、眞如凝然不作法と説きて。只、事の阿

賴耶識によりて、宇宙萬有の開發を論じ、七十法、或は百法を立て、現象差別の事法を説明するが故なり。

其二 理法界の要旨

理法界とは、理は事に對するの言にして、宇宙の理體理性を云ひ。法とは其の理性を指し、界とは性の義にして、無盡の事法の同一性なるを云ふ。即ち宇宙萬有の本性實體に名づけたるものにして。華嚴經略策二五紙に、法とは軌持を義と爲す、界とは性の義なり、理法界に約す。諸法の性、變易せざるが故にと云へり。是れ宇宙の實體、即ち萬有の理體に名づけたるものにして、即ち本體界のことなり。凝然大徳の華嚴法界義鏡卷上八紙に、理法界とは、體性空寂にして、相狀寥冥たり。頓に四句を遣り、妙に百非を絶す、即ち是れ攝歸の眞實なり、又は眞空絶相と名づく。然かも此の眞理に、略して二門あり。一に性淨門とは、纏に在りて染せず、性恒に清淨なり。一切に徧すと雖も、一切に同じからず。二に離垢門とは、對治道に由りて、障盡き淨顯はる、位の淺深に隨ひて十眞如を分つ。體性湛然と

して、縁に隨ひて異あり。二門異なりと雖も、其の體別なし。此の理法界に、總じて十門あり。然かも四門あり、一に會色歸空觀。二に明空即色觀。三に空色無礙觀。四に泯絕無寄觀是れなり。此の四句の中に、初めの二に各々四あり、後の二に各々一あり、總じて十門を成ず。初めに會色歸空とは、諸色の舉體、是れ真空なるが故に、中に於て四句あり、一には色は即ち斷空ならず、舉體真空なるが故に、真空は斷空に非らざるを以ての故に。二には青黃等の相は、是れ真空に非ず、青黃無體なる、是れ真空なるが故に。三には空中に色無し、色は無體なりと會するが故に。己上の三句は、法を以て情を簡ぶ。四は色は即ち是れ空なり、色は無性なるが故に、色空の如き既に然かるなり、萬法皆爾なるなり。此の一は理性の空體を顯はすが故に。二に明空即色觀とは、真空の舉體、是れ諸色なるが故に。中に於て四句あり、一には斷空は即色に非ず、真空は即色なるが故に、彼の真空は、色に異ならざるを以ての故に。二には真空の理體は、青黃にあらざるが故に。三には空は是れ所依にして、能依の色に非ず、能のため、是の故に、即色なり。上の三は法を以て情計を簡去す。四には空は即ち是れ色なり、真空の帶體、妙有

なるが故に、真空は色法に異ならず。無我の理は、斷滅に非るが故に、自性を守らず、縁に隨ひて成ずるが故に、色の如き既に爾なるなり。真空の諸法に異ならざるも亦爾なるなり。此の一は、義の妙有の相を顯はすが故に、初めの二門の各々の四句訖りぬ。三に空色無礙觀とは、色法の舉體、是れ真空なるが故に、色相盡きずして、而かも空顯現し、空理の舉體、色に異ならざるが故に、空即是色にして、而かも空隠れず、是の故に、一味平等無礙なり。此の中に空色の二事ありと雖も、意致は唯だ是れ空理に歸す。色は是れ虛名虛相にして、纖毫の體あること無し。此の觀を修する者、意此れに在るが故に。四に泯絕無寄觀とは、所觀は、真空は即色不即色と言ふべからず、亦、即空不即空と言ふべからず。一切の法は不可なり、不可も亦不空なり、此の語も亦受けず、迥絶して寄るところ無し、言の及ぶところに非ず、解の到るところに非ず、是を行境と謂ふ。心を生じ、念を動すれば、即ち法體に乖きて、其の正念を失ふ、空觀に非るが故に、上の四句十門は、總べて是れ理界の行相なりと云へり。蓋し上に説く、初祖杜順大師の華嚴法界觀門に、三重の法界觀を明かす中、第一真空觀の釋を擧げたるなり。既に説くが如く、事法界、即ち宇宙森

羅の萬象は、差別無窮にして、千態萬狀なりと雖も、其の實體理性たる理法界は、即ち無差別平等絶對無限不生不滅不増不減にして、大乘起信論に所謂從本已來言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離れたる、畢竟平等無有變易不可破壞の絶言眞如是れなり。故を以て若し之を華嚴五教の列に配すれば、正しく大乘頓教位に當り、兼ねては大乘始教の中、空始教に配すべし。空始教に内空、外空、内外空、大空、乃至不可得空、等の十八空を説き、又は不生不滅不斷不常不一不異不去不來等の八不を説くが如き是れなり。此の故に若し理法界を以て大乘佛教の二大教系たる、縁起論實相論の所明に配すれば、餘の事法界等の三種の法界の縁起論系なるに對し、此の理法界は、即ち正しく大乘諸法實相論の所顯に配すべし。是れ般若等の經、中觀等の論の所明にして、龍樹提婆等諸大士の所明に當り。又、縁起論系中には、大乘起信論の所說中、絶言眞如の所明に相當すと云ふべし。

其三 理事無礙法界の要旨

四法界の第三、理事無礙法界とは、理とは宇宙萬有の理性、事とは宇宙森羅の事象にして、即ち既に説明せる理法界と、事法とを云ひ、此の理事二種法界の無礙鎔融を論究するを、理事無礙法界と云ふ。華嚴經略策二五に、法とは軌持を義と爲す、界とは二義あり。一に事に約して説けば、界は即ち分の義なり、事に隨ひて分別するが故に、二には性の義なり、理法界に約す、諸法と爲るも性變易せざるが故に。此の二交絡して、理事無礙法界を成す。事は理を攪りて成り、理は事に由りて顯はれ、二互に相奪して、即ち事理兩つながら亡す。若し互に相成せば、則ち常に事に於て、常に理なりと云へり。蓋し理事無礙法界は、先きに説ける事法界の如く、單に事象差別の一方に局るものに非ず、又理法界の如く、單なる理性平等の一方に止るものに非ず、理性と事象との兩面に互りに、其の無礙融即を論じ、理性は是れ萬有事象の實體なるが故に、差別の萬有を離れて別に、孤立獨存するものに非ず。又萬有事象は、是れ平等の理性の隨縁轉起せるものなるが故に、理性の外に別在するものに非ずと示して、理性即事象、平等即差別の本體即現象論をなすものなり。華嚴法界義鏡卷上九に依るに、事理無礙法界とは、如理縁起

して、一切の事事の法を成すれば、體虛にして即ち是れ理性なり。無性の縁生は理事を礙へず、縁生の無性は事理を礙へず、總べて是れ事理無礙の相狀なり。事界の十門も、皆悉く無礙なり、且らく事理に對して以て無礙を顯はすに、亦十門ありて以て無盡を顯はす。一に理徧於事門。無分限の理分限に徧するが故なり。二に事徧於理門。有分限の事、全く理に同するが故なり。三に依理成事門。事に別體無く、理を攪りて成するが故なり。四に事能顯理門。事理を攪りて成すれば、事は虚にして理は實なり、依他の無性即ち圓成なるが故なり。五に以理奪事門。事既に全理なれば、事盡きて遺ること無し。故に生佛不増不減と説けり。六に事能隱理門。真理縁に隨ひて、事法を成じて遂に事をして顯はれ、理をして現せざらしむ、故に法身流轉するを生と名づくと言けり。七に真理即事門。凡そ此の真理は、必ず事の外に非ず、法空の理なるが故に、空即色なるが故に、理即ち是れ事にして、真理たるが故に。八に事法即理門。縁集は必ず無性なり、舉體即ち真なるが故なり。九に真理非事門。妄に即するの眞は、妄に異なるが故なり。十に事法非理門。即眞の妄は、眞に異なるが故なり。此の十事は、同一縁起成壞即

離隱顯一異逆順自在無障無礙同時に頓に起りて、前後あること無し。深く思ひ修習して、觀智明現するを、即ち理事圓融無礙の觀門と名づくと言へり。是れ杜順大師の華嚴法界觀門に説く、三重の法界觀の中、第二理事無礙觀の所説に依るなり。是くの如く、理事無礙法界は、宇宙平等の理性と、差別の事象との無礙融通を論ずるが故に、之を華嚴五教の判に配するに、正しく大乘終教に當り、所謂如來藏縁起宗の所説是れなり。大乘起信論に依るに、眞如隨縁して、萬有を成ずることとを説き、宛も湛然たる海水の風の縁に應じて、千波萬波を成ずるが如しと説けり。是れ即ち宇宙の實體理性たる眞如が、縁に隨ひて、萬有差別の事象を成ずることを説くものにして、是れ理事無礙の、理事無礙たる所以なり。

其四 事事無礙法界の要旨

四法界の第四、事事無礙法界とは、前に説く理事無礙法界の中、理體の點を事象の方に奪ひ取りて、事事物物塵々法法顯はれたる現象差別界の儘が、彼此交渉し、相互融通して、無障無礙なることを説くものにして。華嚴經略策 紙右五に、事事無

礙法界とは、謂く理を以て彼の事を融するが故にと云ひ。注法界觀門左九紙に、事無礙法界とは、一切の分齊事法、一一性の如く融通して、重重無盡なるが故にと云へり。是れ宇宙萬有、一切差別の事法の相即相入、無礙自在、重重無盡なることを説けるものなり。華嚴法界義鏡卷上右十紙に依るに、事事無礙法界とは、亦是周徧含客觀と名づく。局限の法彼此融するが故に、此の中に即ち十種の玄門あり。緣起の諸法は、深奥冲邈にして、該攝周徧す、義極妙なるが故にと云ひ。此の下に華嚴の深義たる、十玄緣起無礙法門義を開説して、以て事事無礙の相狀を詳かにせり。五教の中、第五の圓教の極談にして、所謂法界緣起論なること論を俟たざる所なり。上來事法界等の四法界は、是れ華嚴教學の義理分齊にして、且らく四種に類別すと雖も、宇宙萬有、塵塵法法、悉く此の四法界を具足して、一も缺くることなく、其の四と分てるは、是れ行者觀智の淺深に隨ひ。又、教門施設の覺者に依るのみ。法として四法界を具せざるなく、塵として四種の法界を周備せざるなきなり。華嚴法界義鏡卷上紙十五左に、此の義を説きて、一塵の法界、是れ其の體なり。何んとなれば、法性隨緣して即ち成ず、一塵の中に、眞理を攝盡す。一切の萬法、塵

理を離れず。是の故に萬法と塵理と俱に一塵の中に入る。塵の外に理無く、亦諸法無し。塵塵皆爾かるなり、法法も亦爾かるなり。且らく一塵に就きて、四法界を具すとは、緣生の一塵は、是れ事法界なり。塵無性の理は、即ち理法界なり。塵理相望するは、是れ事理無礙法界なり。諸法一塵に入れば、一塵反りて諸法なり。即ち是れ事事相望して融通す、是れ事事無礙法界なり。此の中に、即ち其の十玄門あり、即ち是れ事事無礙の相狀なり。萬法を見んと欲せば、一塵に入るべし。一塵に入ることを得て、法を見るに遺ること無し。一塵法界の相貌是くの如し、法法亦爾かるなり。謂く一毛法界。一華法界。一香法界。一色法界。刹那の心念法界も亦爾かるなり、是くの如きの法法相狀、皆爾かるなり。華嚴圓教の一味法界は、彼此を簡はず、何れの法に入るに隨ひても、即ち法界を見て性源を窮め盡す。四種の法界に、一界を擧ぐるに隨ひて、全く三界を攝す。一法を擧ぐるに隨ひて、四種の法界なり。全く一切の諸法、四界を攝す。何に況んや萬法雙べて、頓證徧證を見るをや。圓教普周の事義、是くの如しと云へり。應に知るべし、一塵の當體は、是れ事法界なり。此の一塵の當體、因緣所生にして、他の諸塵

と分福あれども同一真理より成立したるが故に、萬差の諸塵、即ち同一の理性なるは理法界なり。真理能く一塵を成じ、一塵即真理なれば、水波の相融せるが如く、事理隔つること無く、無礙自在なるは、事理無礙法界なり。周遍法界の真理、全く一塵と成り、一塵の外に真理あること無し。自餘の諸法、真理を離れず。萬法と真理と、一塵の内に在るは、即ち事事無礙法界なり。是くの如く一塵一法にも、四法界を具すること、法界の甚深微妙なること、豈に驚嘆すべきに非ずや。是を華嚴圓教の事事無礙法界觀と爲すなり。

第三項 禪家と四法界觀

前項既に華嚴教學の深義たる四法界の要旨を説明せり。然るに此の四法界觀たる、嘗に嚴家の所談たるのみに非ず。不立文字、教外別傳を説く禪家にも、亦四法界義として甚だ之を珍重せり。碧巖集第八十九則、雲巖問道吾の則に、

網珠垂範影重重。雪竇引帝網明珠。以用垂範手眼。且道落在什麼處。華嚴宗中立四法界。一理法界。明一味平等故。二事法界。明全理成事故。三理事

無礙法界。明理事相融大小無礙故。四事事無礙法界。明一事徧入一切事、一切事徧攝一切事、同時交參無礙故。所以道。一塵纔舉大地全收。一一塵含無邊法界。一塵既爾。諸塵亦然。

網珠者。乃天帝釋善法堂前。以摩尼珠爲網。凡一珠中映現百千珠。而百千珠俱現一珠中。交映重重主伴無盡。此用明事事無礙法界也。昔。賢首國師立爲鏡燈喻。圓列十鏡。中設一燈。若看東鏡則九鏡鏡燈歷然齊現。若看南鏡則鏡鏡如然。所以世尊初成正覺。不離菩提道場。而徧昇忉利諸天。乃至於一切處。七處九會說華嚴經。雪竇以帝網珠。垂示事事無礙法界。然六相義甚明白。即總。即別。即同。即異。即成。即壞。舉一相則六相俱該。但爲衆生日用而不知。雪竇拈帝網明珠。垂範況此大悲話直是如此。億若能向此珠網中。明得拄杖子。神通妙用出入無礙。方可見得手眼。と論せり。是れ禪家の學者が、嘗に華嚴の四法界觀の眞理觀を應用せんとするのみならず、猶ほ十玄緣起無礙法門中の因陀羅網境界門と。六相緣融の深遠高妙なる三大眞理觀を取り入れて、自家禪理の解釋をなせる、又其の敏なるを知るべきなり。

第三節 性起と縁起

第一項 一起の法門と其本據及び相承

其一 一起の法門の本據

縁起性起の兩論は、華嚴一宗の一大要義にして、亦佛教教理の二大教系たり。凡そ華嚴一經七處八會三十四品の所説甚だ廣漠なりと雖も、若し其の所詮の要義に就きて論すれば、此の縁起性起の二門に該羅して盡さすと云ふことなし。即ち一經五分の所説の中、初めの世間淨眼品は、教起因縁分即ち所謂序分なれば、是を除き、正しく此の經の正宗分たる舉果勸樂生信分等の四分の中、盧舍那佛品の一品は、廣く華藏界の相を説きて、盧舍那果上の依正を明かし。以て菩薩をして、信樂を生せしむ、是れ即ち所信の因果なり。次に修因契果生解分の中、如來名號品より、佛小相光明功德品に至る廿八品は、是れ縁起門にして、差別の因果を明かす。因とは如來名號品より、菩薩住處品に至る迄の二十五品に、信住行向地の五十位の因の差別を説くものにして、果とは後の佛不思議法品。如來相海品。佛小相光明

功德品。の三品に、佛の三德差別の果相を説くもの是れなり、差別の因果の名ある所以なり。普賢菩薩行品及び寶王如來性起品の二品は、是れ差別の因果極りて、性起平等の因果を明かす一段にして、之を平等の因果と名づく。中に就きて普賢菩薩行品は、普賢平等の因を説きて、性起自體の因なり。寶王如來性起品は、是れ其の用にして、性起殊勝の果相なり。差別の因果と平等の因果とは、本と一なれども、若し寄顯に約すれば、差別の因果と爲り、若し直顯に約すれば、平等の因果と爲る。因は必ず果を具し、果は必ず因を該ねて、此の二は本と不離不二なるが故に、且らく因を以て取れば、常に菩薩にして、普賢の圓因と爲り。果を以て取れば常に佛にして、舍那の滿果を成ず。因果融攝して別なきが故に、平等の因果と云ふ。其の平等の因果を以て、三乘差別の機情に寄せて説く時は、因果歷然と分れて融通せず、是を差別の因果と云ふ。差別と平等、縁起と性起、不離にして無二なり。而して寶王如來性起品所説の性起殊勝の果德に依りて、絶對性起の行法を起すが、是れ離世間品の所明にして、此の品初めに二千の行法を説きて、信住行向地の五位の行因を説き、後に八相作佛の大用の果相を明かす。成行の因果と

名づけ。五分の中には託法修進成行分と云ふ。而して入法界品は、善財童子、上の所説に従ひて、如説に修行し、遂に法界に證入することを明かす一品にして。初めに佛自在の大用を説き、後に童子の廣く勝友を求めて、具さに因行を修し、證入法界の益を得ることを明かせり。若しくば因、若しくば果、皆證入法界の外なし、故に證入の因果と名づけ。一經五分の中には即ち依入證成徳分なり。以上是くの如く、縁性の二起は、實に華嚴大經一部始終に貫徹せる大義にして、是れ又やがて其の枝末たり。又攝末歸本の法輪たる、一代佛教に貫徹せる二大法門なりと云はざるべからず。二起の法門の華嚴大經に基くことを知るべし。華嚴五教章卷上初紙に、釋迦佛海印三昧一乘の教義分齊を開きて、一には別教。二には同教。となし其の別教中に亦二あり。一には是れ性海果分、此れ不可説の義に當れり、二には縁起因分、即ち普賢の境界なり。此の二は無二にして全體遍收すること、其れ猶ほ波水の如しと云へる、最も研鑽すべきなり。

其二 二起法門の相承

前に既に性起縁起の法門の依りて基く本據を説明せり。然るに此の二起の法門は、華嚴列祖の中、何人に依りて提唱せられしやを尋ぬるに、蓋し杜順大師に其の萌芽を發し、至相大師之を稟け、賢首大師是を大成し玉ふと云ふべし。即ち初祖杜順大師に依るに、華嚴五教止觀に性海圓明と説き、法界縁起と説き、又縁起の法は、即ち空にして無性なり。無性に由るが故に幻有方さに成ず。然かも此の法は、即ち全く無性の性を以て其の法と爲す。是の故に此の法は無性に即して、而かも相存することを礙へず。若し無性にあらずんば縁起成せず。自性不生は皆縁に従ふを以ての故に、既に全く性を收め盡す。性即ち無爲にして、分別すべからず、其の大小に隨ひて、性圓ならずと云ふこと無し。一切も亦即ち性を全ふして身と爲す、是の故に彼を全ふして此と爲し、性に即して幻相を礙へずと説き。又華嚴法界觀門には、真空觀。理事無礙觀。周徧含容觀。等の三重の觀門を明かして、宇宙萬有の理性隨縁して、千態萬狀の事象を成じ、而かも此の二不二にして、全體相融することを示せり。是れ蓋し性起縁起の法門の所談たる萌芽にして、智儼大師は是を相承して、華嚴經搜玄記第一五紙に、此の經の宗趣を

釋して因果緣起理實法界を以て宗趣と爲すと云ひ。又同第三下紙左に法界緣起を釋して、

依大經本。法界緣起乃有衆多。今以要門略攝爲二。一約凡夫染法以辨緣起。二約菩提淨分以明緣起。約淨門者要攝爲四。一本有。二本有修生。三名修生。第四修生本有。言本有者緣起本實體離諸情。法界顯然三世不動故。性起云。衆生心中有微塵經卷。有菩提大樹。衆聖共證。人證前後不同。其樹不分別異。故知本有。又此緣生文。十二因緣即第一義。言本有修生者。然諸淨品本無異性。今約諸緣發生新善。據彼諸緣。乃是妄法所發眞智。乃合普賢。性體本無分別。修智亦無分別。故智順理不順諸緣。故知修生即從本有。同性而發。故性品云。名菩提心爲性起故。問。本有修生。既是新發義非是舊。云何乃說從現其本性。答。此品爲是新生之義。說是修生與本義親。故從性起。如今經不別初順本。親對今緣疎故不說新得。此思可解。三修生者。信等善根先未前。今對淨教賴緣始發故說新生。故論云。彼無無分別智故。四修生本有者。其如來藏性隱在諸纏。凡夫即迷處而不覺。若對迷時不名爲有。故無相論云。

若有應見。又依攝論云。有得不得見不見等故也。今得無分別智。始顯法身在纏成淨。先無有力同彼無法。今得成用。異本先無。故不可說名爲本有。說爲淨修。問。若說始顯爲修起者。名曰修生。云何說顯。答。亦爲是顯修生門中義成本有。先在迷心不說體用。今時始說有彼法身。故知。與彼新生是親先有義疎。如論云。離不離無常。既言無常。不可從本有。上來四義於此緣生理實通有。若對經分文。此十番緣生唯有二門。一修生。二修生本有。餘二在性起品。第二染法分別緣生者有二義。一緣起一心門。二依持一心門。緣起門者大分有三。初眞妄緣集門。二攝本從末門。三攝末從本門。言緣集者。總相論十二因緣。一本識作無眞妄別。如論說。依一心法有二種門。以此二門不相離故。又此經云。唯心轉故。又如論說。眞妄和合名阿梨耶。唯眞不生單妄不成。眞妄和合方有所爲。如夢中事知與睡合方得集起。此是眞妄緣集之門。二攝本從末者。唯妄心作故。論云。名種子識及果報識。對治道時本識都盡。法身流轉五道名爲衆生。隨其流處成其別味。法種衆苦如此非一。故知攝本從其本也。問。當隨染時爲即染也。爲由是淨。答。體是淨本復是淨不可名隨。故知染時不可爲

淨。若爾者不應說言依如來藏有生滅心。應但是單生滅。今言相依如此說者。是有智人染淨雙證。故作是說。非局染門。三攝末從本者。十二因緣唯真心作。如波水作。亦如夢事唯報心作。以真性故。經云。五陰十二因緣無明等法。悉是佛性。又此經云。三界虛妄唯一心作。論釋云。第一義諦故也。問。攝末從本應是淨品。云何乃在染門分別。答。此攝末從本理在淨品緣生。今爲對染如幻故在染門。問。義若如此。一切淨法並對染顯妄。云何獨辨攝末從本在染緣生。答。汎論此緣起有其二種。一爲對染以顯妄法故。經云。不如實知諸諦第一義故也。二但顯淨品緣起。即是顯理之門。即如普賢性品等是也。餘義准此可解。此攝末從本。即是不空如來之藏。此中亦有空義。爲自體空。後當分別。二依持一心門者。六七等識依梨耶成。故論云。十二緣生依梨耶識。以梨耶識爲通因故。問。與上緣起一心云何取別。答。上緣起一心染淨即體不分別異。此依持門能所不同故分二也。問。如上諸義並一一門別。云何得成一證境界。答。上來所辨並約緣別顯。即是證境方便。道緣欲樂既別。即今所依觀門非一。若尋證境如上十平等說。

と云ひ。同第四紙左に性起の義を釋して、

性者體。起者現在心地耳。此即會其起相入實也。

と云ひ。又華嚴經孔目章第四紙右に、

性起者明一乘法界。緣起之際。本來究竟離於修造。何以故。以離相故。起在大解大行離分別菩提心中。名爲起也。由是緣起性故說爲起。起即不起。不起者是性起。廣如經文。此義是一乘。

と云へり。以て性起緣起の義の初祖杜順大師に其の萌芽を發し。第二祖至相大師に至りて更に深意のある所を開顯し。以て益々此の法門を弘宣せしを鑽仰すべきなり。

第二項 性緣二門の要旨

其一 緣起の要旨

凡そ緣起の義を釋するに三義あり。一に緣とは曰く因緣。起とは曰く生起。是れ因緣に依りて一切森羅の諸法を生起するの義にして、因緣生起の故に之を

縁起と云ふ。染淨迷悟、悟りて佛界を成じ、迷ひて衆生界を成じ、乃至宇宙萬有の開展する、一に是れ因縁生起ならざるものなし。是を以て因縁和合して方さに能く果を生ず、此の所生の果を名づけて縁起と爲すなり。華嚴五教章通路記第二十六に、縁起と言ふは、是れ依他の法の因縁和集して、生起する所なるが故に。今此の縁起は、是れ所縁起なりと云へる此の意なり。華嚴經玄談第六に、從縁所起、又は隨縁生起を以て縁起の義を釋し、眞如隨縁して、阿梨耶を成じ、次第に萬有を開展するを示すもの、又此の義に攝すべし。二に縁とは曰く機縁、起とは曰く説起の義なり。化他度生の爲めに、衆多無數の機縁に應じて、種種の言説を起し、教門を施設するを縁起と云ふ。華嚴五教章指事記卷上本紙十一に、不可説の性海果分因位の機縁に隨ひて、小分起るを以ての故に、彼の機縁に隨ひて、言説を發起して、其の狀を解せしむるが故なりと云ひ。華嚴五教章通路記第二に、縁起と言ふは、縁は謂く機縁、起は謂く説起なり。性海果分の自體縁を絶して、無像に像を現じ、無説に説を起し、果を取りて因を成じ、以て根機を攝すと説ける此の意なり。三に縁起とは、是れ方便縁修起の義なり。是れ佛の化導に依り

て、如説に修行して、佛果窮極の位に體達するの意にして、即ち華嚴大經に、信住向行地の五位の因行を明かす。これに依りて、菩薩此の因果行證、一皆因縁生起の道理に體達して、實踐修行を爲し、遂に盧舍那の法界に悟入するもの、是れ修起の義なり。華嚴五教章復古記第一之上八紙に、方便縁修、體窮まり位滿す、即ち普賢是れなり。今教に約し、自體相に就きて、縁に寄せて起を辨ず、故に縁起と云ふと云ひ。同通路記第二に、此の縁起とは、唯だ機縁に非ず。亦方便縁修因果に通ず。此れ即ち機縁に由るが故に、此くの如きの事を致すなりと云へる是れなり。此の三義の中、第一義は總にして、第二第三の二義は別なり。第二第三の二義の中、若し佛の普賢の大機に對して、華嚴聖典を開説し、玉ひしより論ずれば、機縁説起の義を以て主となすべく。又若し菩薩の修入より見るときは、一切の説法は、皆是れ舍那の果海に證入せしむるに在るが故に、即ち修起の義を主と爲すべし。二義通じて、教門の施設に隨ひて、主と爲り、伴と爲ることを知るべし。上來是くの如く、縁起を釋するに、種種の義あり。然るに縁起の理たる、蓋し釋迦文佛、菩提樹下成等正覺の内容にして、佛の世に出現し、玉ふ所以は、實に衆生をして、此の縁

起の正理を知らしめ、以て生死の大海を度脱せしめんが爲めに外ならず。これに依りて華嚴經第六初紙菩薩明難品には、十信の菩薩の信相を示すに就き、廣く十甚深を説くの中、其の第一が縁起甚深なり。是れ菩薩修行の最初には、先づ如實の因縁を觀じて入道の方便となし、以て次第に進修すべきことを教へたるものにして。至相大師は、華嚴五十要問答卷下十紙以下、重重の問答を設けて、菩薩の初めて修行を起すに、先づ如實の因縁を觀じて、入道の方便となすの義を釋し、賢首大師は、華嚴經探玄記第四三六紙に、梁譯攝大乘論釋第十一十四紙に、菩薩初學に先づ如實の因縁を觀じ、以て正信解を成すべきが故にと云へるを引きて、最初に縁起甚深の義を辨する所以を説明せり。既に縁起の理は、菩薩の先づ學せざるべからざる要件たり。是を以て釋迦文佛の菩提樹下に端坐し玉ふや。即ち順逆兩重の十二縁起を觀じて、等正覺を成じ玉へり。(此の義前章に既に辨せしが如し。)抑も吾人凡愚の縁起の理に達せざるは、俱生分別の二執の無智に依りてなり。俱生起とは、吾人凡愚は、一切の諸法は、皆是れ自心所現のものなることを知らざるが故に、妄りに心外に境を認め、我なり、我所なりと、我法の執心を起すを

云ひ。分別起とは、邪師、邪教、邪思惟の三縁に由りて、斷常の見を起し、諸法は如幻假有のものたるの理を知らず、徒に妄想構畫を逞ふして、遂に生死海中に沈淪するに至るを云ふ。之に依りて佛は是を哀憐して、教ふるに縁起の正理を以てし、衆生をして、斷常の見を捨てしめ、如實因縁の理を悟らしめ玉ふ。然るに其の縁起の法に、教に隨ひて分別すれば、種種の別を生じ、淺深不同あり。一に業感縁起。二に賴耶縁起。三に眞如縁起。四に法界縁起と云ふ是れなり。此の四種の縁起は、次の如く、淺深の次第にして、佛所説の法門、廣漠なりと雖も、要を取りて之を云へば、實に此の四種を出でざるなり。初めに業感縁起とは、自の業力の所感に依りて、宇宙森羅の萬象を説明せんとする、諸部の小乘教、就中、上座部系に屬する、薩婆多有部の所説にして、即ち中、長、雜、增一の四阿含經に説く、四諦五果等の法門是れなり。此の縁起は、婆沙、俱舍等の諸論に傳承し詳説して、四諦無我の眞理を以て、外道の邪因無因等を對破し、無爲寂滅の空理を證するを以て其の所詮と爲す。二に賴耶縁起とは、即ち阿賴耶識縁起にして、先きに説く業感縁起論に在りて。萬有開發の原因を、自己の業力に歸したるを、更に其の根本を

究尋して、其の業力を保持する第八阿頼耶識に就きて、萬有の開發を論ずるものは是れなり。深密楞嚴等の經、瑜伽顯揚、成唯識等の諸論に之を明かし。唯識法相宗の所談なり。其の意に依るに、吾人衆生は、無始以來法爾として、各自に八種の識を具足せり。此の中第八阿頼耶識は、一切諸法の種子、即ち色心依正等ありて、あらゆるものを開展すべき、功能勢力を具有して、其の功能勢力、即ち種子より總べての境界の所有の物象物體を開展するものなりと云ふ。是れ阿頼耶識を以て、宇宙萬有の本源總體と爲すものなり。此の法門に在りては、二空唯識を宣説して、聲縁の二乗を誘引して、大乘に向はしめ。又、地前三賢の菩薩をして、地上の聖智を得せしむるを以て宗致とす。三に眞如縁起とは、是れ眞如如來藏の縁起を論ずるものにして、楞伽密嚴等の經、起信實性等の論の所説是れなり。此の法門に依るに、如來藏とは、具さに如來藏心と云ひ、所謂自性清淨心是れなり。此の心は、一法界の大總相法門の體と云ふべく。又、總該萬有の一心とも稱すべき、非物非色の根本的理體にして。此の心に依りて、二種の門あり、一に心眞如門、二に心生滅門なり。心眞如門とは、一心即ち宇宙の本體實相を論ずるものにして。心

生滅門は、其の本體實性を相用の方面より論じ、眞如如來藏が、隨縁して差別の諸相となるを示すものにして、眞如縁起と稱するは、正しく此の點に在り。蓋し眞如縁起説に、事理相即し、眞妄通徹して、眞如薰變の理を説くは、所謂登地以上の菩薩にして、始めて知り得べきものにして、其の義の甚深なる、彼の頼耶縁起の比に非らざるなり。四に法界縁起とは、是れ無盡縁起大陀羅尼の法門にして、華嚴別教一乗の所談なり。法界とは、前に既に説明せし如く、是れ宇宙萬有の總性に於て、所謂一眞法界是れなり。此の一眞法界は、總收法界爲一縁起と稱して、無限の宇宙萬有を收め來りて一團と爲し、此の一團の萬象は、皆各々互に密接の關係を保有して、須臾も獨立孤存すること無く。此の一物は、他の一切萬物に相望して縁と爲り。他の一切萬物は、此の一物に相望して、亦悉く縁となりて、自他互に相資け、相待ちて、圓融無礙ならざるなく。一法の起るれば、必らず他の一切を具有して、互に主と爲り、伴と爲り。一即一切、一切即一にして、無盡無盡なり。故に又、無盡縁起の名あり。蓋し法界縁起の法門は、實に嚴家の深義にして、彼の十玄縁起と云ひ、六相圓融と稱し、又四法界義と説くもの、實に此の縁起の説明に外ならず。

以上是くの如く縁起の法門に四種の別あり。淺より深に次第して、其の法界縁起の法門は、是れ別教一乘の所談。眞如縁起の法門は、終教の所談。賴耶縁起の法門は、始教の所談。業感縁起の法門は、小乗教の所談なるも、又總じて同教位の談と爲すべし。然るに、此くの如く、四種の別ありと雖も、是れ唯だ所被の機の、淺深不同に依るものにして、要は唯、釋迦文佛海印三昧所現の縁起甚深の法門のみ、深く思ふべきなり。

其二 性起の要旨

性とは、人人箇箇本具足圓成の心性にして、所謂不生不滅平等一相、名字の相を離れ、心念の相を離れ、唯だ是れ不可説不可説のものたり。所謂言説の極言に因りて言を遣るとは、即ち此の意なり。起とは顯現の義、舉起の義、又發起の義なり。此の不生不滅衆生箇箇の心地に現在して、其の法の如く本具の性なるが故に起と云ふ。即ち起は不起の起にして、其の本位に住するの意なり。之を列祖の釋文に見るに、杜順大師は、華嚴五教止觀紙十五に、此の法は即ち全く無性の性を以て、其の法と爲

す。是の故に此の法は無性に即して、相存することを礙はずと云ひ。至相大師は、華嚴經搜玄記第四紙十二に、性とは體。起とは心地に現在するのみと釋し。華嚴經孔目章第四紙十五には、性起とは、一乘法界縁起の際を明かす、本來究竟じて、修造を離る。起は大解大行離分別菩提心の中に在り、名づけて起と爲すなり。此れ縁起の性なるに由るが故に、説きて起と爲す。起即ち不起、不起とは、是れ性起なりと釋せり。蓋し至相大師の意は、出纏如來の果性は、衆生箇箇の心地に現在して、本來増せず減せず。修行の功に依りて、初めて作佛するに非ず、本來本具なり。起即ち不起、不起の自體、即ち本具の性なりと顯はすの意なり。賢首大師に依るに、華嚴經探玄記第十六紙十六に、不改を性と名づけ、顯用を起と稱す。即ち佛陀の性起なり。又眞理を如と名づけ、性と名づけ。顯用を起と名づけ、來と名づく。即ち如來を性起と爲すと云ひ。又華嚴經問答卷下紙十五に、性起とは、即ち本具の性にして、縁に従ひて有るにあらず。縁起と言ふは、此の中之に入るの近方便なり。謂く法は縁よりして起る、縁起は自性無きが故に、本具の性を起す、即ち其の本法性不起の中に入れて之を解せしむ。其の性起は、即ち其の法性一切の

性なり。法は即ち其の無記を以て性と爲すが故に、即ち其の法性は、皆不起を以て起と爲すと釋せり。蓋し賢首大師の意は、人人箇箇本具の眞性は、迷ひて在纏の位に在るも、悟りて出纏佛果の位に在るも、其の性不改にして、増せず減せず、淨ならず垢ならず。而かも迷ひては、三界六道の用をあらはし、悟りては佛果の大用を顯はす、故に性起と名づくべし。又一實眞如の理體を、名づけて如と云ひ、性と云ひ。其の理體が種種に作用を顯示するを、起と名づけ、來と名づくと云ふに在り。賢首大師の華嚴經探玄記の釋に依るに。寶王如來性起品は、性起の法門を明かすを以て、宗趣と爲すと云ひ、十門を開きて、此の義を解釋せり。其の意に依るに、一に分相門とは、性起を釋するに、性と起とに分ち。性は即ち性起の體、起は即ち性起の用とし。此の二種の方面より、釋するものにして、性に理行果の三種あり。起に亦一に理性起。二に行性起。三に果性起の三種あり。並びに是れ性起の體を、其の發動せる理行果の三方面より望み、其の徳用に約して、次第の如き三位を施設せるものにして、敢て性起其のものに、三種の別あるに非ず。一に理性起とは、理は衆生本具の理性に名づけ。此の理性は、了因即ち菩薩所修の

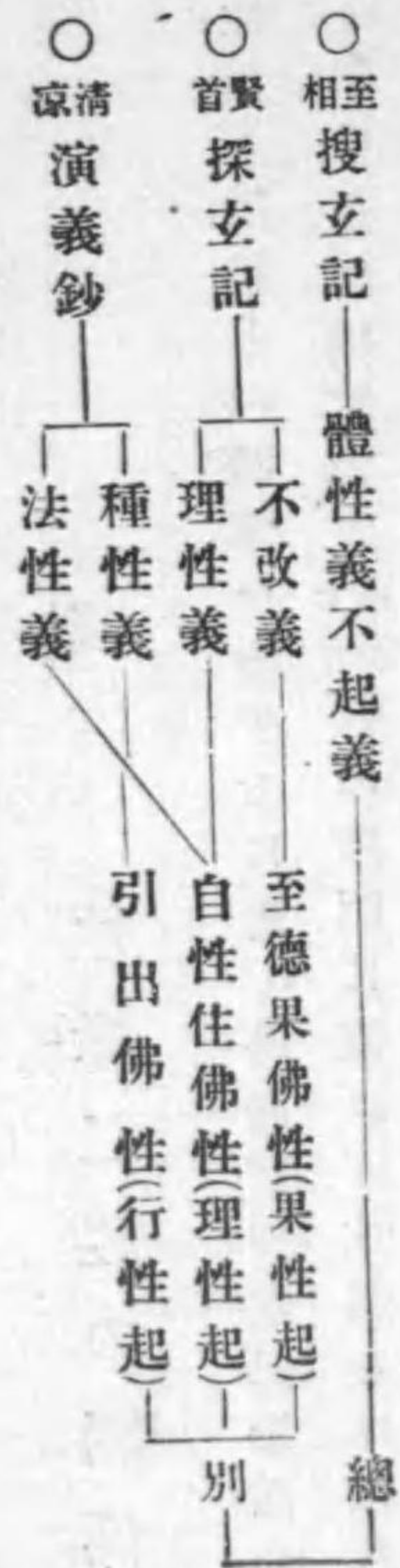
善根を待ちて、舉體顯現し、淨縁起を成す是を起と云ふ。三佛性の中の自性住佛性と、其の義相大に同じ。二に行性起とは、修行の義なり。知識經卷の聞熏力に依りて、本有の理性を資發し、遂に佛果を感得するを起と云ふ。三佛性の中の引出佛性に當り、聞熏力に依るが故に、遂に本有の佛性を引出して、佛果に至たらしむるなり。三に果性起とは、果は理行圓成の果。起は佛果上の應機化用を云ふ。即ち佛は、理行圓成して、淨法満足し、化用無礙にして、應機自在ならざるなし。三佛性の中の至徳果佛性は、是れにして、修行満足して、佛果に至り、本有の佛性の了了に顯現せる位なり。第二に依持門とは、上に説く、分相門の所説に基き、更に前後相望して、依持の義を辨するものにして、一に菩薩位に約すれば、行證理成は、則ち理を以て性と爲し、行成を起と爲す。是れ凡位には性ありて、起無きが故なり。二に佛の自徳に約すれば、證圓成果は、則ち理行を性と爲し、果成を起と爲す。三に唯、性起に就けば、理行圓成の果を性と爲し、赴感應機の用を起と爲す、是れ理行業用に徹至するが故なり。第三に融攝門とは、既に行は理に依止して起れば、行は虚にして、性は實なり。虚は盡き實は現す、起は唯性起なり。他の二性起も準

じて知るべし。第四に性徳門とは、衆生本具の性に過恒沙の性功德を具足するを云ふ。大乘起信論（義記卷中本^{七紙}）に、如實不空、自體あり、無漏の性功德を具足するを以ての故にと云ひ。又（義記卷下本^{紙二十三}）に、眞如の自體相とは、一切の凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、諸佛増減あること無し。前際に生ずるに非ず。後際に滅するに非ず。畢竟じて常恒なり。本より已來、自性として、一切の功德を満足す。所謂自體に大智慧光明の義あるが故に、徧照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、清淨不變自在の義の故に、是くの如きの、過於恒沙の不離、不斷、不異、不思議の佛法を具足し、乃至満足して、少くる所あること無しと云へる此の意なり。是の故に修行の力に藉りて、引きて果位に至るを、果性と名づけ。果性感に赴くを、性起と名づくるなり。第五に定義門とは、是れ華嚴經第三十六寶王如來性起品所明の性起に就きて、定義を立つるの門なり。これに四義あり、一に果海に約し。二に性體に約し。三に緣無性に約し。四に淨用順性に約する是れなり。初めに果海に約すとは、果海の自體は、不可説不可説性にして、機感に依りて緣起あり。緣起ありと雖も、起は本來不起の起に

して、自性に順するが故に、緣起の當體其の儘にして、緣を廢して、性起と名づくることを得べし。二に性體に約すれば、既に性體は不可説不可説なりと雖も、若し一言名字に顯はせば、即ち起なり。然れども、緣起の當體、其の儘にして、本具の理性なるが故に、性、即ち起にして、起は即ち性なり。故に性起と名づけて、緣起とは名づけざるなり。三に緣無性に約すとは、起は緣を待ちて起ると雖も、其の緣は、必ず無性なり。緣既に無性なり、故に性起と名づく。無住の本より一切の法を立つと云ふは、此の意なり。四に淨用順性に約すとは、是れ正しく、性起品所説の性起にして、此の性起は、如來の淨用に依るが故に、能く眞性に順じて、敢て違する無し、故に性起と云ふなり。第六に染淨門とは、是れ性起の染淨を定むる一門なり。此れに兩意あり、一に増勝門に依りて論すれば、性起の法門は、唯淨と云ふべし。蓋し華嚴經は、是れ果上顯現の法門にして、別して性起品は、具さに寶王如來性起品と名づけて、佛果上の妙相妙用を説くが故なり。二に尅實門に依りて論すれば、性起は、迷悟染淨情非情一切に通じて、森羅の萬象、皆悉く自性本然の性に非る無し、何ぞ佛果にのみ限るべき。故に華嚴經第三十六^{七紙} 寶王如來

性起品には、奇なる哉、奇なる哉、一切の衆生の身中に、如來の智慧徳相を具す(取意)と云ひ。大方廣圓覺修多羅了義經集註卷上紙四十九には、始めて知る、衆生本來成佛と云へり。第七因果門とは、菩薩の善根も、亦性に順じて起る。然るに、性起品には、唯佛果を辨じて、菩薩を辨せざるは、是れ行未圓の故なり。若し性起の因及び眷屬の義に約すれば、皆性起に攝すべし。第八に通局門とは、既に性起は唯佛果に據ると云はゞ。華嚴經第三十六紙七性起品に、菩薩自ら身中に性起菩提あることを知る。一切衆生の心中も亦爾かるなりと説くは、如何と云ふに、若し三乗教は、衆生の心中に、但だ因性有りて果の用相無し。此の圓教には、盧舍那の果法は、衆生界を該ぬ。是の故に衆生の身中に亦果相あり、若し爾からずば、則ち但、是れ性にして起の義無し。第九に分齊門とは、既に此の眞性は、舉體隨縁して、一切に融通するが故に、彼の所起亦一切を具し、分圓無際なり。是の故に、分の處に、皆悉く圓滿し、皆無盡法界を具せざること無し。是の故に一切時、一切處、一切法に遍して、因陀羅網の如く、具足せざること無し。第十に建立門とは、法門無礙なり。何が故に、此の經性起品に、一に總じて多縁を辨じ、以て正覺を成じ。二に正

覺身。三に語業。四に智。五に境。六に行。七に菩提。八に轉法輪。九に入涅槃。十に見聞恭敬供養の得益の十種を辨するやと云ふに。蓋し是れ無盡を、表せんが爲めなり。以上性起の法門を釋するに、是くの如き十門の分別あり。以て其の要義を知るべし。第四祖清涼大師に依るに。華嚴經疏演義鈔第五十第一冊第十一卷に、性に二義あり、一に種性の義。因所起の故に、二に法性の義。若しくは、眞若しくは、應皆此の生の故にと釋せり。是れ清涼大師は、唐譯華嚴經を疏譯せるが故に、即ち性起妙徳菩薩の因に就きて明かす。故を以て種性の義、即ち賢首大師の所謂行性起を主とし、法性の義、即ち理性の義を伴とせるなり。猶ほ清涼大師の義は、下に至りて詳釋すべし。諸祖の釋義を表示すれば左の如し。



其三 性縁一起の關係

性起と縁起との關係を論ずるに、若し華嚴經搜玄記第四紙十五、華嚴經孔目章第四紙十五、華嚴經問答卷下紙十五等の所明に依れば、性起とは、人人箇箇の心地に現在する體性、其の者に名づけて、即ち縁起の性、縁起の際を性起と云ひ。縁起とは、其の縁より起る義邊に就きて、從縁生起を縁起と名づく。又華嚴經遊心法界記紙二十五、華嚴經疏演義鈔第五十記、第一冊第十一套、第一冊三十四紙右に依るに、縁起の法の無自性の點より見て、縁起の動を混じたるを、法性に從へて性起と云ひ。法性より起れども、是を縁の邊に從えて縁起と云ふ。而して此の兩様の解釋は、本と是れ一義の始終にして、其の性起と云ひ、縁起と云ふも、唯是れ一體上の義分と云ふべく、敢て別體あるに非るなり。既に是くの如く、一體上の義分なり。然るに二義相分立したる上は、必ず其の間に差別する所なかるべからず。即ち性起とは、人人箇箇本來具足圓成の本體理性にして、是れ因縁を待ちて、始めて生起する所のものに非ず。所謂性とは體。起とは不起の起にして、箇箇の心地に、本來成就現存するものなり。

之に反して、縁起は因縁を待ちて生起するものにして、即ち修成に約す。若し一乗の縁起に依りて、人に起する時は、十身盧舍那が、普賢の機に對して、説起するを縁起と云ひ。法に約する時は、因果縁起理實法界に名づけ。又若し三乘一乘相對すれば、三乗の縁起は、一相孤起。一乗の縁起は、主體具足、重重無盡にして、所謂無盡縁起を成す。華嚴經問答卷上紙二十七に、三乗の縁起は、縁集れば、有り、縁散すれば、即ち無し。一乗の縁起は、即ち爾らず。縁合すれども有ならず、縁散すれども無ならずが故にと説き。三乗の縁起は、一心真如中に、滿徳を具すと云ふも、此の滿徳其の物が、因縁に由りて、直ちに其の儘顯現するに非ず。唯、因縁に由りて顯現さるべき徳として具するのみにして、全く修起のものなり。一乗の縁起は、一切の滿徳其の物が、因縁に由りて、直ちに其の儘顯現すと説くを以て、全く性起なり。即ち彼れは修顯にして、此れは本有なり。三一兩乗の縁起に、是くの如きの差別ありと釋し。又華嚴經問答卷下紙十五に、性起及び縁起の二言に、何の別ありやと言ひ、性起は即ち本具の性にして、縁に從ひて有なるにあらず。縁起は此の中之に入るの近方便なり。謂く法は縁よりして起る、縁起は無自性なるが

故に本具の性を起す。即ち其の本法性不起の中に入りて、之を解せしむ。其の性起は、即ち其の法性一切の性なり。法は即ち其の無起を以て起と爲すが故に、即ち其の法性は、皆不起を以て起と爲すと云へり。是くの如く、性起と縁起とは、一體上の義分にして、一は本有。一は修成と云ふべきも。又彼の大乗起信論義記卷中本紙^{十三}右に、眞如に二種の義あり、一に不變の義。二に隨縁の義なりと云ふ。不變の義とは、是れ性の意、隨縁の義とは、是れ起の義。即ち眞如の不變と、隨縁との二義は、是れ性起の義なり。此の隨縁の義に依りて、若し因縁至るあれば、爰に縁起を成すと説くを得べし。華嚴經孔目章第四^{紙十五}右に、性起者。明一乘法界。縁起之隆。本來究竟。離於修造。と云ひ。華嚴經玄談第六に縁起を釋して、從縁所起、又は隨縁生起と云へるものは、是の意なり。既に性起は、一乘法界縁起の際なり。此の故に、若し因果二分を以て、性起と縁起とに配すれば、性起は即ち果分不可説にして、是れ十佛の自境界に當り。縁起は即ち縁起因分にして、是れ普賢の境界なり。而かも此の二は、無二にして、全體遍收すること、猶ほ波水の如し。華嚴五教章卷上^{右初紙}に、釋迦佛海即三昧一乘の教義分齊を分ちて、二となし、一に

別教。二に同教なり。初の中に亦二あり。一には、是れ性海果分、是れ不可説の義に當れり。二には、是れ縁起因分、即ち普賢の境界なり。此の二は無二にして、全體遍收す、猶ほ波水の如しと云へるもの、即ち是れなり。而して更に之を華嚴經の所説に見るに、此の經五分の中、第三の修因、契果、生解分に、三十品あり。此の中初め如來名號品より、佛小相光明切徳品に至る、二十八品は、是れ差別の因果にして、信住行向地の五位の差別を示して、三徳差別の果相を説き。又次ぎの普賢菩薩行品及び寶王如來性起品の二品は、是れ平等の因果にして、普賢自體の圓因に依りて、舍那平等の果を得ることを示せり。此の故に、此の二種の因果を以て、性縁の二起に配するに、前の差別の因果は、是れ縁起門にして、後の平等の因果は、是れ性起門に當つべし。縁起門は、縁起相由の故に一多相攝し、一位即一切位、一行即一切行にして、初發心の位に、住行向地等の一切の行位を該攝して、此の身に正覺を成すと説き。性起門は、機の執情を拂ひて、理智の法體に就けば、本來成佛、無念成佛の故に、即身是佛と説く。即ち前者は、即身成佛門にして、後者は、即身是佛門なり。又之を華嚴五教章上卷、纂釋第十五及び同見聞第五等^{五紙}に依る

に、華嚴五教章義苑疏第三左十紙の所明に依りて、見聞解行證入の三末を以て、性起縁起の二門に配して、縁起は解行生。性起は是れ證入信と云へり。これを因果の二分に配するに、解行生は、蓋し因分にして、悟入位は即ち果分なり。是くの如く、性縁の二起を、比較分判するに、各々其の據る所ありて、即ち義門を異にせり。然るに二起の寛狹を論するに、古來異説あり。二起の間に、寛狹ありとなすは、一に縁起は淨縁起、染縁起の二あり。即ち染淨に通ずと雖も、性起は唯淨にして、染に通せず。又縁起は教理理事等の十對二十事、即ち事理一切の萬法を攝して、甚だ寛廣なりと雖も。性起は唯、理性の一邊に限りて、事法に通せず。又縁起は、華嚴五教章卷中紙十四右十立縁起無礙法門義の所明に依るに。法界縁起は、乃ち自在無窮なり。今要門を以て畧攝して、二と爲すべし。一には究竟果證の義を明かす、即ち十佛の自境界なり。二には縁に隨ひ、因に約して教義を辨す、即ち普賢の境界なりと説きて。因果二分の法界縁起中に、攝在することを説けり。然るに性起は、前に説明せるが如く、唯、果分に限りて、因分に通ずるの義なし。又、凝然大徳の華嚴五教章通路記の所明に依るに、縁起門の中に、不可説の果分ありとし、單

に可説に限らずとなせり。然るに性起は、唯、可説の分齊にして、不可説の果海は、性起中にはあるべからず。此の性起と縁起との二門には、自から寛狹の別を成して、縁起は寛にして廣なり。性起は狹にして隘なりと云ふ。之に反して、寛狹の別なしと爲すは、性起は蓋し一乘縁起の本際にして、其の縁起の際たる性起が、因縁に依りて生起せるが是れ縁起なり。果して然れば、縁性の二起は、全く是れ全體相即して、性起を全ふしたる縁起、縁起を全ふしたる性起なるが故に、本來彼此の寛狹を分つべきものに非ず。華嚴五教章に、夫法界縁起乃自在無窮と標し、下に、究竟果證の義と、隨縁約因の義を説くは、蓋し法界縁起を、直ちに分別せるにあらずして、法界縁起の言は、即ち單なる總標にして、敢て分立相對的の法義に非るが故に、直ちに此の文を以て、性起縁起と二門を分判するに比すべからずと云ふ。案するに、此くの如き兩説ありと雖も、其の寛狹ありとするは、且らく法門施設の邊に依るものにして。若し尅實して論すれば、本より差別あるべきものに非ず。一切の諸法、悉く此の二門を具足して、當體全是なりと云ふべし。二起の勝劣を論するに、又異説あり。其の無勝劣なりとするは、縁性の二起は、共に一塵一法、悉

皆具足のものにして、性起なるが故に、能く從緣生起し、從緣生起なるが故に、能く性起海に悟入すべしと云ふ。此の故に二起は是れ全然同價值にして、敢て勝劣を論すべきものに非ずとし。又勝劣ありとするに、第四祖清涼大師の華嚴經疏演義鈔第五十記第一輯第十一卷第一冊三十三紙左等に、性起門を上根觀境に配し、緣起門を中根の觀智に配し、或は性起門を、別教一乘とし、緣起門を同教一乘と爲すに依りて、緣起の諸法相即相入、一多無盡の宗趣は、甚深にして、知ること難しと雖も、唯、事相上の觀境にして、其の旨遠きにあらず。然るに性起は、法性實現の法門にして、直ちに法性を所觀の境と爲す。此の法性たるや、諸法の裏面に具する理性にして、甚深の法なれば、遙か、事相緣起の觀に超過するものなりと云ふ。然るに是くの如く、勝劣を論ずるに、有無の兩論ありと雖も、一は法體の上に在りて、無勝劣を論し。一は機の趣入に基きて、勝劣を論ずるものにして。全然其の主張の論據を異にするが故に、所謂各據一義にして、敢て水火相容れざる如きものに非ず。上來説きし二起の關係を知るべきなり。

第三項 性起と性惡説

其一 清涼、圭山兩大師の性起論の要旨

宇宙森羅の現象は、若し因緣和合せざれば、則ち止みなん。苟も因緣和合すれば、則ち千態萬狀、或は善となり、或は惡となり、或は美となり、或は醜となり。幾多の事相實に止まることなし。蓋し因緣共に自性無く、互に有力と爲り、無力と爲り、相由相成するが爲めに、諸法を生ずることを得るものにして。因緣に若し自性ありとせんか、即ち斷常の偏に墮して、能く自在に和合し、自由に顯現すること無く、能く森羅の物象を成ずること無し。蓋し有力無力相由相成し、以て諸法を成ずるは、此れ一に無自性なるの致す所なり。此の無自性を稱して、性起と云ひ。有力無力相由相成して、染淨の諸法を生ずるを緣起と云ふ。然れば染淨の緣起は、全く性起の無自性に依りて顯はれ。性起の發動は、全く緣起の因緣に依るなり。賢首大師の華嚴遊心法界記紙左二十五に、
 上方無力相由。名爲緣起。何以故由彼此相奪果方生故。即彼此相由。而無自

性。無性爲果而生。生即不生。名爲性起。何以故。即果自體而是性故。と云へり。是くの如く、染淨の緣起は、全く性起の無自性に由りて顯はれ。性起の發動は、緣起の因緣を待ちて起る。而して緣起既に染淨ありとすれば、其の緣起の際たる性起も、亦染淨の二に通すべきが如し。是れ緣起に染淨の別あるが如く。性起にも亦等しく染淨を具すべきや、又或は唯淨に限るべきやの論ある所以なり。是を華嚴の列祖に見るに、若し三祖賢首大師の意に依れば、性起は唯淨に限るべしとし。四祖清涼大師、五祖圭山大師の意に依れば、性起は性染にも通すべしと云ふ。此の意を解するに、初めに清涼、圭山兩大師の性起論の要義を説述すべし。

清涼大師の華嚴經疏演義鈔第五十記第一輯第十一卷第一册第三十四紙左に依るに、性起の性を釋して性に二義あり、一に種性の義、因所起の故に。二に法性の義、若しくは眞若しく應、皆此の生の故にと云ひ。又此の性起に自から二義あり、一には從緣無性にして、性起と爲す。二には法性隨緣の故に、性起と名づく。晉譯華嚴經に、寶王如來性起品と云へる。唐譯華嚴經には、如來出現品に作れり。出現の義を、亦是緣起

と名づけ、亦是性起と名づく。若し相を取りて説けば、緣を攪りて出現するが故に緣起と云ふ。是れ衆生の業に由りて、如來の大悲を感じて出現して、八相成道するが故なり。又法性より生ずるが故に、性起と名づく。今從緣無性を以て緣起を、即ち性起と名づけ、又淨緣起常に、性に順するを、亦性起と名づく。或は云ふ、性起は唯淨にして、緣起は染に通ず。緣起即性起と云ふべからずと。然るに凡そ緣起に淨緣起と、染緣起との二あり。淨緣起とは、如來の大悲、菩薩の萬行等を云ひ。染緣起とは、衆生の惑業等を云ふ。若し染を以て淨を奪へば、則ち衆生に屬すと名づくべし。或は云ふ、緣起は事に約し、性起は理に約す。緣起即ち性起とは、説くべからずと。然るに從緣無性にして、方さに性起を顯はし。又緣を見るに由りて推して、性起を知るなり。緣を離れて、何の性をか論せん。此の故に緣起は、亦性起と名づくべしと爲し。所謂緣性二起相即の義を立てたり。此の義を推して案するに、既に緣起に染淨の二緣起あり。即ち性起も、亦染淨に通せざるべからず。第五祖圭山大師の華嚴經普賢行願品疏鈔第一左九紙圓覺經

畧疏卷上之二左六紙、同畧疏之鈔第七紙右七等の所説に依るに。凡そ一法界心の諸法を成するに、總じて二門あり。一に性起門。二に緣起門なり。性起とは、性は即ち一眞法界にして、起は即ち萬法なり。是れ法界の性全體起して、一切諸法と爲ることを顯はすものにして。法相家に、眞如の凝然一向不變の義を説く、無性起の義には同じからず。今爰に説く、一眞法界、即ち眞性とは、湛然靈明全體即用にして、法爾として常に萬法となり、世間出世間の一切の諸法を成す。性の外に更に別法無し。所以に諸佛と衆生と交徹し、淨土と穢土と融通し、法法彼此互に收め、塵塵悉く世界を包含し。相即相入、無礙鎔融して、十立門を具し、重重無盡なり、良とに是れ性起に由るなり。二に緣起門とは、此れに染緣起、淨緣起の別あり。染緣起とは、諸の衆生は、中に全く如上の眞性及び性所起の過塵沙の善法ありと雖も、良とに之に迷ふに由りて、自ら證礙せず、即ち顛倒して、過塵沙の惡法を遍計し、成住壞空遷流して、絶へざるを云ひ。淨緣起とは、聲聞緣覺權教六度の菩薩等の分淨、及び頓悟漸修の諸の圓淨の菩薩佛の若しくは心、若しくは境、若しくは依、若しくは正、若しくは人、若しくは法を云ふ。此の性緣の二門の中、性起門は、即ち

別教一乘の義にして、迥かに諸教に異り。緣起門は、即ち同教一乘の義にして、普ねく諸教を攝す。清涼大師の全揀諸宗即別教性起義、全收諸宗即同教緣起義と説けるは、即ち此の意なりと云へり。以て清、圭兩大師の性起論の要旨を知るべし。

其二 清涼、圭山兩大師の性惡論

賢首大師に依るに、華嚴經探玄記第十六紙十八に、性起の染淨に通ずるや否やを釋して、

染淨門者。問。一切諸法皆依性立。何故下文性起之法。唯約淨法不取染耶。答。染淨等法雖同依眞。但違順異故。染屬無明。淨歸性起。問。染非性起。應離於眞。答。以違眞故不得離眞。以違眞故不屬眞用。如人顛倒帶靴爲帽。倒即是靴故不離靴。首帶爲帽非靴所用。當知此中道理亦爾。以染不離眞體故說衆生即如等也。以不順眞用故非此性起攝。若約留惑而有淨用。亦入性起收。問。衆生及煩惱皆是性起不。答。皆是。何以故。是所救故。是所斷故。所知